

アジアの人々の協働から学ぶ XXVI

— learning together in a cooperative work —



桃 山 学 院 大 学

第26回国際ワークキャンプ報告
(インドネシア)

A Report of International Work Camp (Indonesia)

2012



もも べてい
はじめ りやうた
しんご めい

スイワラマさん
みやげ先生
たにづめさん
みわさん

チャコレン
さかぐち先生
フォルマン

あーちゃん
あかり たかや
たかき ヴサカ
のあえりん

2012
8.20~9.06

すず
たけし
こーすけ
あそ

さき
ゆき
あそ

ゆき
しん
しん

まほ
おん
しん



Widhya Asih
raising Bali's Children







terima
★
kasih

WELCOME
TO
Widhya Asih II
Creating a better Culture

Bagus

MAGI MAO
YANG 3 GUN
NAND
RUMAHNYA
SANA
SUDHAR



目 次

語句説明	1
皆様に感謝 青野正明	2
アスラマの子ども達 三宅亨	3
毎年違う国際ワークキャンプ 松平功	5
初めてのIWCから得た経験 阪口祐介	8
国際ワークキャンプの引率を終えて 谷詰茉央	12
Members of IWC26	14
テーマ	15
募金活動	16
調理実習	17
合宿	18
2012年度 第26回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表	19
入村式	22
プリンビンサリ村	23
プリンビンサリ村地図	24
アスラマ	25
アスラマ地図	28
アスラマの子ども達	31
オープニングセレモニー	32
日本語プロジェクト	33
小学校訪問	34
中学校訪問	35
高校訪問	36
第26回IWCのワーク内容	37
交流会	38
スポーツ交流	41
日本食	42
衛生指導・掃除	43
出身村訪問	44
離村式	45
第5アスラマ	46

ソカ村	47
ウンタル・ウンタル	48
大学訪問	49
アガペー・フェスティバル	50
文化探訪	51
エバリュエーション	52
参加学生のレポート	
「たくさんの人達との出会い」	学生隊長 太 西 晋 55
「素晴らしい出会い」	学生副隊長 吉 田 真 悟 57
「Terima Kasih」	香 川 友 希 61
「学びと成長」	香 川 貴 俊 63
「大きな愛に包まれて」	高 橋 創 66
「インドネシアでの18日間」	寺 田 朱 里 69
「振り返ってみて今」	中 平 菜 摘 72
「反省と感謝」	中 村 紗 希 76
「できること・やれること・望むこと・できないこと」	美 浦 純 79
「たくさんのお出会い」	石 関 真 帆 82
「インドネシアでのとても充実した日々」	花 澤 広 介 85
「経験という名の宝物」	本 村 竜 汰 88
「Syukur～すべてに感謝」	入 宮 由 季 91
「アスラマの子ども達」	山 口 明 理 94
「心に残るもの」	吉 田 芽 生 96
「友と共に学ぶ」	池 田 鷹 弥 99
「何ができたのか」	吉 田 桃 子 102
「報告書」	喜 田 将 王 105
	Adeodatus Hyronimus 108
	Yusuf Edward 108
	Ishak Prenamia 109
	Novelyn Rossy Andrear 110
	Betty Alfasia Sukariath 111
	Rosvita Flaviana Osin 112
第26回国際ワークキャンプ預り金精算書	113
第27回国際ワークキャンプ参加者募集要項	114
編集後記	116

語句説明

あ行

- IWC……………International Work Campの略であり、「ワークキャンプ」と略して使っていた。今年度で26回目である。
- アスラマ……………バリ・プロテスタント・キリスト教会によって設立された児童施設で現在バリ島に7ヶ所ある。私達はプリンビンサリ村にある第2アスラマで活動した。
- 石井美和さん……………現地の看護師の方。IWC26の健康面だけでなく、精神面、通訳などもサポートしてくれた。
- イブ……………インドネシア語でお母さん。ホームステイ先の母やアスラマで働く女性もイブと呼ぶ。
- ウィディア・アシ財団……………バリ・プロテスタント・キリスト教会の傘下であり、アスラマを運営する組織である。

か行

- 交流会……………子ども達との親睦会。
- ガムラン楽器……………インドネシアの伝統的な民族打楽器。

さ行

- 事前研修……………春学期からインドネシアに出発するまでにインドネシアの語学、文化を学ぶ。班ごとの準備もした。
- スイクラマさん……………アスラマ出身。桃山学院大学に2年間留学経験あり。7ヶ所あるアスラマの統括責任者で、バリ側のワークキャンプのコーディネーター。私達の通訳も担ってくれた。

た行

- チャブレン……………大学付牧師。

な行

- ネコ……………コンクリートを運ぶ際に使用した一輪車。

は行

- バティック……………インドネシアの民族衣装。
- ババ……………私達のホームステイ先のお父さんをババと呼んでいる。
- ピサングレン……………インドネシア風バナナの天ぷら。バリで人気のおやつ。
- プリンビンサリ村 ……私達がホームステイした村。バリ島西部のジュンブラナ県ムラヤ郡に位置する。バリに住む多くの方はヒンドゥー教であるが、プリンビンサリ村はキリスト教徒が開拓した村である。
- フォルマンさん……………ウィディア・アシ財団職員。インドネシアの学生のお兄さんの存在であり、スイクラマさんのアシスタント。

ま行

- マンディー……………日本語で「お風呂」、「水浴び」という意味である。
- ムラヤ……………ムラヤ郡ムラヤ村

皆様に感謝



国際ワークキャンプ実行委員長 青野 正 明

今年の4月にキリスト教センター長・IWC実行委員長に就任し、IWCのことがまだあまりわからない頃に、2012年度のIWCの仕事が始まりました。最初は戸惑いもありましたが、IWC実行委員の方々の多大なご協力を得て、IWCは順調に動き始めました。

まず、学生応募者の中から参加者18名が決定されました。彼らは5月10日から毎週木曜日5限目に事前研修に参加して、インドネシアの現地の状況、社会・文化や宗教、現地スケジュール、健康管理などについて学びました。三宅亨先生（経営学部教授）、深見純生先生（国際教養学部教授）、小池誠先生（国際教養学部教授）、松平功チャプレン、今井敏子さん（保健室看護師）、スイクラマさん、第25回IWC参加学生にお世話になりました。

それから、5月7日から毎週月曜日5限目にインドネシア語の勉強も始まりました。パムンカス先生（本学兼任講師）に教えていただきました。

バリの現地では主目的であるワーク以外に、各地の訪問やホームステイ等でも多くを学びました。たとえば、ソカ村見学、プリンビンサリ村訪問とホームステイ、ムラヤ公立高校訪問、児童養護施設の子どもの出身村訪問、プリンビンサリ教会訪問、小中学校訪問、ホームステイ先家族と子ども達を招いた日本食パーティなどです。それぞれ関係の皆様には大変お世話になりました。

その間ずっと参加学生をお世話くださった現地スタッフは、スイクラマさん、フォルマンさん、石井美和さん（看護師）です。

それから、三宅亨先生（団長）、松平功チャプレン、阪口祐介先生（社会学部講師）、谷詰茉央さん（総務課職員）が、大変で責任の大きい引率を担当くださいました。

そして、チャペル事務室では煩雑な事務作業等で、吉田雅憲さん（チャペル事務室参事）、そして斎藤さん、八坂さん、古武さんが支えて下さいました。

このような皆様方のお力添え・ご協力のお陰で、2012年度IWCは無事に終了し、参加学生達は多くの成果を出し、また多くの経験を生きる力にして帰って参りました。

皆様、ありがとうございます。

なお、IWCのプログラムは、教育後援会からの資金援助をもとに課外活動等補助金の支出を頂戴して運営されています。この場をお借りして、教育後援会の皆様に厚く御礼申し上げます。

アスラマの子ども達



経営学部 教授 三宅 亨

第26回国際ワークキャンプ・インドネシアは昨年同様バリ島西部のプリンビンサリ村にあるバリ・プロテスタント・キリスト教会のウイデア・アシ財団が運営する第2児童養護施設（通称「第2アスラマ」）で実施された。現在、このアスラマには78人の子どもが暮らしている。

この子ども達の背景をみると、両親のいない家庭が3割、父親か母親だけの家庭が2割、両親は健在するが何らかの理由で親と一緒に暮らすことができない子どもが5割にも達する。この5割の子ども達の家庭事情を調べてみると、経済的な理由が浮かびあがってくる。貧困ゆえに両親の元では暮らしていけないために、やむを得ず施設に預けられている子どもが多い。

その一例がバニュポ村出身の子ども達である。2007年8月、ワークキャンプの現地受け入れ責任者であるスィクラマ氏に案内されてバリ島の北西部、バリ海に面したバニュポ村を訪問した。バリ海の水は澄みきってダイビングを楽しむことができ、近くにはリゾートホテルが立ち並び、日本の水産関係の会社も進出している。しかし、バニュポ村の状況は想像をこえる様相を呈していた。そこで、ワークキャンプに参加する学生に子ども達の家庭環境を理解してもらうように第21回キャンプ以降毎年この村への訪問を日程に組み込むことにした。

この村は雨が少なく、乾燥した荒地で農作物が育たない。幅10メートルほどの近くの川は干上がっている。村の人達はワインの原料となるブドウを栽培してかろうじて生計を立てているが、収入の3分の2から7割は地主に地代として収めなければならないので手元には僅かな金しか残らない。ブドウ畑の中に4本の柱を建て、椰子の葉を使って屋根と壁を造っただけの小屋に住んでいる。最近では、徐々にブロックで壁を造る家庭も現われているが、窓もなく、10畳ほどの土間に10人以上の家族が暮らしている例も珍しくない。トイレや水浴び場は戸外にあるが、囲いもなく、貯め置いてある水は濁っている。貧しさゆえに、3度の食事も満足にとることができない。トウモロコシの薄粥を1日2回口にすることができれば、まだ恵まれているという状態である。1日1回ということもある。教科書代や文房具にあてる金はないから、子どもを学校にやることもできない。学校へ行けないから、大きくなっても仕事を見つけることも難しい。このままでは、貧困のサイクルが永遠に続く。

このような状況を見かねて、第2アスラマでは毎年この村から何人かの子どもを受け入れている。スィクラマ氏とアスラマの館長、地元のプロテスタント教会の牧師の3人が各家庭を訪問し、家庭事情を調査し、もっとも生活に困っている家の子どものを選ぶ。希望者全員を受け入れたいが、希望人数が多すぎて、収容能力を超えるので選考せざるをえない、とスィクラマ氏は言う。「私の夢は子ども達がみんな学校へ行けること」と言う。

アスラマでは、子ども達は3度の食事に事欠く心配はない。毎回温かい米のご飯が食べられる。野菜や肉、魚には目もくれず、ひたすらご飯だけを食べ続ける子どもがいる。アスラマに来るまで、米を食

べる機会がほとんどなかった子どもである。スプーンやフォークを使ったことがないので、手で食べる子どももいる。そんな子どももアスラマでの生活に慣れるにしたがって、スプーンやフォークを使ってバランスの取れた食事をするようになっていく。何よりも大切なことは、学校に行けるということである。バリ島に7つあるウィデア・アシ財団のアスラマでは高校を卒業する18歳まで子ども達を養育する。中学生になると、将来を見据えて職業教育も行う。農業技術や、コンピュータ、パティック作り、縫製などの技術を身につけさせる。18歳で自立できるようにとの配慮からである。学力に優れた子どもには大学進学之道も開かれている。バニユポ村での生活とは天と地の差である。

今年も学生と一緒にバニユポ村を訪れた。あらかじめ私から説明をしておいたが、現地状況を目の当たりにして涙を浮かべる学生もいた。生まれた時から豊かなモノに囲まれ、あまり不自由を感じることもない生活、スイッチひとつ入れるだけで、ボタンをひとつ押すだけで様々な作業ができる生活に慣れきっている彼らはこの村を見て何を感じたのだろうか。

今回のワークキャンプの最後の日の朝の集いで私は次のような話をした。ワークキャンプは今日で終わる。しかし、これですべて終わりではない。一人ひとりにとって新たな出発の日である。このキャンプで感じたこと、学んだことを忘れないで明日からの生活、将来に活かして欲しい。自分の夢や目標を持ち、それを実現するために何をすべきかを考えて欲しい。どんな生き方をするのか。私達がバリを去ったあとも恵まれない子ども達がいること、バリだけではなく世界中に多くの恵まれない子ども達がいることを忘れないで欲しい。自分には何ができるのか。考えるだけでなく、できることを実践してもらいたい。

18日間にわたる第26回ワークキャンプは事故もなく無事に終了した。微熱、風邪、下痢で少し体調を崩した学生もいたが、全員が協力して道路の舗装と畑作りという主要課題を予定より早く達成することができた。18人の本学学生と6人のインドネシア学生には改めて「お疲れ様」と感謝の気持ちを表した。と同時に、「アジアの人々の協働から学ぶ」というワークキャンプの精神を忘れてないようにして欲しいということを改めて強調しておきたい。自分たちの達成した成果を誇ることなく、謙虚な気持ちで「学ぶ」ことを続けて欲しい。

ワークキャンプの実施にあたって、今年も学内の教職員、学生から様々な形で協力して頂いた。現地も多くの人々から支えて頂いた。支持協力を頂いた方々にこの紙面を借りて感謝の意を表して、今年のワークキャンプの報告とさせて頂きたい。

毎年違う国際ワークキャンプ



チャプレン 松平 功

1986年から桃山学院大学創立25周年記念事業として始められたIWCは、今回で第26回目となりました。これまでに延べ500人近くの学生をバリ島に送り出すことができたという事実は、このプログラムの素晴らしさを実証していると思います。これまで築かれてきた現地スタッフと本学の引率教職員の努力や、アスラマを運営しているバリ・プロテスタント・キリスト教会と本学の深い協力関係が、この実績を生みだしてきたことは言うまでもありません。そのような積み重ねから考えても、本学のIWCほど徹底された教育プログラムは他の大学には存在しないと自負しています。

今回でIWCに参加させていただくのは3度目になりますが、どの年のIWCも全く違うプログラムであったように感じます。スケジュールは殆ど同じなのですが、参加する学生の意気込みや理解の仕方によってIWCに対する意味合いが違って来るからなのでしょう。各年のIWCは、ワーク内容が異なることもあって単純に比較するのは難しいのですが、今年のIWCチームはノルマ達成型の特徴が顕著に表れていて、今まで引率してきたIWCチームとは異質でした。一つひとつのプログラムやワークをこなして、そこから得ることのできる達成感に浸っているとといった感じでした。しかも、その達成感を学生同士で共有するのではなく、各々の学生が個別に、それぞれ違った方向性や視点から満足しているのが大きな特徴のひとつでした。良く言えば個性があったということになりますが、悪く言うとバラバラということであり、決して良い結果であったとは言えません。このような特徴の要因は、日々行われたミーティングの失敗によるものであると考えられます。

ミーティングの進め方は、5月から10回行われるIWCの事前研修で説明を受けることになっているのですが、今回は事前研修を欠席する学生が多くいたため、実際の現場で学んだことを活用することができなかったのでしょうか。そのためでしょうか？学生から引率教職員への報告・連絡・相談という、所謂ハウレンソウが皆無でした。ミーティングの失敗によって日々の反省点を探り合ったり、深く語り合ったりすることなく、意思の疎通もはかることのないまま、常に次の行事やプログラムに進んでいったと考えられます。引率教職員側では、報告や相談に全く来ない学生に首をかしげるばかりで、ミーティングの進め方の失敗に気づいたのはIWCが後半に差し掛かった頃のことでした。この点について1度教えているとは言え、学生同士のミーティングの第1回目には、引率教職員が進め方を指導すべきであったと反省しています。

ひとつの失敗は、まるでドミノのように他に影響を及ぼすことになっていきました。その影響のひとつは、児童養護施設の子ども達についての思いが各学生バラバラという形で表れてきました。学生同士のミーティングの中で、子ども達への思いを話し合い共有しあうような場が作られていなかったのです。これについては、1泊保育体験の応募人数を見れば明らかです。この体験学習は、学生が1人でアスラマの子ども部屋に1泊して子ども達と共に過ごすという任意のプログラムで、体験したい学生だけが現

地で応募する形式になっているものです。前年度は全員が応募して子ども達と一緒に寝起きして、イブ達（女性スタッフ）を朝早くから手伝ったり、子ども達とアヒルの卵拾いに行ったりして、子ども達や施設職員と深く交流することができました。しかし、今年は参加学生の半数に満たない応募でしかなく、子ども達に対する思いの欠落に驚かされました。また、ある学生から「早く日本に帰りたい」という、耳を疑いたくなるような言葉を聞いて驚愕しました。今まで「帰りたくない」という言葉を耳に「たこ」ができるほど聞いてきたのですが、「帰りたい」と言われるのは初めてで、ちょっとした目まいを感じたほどです。この言葉は事前研修に殆ど参加していない学生からのもので、このことから事前研修の重要性を認識させられて、ある意味ありがたく受け取ることができました。

さて、今回のIWCの否定的な面ばかりを書きましたが、良かった点は他の引率教職員が報告しておられると思いますので、そちらをご参照いただきたいと願います。ただ、ひとつだけですが、素晴らしい学生もいたことを述べさせていただきます。今年の1回生の活躍は大したものでした。半年前まで高校生だったとは思えないほど落ち着いて、自分のやるべきことを考えながら、自発的に行動し、様々な事柄を習得していったと思います。当然、1回生全員のことでありませんが、彼らは初めから終わりまで民族・言葉・生活環境の違いなどの壁を越えて、多くのことを学び取れたと確信しています。また、足りないことばかりであった学生達も、バリ島での出来事を振り返りながら他では得ることのできない学びであったことを実感するようになると思います。これからの参加学生全員の成長が楽しみです。

引率教職員について報告する方がいらっしやらないと思いますので、この書面をお借りして述べさせていただきます。今回の引率教職員は団長に三宅亨先生、阪口祐介先生、総務課から谷詰茉央氏、チャブレン、そして現地から看護師の石井美和氏がヘルプしてくださいました。三宅団長は「まさに団長」と呼びたくなるほど昭和の匂いのする団長でした。学生達を褒めたり突き放したり、現場での状況によって鉛と鞭を使い分ける経験豊富な教育方法を間近で見ることができました。また、「エバリュエーション」と呼ばれている施設改善のための会議をIWCの最後に英語で行うのですが、学生たちの提案する英訳までの道のりは三宅先生なしには絶対に不可能でした。それから、今回初めてIWCの引率に加わっていただいた社会学部の阪口先生は、非常に聡明な方で様々な方面から学生達を分析しておられ、常に的確なアドバイスを学生達に与えて彼らから大きな信頼を得ておられました。また、彼は聡明なだけでなくユーモア溢れる純粋な心の持ち主です。施設出身者2名を含む牧師按手式がプリンピンスリの教会で行われた時、苦しい道のりを通して大学を卒業して牧師になった彼らを喜び、隣で涙を流すスイクラマ氏を見て、阪口先生はもらい泣きをされておられたのです。それを見てこちらの目頭も熱くなりました。学生を理解するために、理性だけではなく豊かな感情を持った大学教員が必要とされている昨今、彼のような教員を持つ本学の未来は安泰です。そして、谷詰氏も初めての引率をされたとのことですが、初めてとは思えないほどの気配りで多くの働きをしてくれました。彼女はとても影響力のあるムードメーカーで、どのような場面でも周りの人々に笑顔をもたらしてくださいました。また、年齢が学生達と殆ど変わらない若さですので、他の引率者に理解不可能な学生の考え方を読み取ったり、学生達の中に入り込んで色々な情報を引率側に伝えてくださったりと、大変重要な働きをしてくれました。超多忙なセクションにも関わらず、彼女を送り出してくださいました総務課の方々に本当に感謝しております。最後に看護師の石井氏についてですが、彼女が居なければIWCは不可能と言っても過言ではありません。健康状態に気を配るだけではなく、流ちょうなインドネシア語で施設の方々と交渉してくださったり、学生達の精神状態を分析してくださったり、看護師以上の働きでIWCを支えてくださいました。また、引率するうえでの様々なヒントやアドバイスをしていただき、まさに母親のような眼差しでIWC26を包み込んでくださいました。石井看護師を推薦して下さったバリ日本人会の方々に心から感謝いたします。

この26年間、日本とインドネシアの学生達が共働し、両国の架け橋としてIWCの活動に参加し、貴重な経験をしてきました。そして、その経験は参加学生だけに留まらず連鎖反应的に広がり、多くの影響をインドネシアと日本の社会に与えていると信じます。IWC26は終了しましたが、これで終わりにしてはなりません。IWC27、IWC30、IWC40、IWC50へとIWCはこれからも継続され続け活躍して行くべきです。机上の勉強だけではなく、心で学ぶと経験の手段として、IWCをなくてはならないプログラムとして位置づけて、これからも多くの学生達に参加してもらえるように期待しています。

初めてのIWCから得た経験



社会学部 講師 阪口 祐介

私は、今回で26回目となるインドネシアでの国際ワークキャンプに、学生を引率する教員として初めて参加しました。引率教員に求められる役割は、学生を観察し、教育することだと思います。ただ、今回、私にとって18日間のワークキャンプは初めての体験ばかりで、教員としての役割を果たすことよりも、学生のように色々なことを考え、学ぶことの方が多かったように思います。

まず、私がこのワークキャンプを通して最も印象に残っていることは、パリにおけるウィデア・アシ財団が運営する児童養護施設アスラマという場所そのものです。アスラマの目的は、親から子への「貧困の連鎖」を断ち切ることです。断片的な情報を集めた考察ですので今後、データや調査によって裏付ける必要はありますが、アスラマは貧困の連鎖を断ち切ることにある程度、成功している稀有な場所だと感じました。

児童養護施設はどの国でも、貧困家庭出身の子どもがやってくる場所です。アスラマに来る子ども達も同様です。アスラマの約半分の子ども達には両親がいます。しかし、両親は子どもを育てる経済的余裕がないため、子どもをアスラマに託すのです。ただ、施設の方々の説明によると、アスラマに来た子ども達は高校までは進学することができるそうです。インドネシアにおける高校進学の意味は、日本とは大きく異なります。インドネシアの就学率は2011年において、13～15歳87.58%、16～18歳57.57%、19～24歳13.91%です（BADAN PUSAT STATISTIK 2012）。つまり、10人に1人の子どもは中学に行くことができず、10人に4人の子どもは高校に行くことができないのです。アスラマに来る子ども達の家庭は経済的余裕がないため、子どもを中学校や高校に行かせることができません。子どもをアスラマへと送ることで、子どもは高校進学チャンス、そして貧困から脱出するチャンスを手にするのです。

このようなアスラマの特徴は、日本の児童養護施設と比較するとよくわかると思います。そこでは、「貧困の連鎖」が存在し続けます。日本の児童養護施設に子どもが入所する理由は、児童虐待、親の死亡や離婚、親の逮捕、経済的要因と様々ですが（厚生労働省 2009）、どの理由も家庭の貧困が関連しているといえます。日本でも貧しい家庭で生まれた子ども達が、児童養護施設に入所するのです。ここまではアスラマと同じです。しかし、日本において児童養護施設に入所した子どもは、施設以外の子ども達に比べて、教育を受けるチャンスを十分に与えられていません。日本全国での高校進学率はほぼ100%、大学進学率は50%ですが、東京都が行った調査によると、児童養護施設入所者の最終学歴は、中学校卒23%、高校卒58.3%、4年生大学卒3.9%です。子ども達は十分な教育を受けることができなければ、不安定で低収入の仕事にしか就くことができず、貧困へと至る可能性は高まります。日本の児童養護施設では、「親の貧困」→「子どもの教育を受けるチャンスの少なさ」→「子どもの貧困」という連鎖が存在します。

私がアスラマという場所の存在に驚くのは、それがめったに起こりえないことだからです。「貧困の連鎖」は、全世界に共通して普遍的に見られる現象です。私が専門にしている社会階層論という研究では、親の階層と子どもの階層がどれだけ強く関連しているのかについてデータを用いて調べています。こうした研究は、日本だけでなく、海外でも行われ、50年以上も続いています。そして、そこでは、どの時代どの国においても、親が安定した職業につき、高収入を得ていれば、子どもは高校や大学に行くチャンスを得やすく、高収入で安定した職業に就きやすいことが明らかにされています。上層に生まれた子どもはチャンスにめぐまれ、下層に生まれた子どもはチャンスにめぐまれない現象は、時代や場所を超えて普遍的なものなのです。

現代社会では、多くの人々がこの「貧困の連鎖」という事実を問題化します。近代社会では、本人の努力や能力によって報酬が異なることは許容します。しかし、出身家庭や性別、国籍といった本人の努力や能力以外の要因によって、成功のチャンスが異なることは不平等とし、解決すべき問題と考えます。社会階層論の研究にもそうした問題意識が存在します。しかし「貧困の連鎖」は現実には社会からなくなり、ほとんどの社会において維持され続けています。

アスラマは、そうして維持され続ける不平等な「貧困の連鎖」を断ち切ることを目指し、実際にそれにある程度、成功している場所だといえると私は考えます。ここで私が主張したいのは、パリでは貧困の連鎖がないということではありません。パリ社会においても貧困の連鎖が維持され続けるなかで、アスラマはそれを断ち切ることを目指し、一部ではありますが、それに成功しているということです。もちろん、すべての子どもがアスラマに入ることはできません。たくさんの貧困家庭出身の子どもをなかで、ほんの一部だけがアスラマに入ることができ、成功のチャンスを得ることができるといった方が正確でしょう。ただ、現実には「貧困の連鎖」を断ち切る場所が存在することは稀有であり、そのことが私を驚かせ、未来への希望を抱かせるのです。

では、なぜ、このようなアスラマという場所が存在することが可能なのでしょうか。それはおそらくキリスト教の精神や、信仰に基づく人々の行動の積み重ね、アスラマの目的に共感した世界中の人々からの支援など色々考えることができます。この「問い」については、すぐに答えを見つけることはできませんので、私自身が今後もワークキャンプと関わり続けるなかで、考えてきたいと思います。

もう一つ私がワークキャンプを通じて考え続けたことは、引率教員としての私自身の役割です。冒頭で述べたように、今回は私にとって初めてのワークキャンプであり、現地に行く前は、引率教員としてどのような役割を果たせばよいのかあまり分からず、とても不安でした。というのも、私の専門は社会学であり、これまでそして今回ワークキャンプに参加された先生方に比べて、語学力やキリスト教、ボランティアに関する知識が乏しいからです。

ワークキャンプの当初は、三宅先生や松平チャプレンのお話を聞きながら、「お2人はいつも的確に学生に助言や指導をされるなあ」と傍観者のような立場にいました。しかし、毎日行われる教職員のミーティングを通じて、徐々に気づいてきたことは、お2人の学生への的確な助言や指導は、学生の行動を細かく観察することによって考えられているということです。教職員のミーティングでは、ワーク、中学校・高校への訪問など、その日あったことについて、それぞれの学生の行動やその問題点を話し合います（学生の観察）。そのうえで、そうした学生達に今どのような助言や指導をすべきかについて議論します。長いワークキャンプのなかで、学生達のなかで生じる問題は常に変化していきますので、その時に合った助言や指導する必要があります。そして、そのためには学生をしっかりと観察することが不可欠なのです。

さらに、終盤になって気づいたことは、引率教職員にはそれぞれの観察があり、それぞれの役割があるということです。教職員のミーティングでは、それぞれの教職員による学生の観察が示されますが、

それらは一致しないこともあります。教職員によってなされる観察が異なれば、助言や指導も異なる可能性がでてきます。この点、私はまだまだ未熟で、私の観察や指導・助言は、三宅先生やチャブレンに比べると的確ではないことが多いと思います。しかし、ここで重要だと私が考えたのは、一人ひとりの教職員の指導や助言をよりの確にするということではなく、教職員はそれぞれ異なった役割があり、その役割に合った形で学生を観察し、コミュニケーションをとり、助言や指導するということです。実は、このように考えることができたのは、ワークキャンプの途中でFacebookを通じてアドバイスをいただいた福田先生のおかげです。

ただ、終盤になってから、そのように考えるようになったため、自分自身の役割として、もっとすべきことがあったと反省しています。私自身は三宅先生やチャブレンのような知識も経験もなく、谷詰さんや美和さんのように女子学生のなかへと入っていくこともできません。ならば、年齢の若さと見た目の若さを活かして、男子学生の中へもっと入っていったり、学生と一緒にアスラマの子ども達とコミュニケーションをとり、より学生に近い立場で学生を観察し、助言・指導できればよかったと思います。

ここまで「貧困の連鎖を断ち切るアスラマ」「引率教員としての役割」という2つのことについて書いてきましたが、その他にも日々さまざまなことを考え続けていました。そんな中、アスラマで過ごすのも残り5日となった朝、私は学生にたいして「体験と経験」の違いについて次のような話をしました。

みなさんは、「体験」と「経験」の違いがわかりますか。英語では「experience」と同じ言葉ですが、日本語では体験と経験は違った意味を持ちます。

体験はその時、見たこと聞いたこと感じたことです。

経験は、そうして心の中に入ってきた体験の意味を自分の心のなかでじっくり考えて何かを学び、自分自身の知恵になることです。

一時の体験ではなく、自分の心のなかでじっくり考えて得た経験によって、人は次に自分が何をすべきかを知ることができると思います。

あとここで過ごすのは5日間です。

みんなには、これまでのそしてこれからの色々な体験をじっくり考えて、時には話し合いながら考えて、体験と同じくらいたくさん経験を得てほしいと思います。

このように話したのは、そのメッセージを学生に伝えたかったからですが、それは私自身に向けられた言葉でもあります。私にとって初めてとなる18日間、本当にたくさんを体験しました。そして、その体験の意味をじっくり考え、いくつかの貴重な経験を得ることができました。今後、ワークキャンプに行く際にはこの経験を活かして、学生の教育にあたりたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な経験を得ることができたのも、IWCにかかわられてきた多くの皆様のおかげです。あらゆることをメモされる三宅先生からは、教育者としてだけでなく研究者として多くのことを学ばせていただきました。ユーモアにあふれ、いつも周りを明るくしてくださる松平チャブレンからは、学生とコミュニケーションをとることの大切さを教えていただきました。年齢が近く気軽に話せる谷詰さんがいたことで、毎日をとっても楽しく過ごすことができました。美和さんには、バリの文化やワークキャンプの歴史など色々教えていただきました。スィクラマさんからは、人間として学ぶことが多かったです。ユーモアを持ちつつも、強い意志で夢に向かって行動するその姿には心を打たれました。そして、すれ違うたびに「GUCI！」と声をかけてくれるアスラマの子ども達の笑顔のおかげで、朝から晩まで楽しい時間を過ごすことができました。学生達からは、教育することの喜びを

得ました。教職員の一言によって、学生が何かを学び人間として成長する瞬間を目にすることは、教育に携わる人間として本当に喜ばしいことです。他にも、フォルマンさん、アスラマ館長のワヤンさん、青野先生、深見先生、小池先生、南出先生、福田先生、キリスト教センターの皆様にもお世話になりました。皆様には心より感謝申し上げます。

文献

BADAN PUSAT STATISTIK (インドネシア中央統計局), 2012, Pendidikan Tabel Indikator Pendidikan (教育指標) 1994–2011.

http://www.bps.go.id/tab_sub/view.php?kat=1&tabel=1&daftar=1&id_subyek=28¬ab=1
(2012年10月18日現在)

厚生労働省, 2009, 「児童養護施設入所児童等調査結果の概要」.

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jidouyogo/19/> (2012年10月18日現在)

東京都, 2011, 「東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書」

<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2011/08/DATA/6018u200.pdf> (2012年10月18日現在)

国際ワークキャンプの引率を終えて



総務部総務課 谷 詰 茉 央

学生引率があるプログラムの中でも、1番行きたいと思っていたIWC。入職3年目、有難くもこのお話をいただきました。しかし、いくら行きたいと思っていたとしても、やはり不安はつきもので、出発日が近づくにつれて、インドネシアへ飛び立つことが憂鬱になっていく自分がいました。

私が働いている総務課では学生と接する機会がありません。そのため、18日間も学生と一緒に過ごしていくのに、どのように接すればいいのか、どうやって溶け込んでいけばいいのか、不安と戸惑いがふつふつと膨れ上がっていました。また、初めての学生引率が海外であるということがより不安を増大させていました。この不安を払拭させるためにも、少しでも学生と打ち解けられればという思いを持ちながら、事前研修には業務の合間を縫って参加しました。それでも十分にコミュニケーションが取れていたとは言えなかったので、出発前日までこのモヤモヤとした不安を抱えていました。ですがその一方で、学生に頼ってもらえるようにしっかりしなければと気張るのではなく、職員という立場をわきまえつつも、学生と一緒に楽しんじゃおうと開き直っている自分もいました。

そして、あつという間に迎えた出発の日。恥ずかしながら私が覚えていたインドネシア語は、簡単な挨拶と現地での会計役を果たすための「ミンタ クインタシ（領収書ください。）」という言葉だけでした。もちろんたったそれだけの言葉のボキャブラリーでは、多くの場面で言葉の壁にぶつかりました。しかし、インドネシアの学生やアスラマの子ども達、その他に現地で出会ったインドネシアの人々は、辞書を片手になんとか単語を繋ぎ合わせて話す私の言葉を一生懸命理解してくれようとし、自らが話すときには簡単な単語を使って私に伝えようとしてくれました。その姿に、インドネシアの人々の優しさや愛情を感じたとともに、自分の語学力のなさを痛感しました。

バリに到着して3日目、いよいよプリンビンサリ村への入村です。アスラマの入口では、鼓笛隊の子ども達が出迎えてくれました。アスラマは想像していた以上にとても綺麗で、よく整備されていました。到着後早々に三宅先生にお願ひし、アスラマ内を案内していただきました。そこで、なにげなく歩いている道や目にする畑、建物、設備などの多くはIWCの力で作られたものであることを知りました。IWCの長い歴史を感じ、その長い歴史の一部分に少しでも自分が携われたことがとてもありがたく思いました。

プリンビンサリ村での生活が始まってから4日後、子ども達の出身村のひとつであるバニユポ村を訪れました。バニユポ村周辺の地域は、水不足で乾いた土地が続く場所であったため、出発時は緑豊かであったバスの外の景色が、段々と茶色く変わっていったことを強く覚えています。村の人たちはブドウ農園を営み、そのブドウでワインを作っています。しかし、収入の7割を地主に渡さなければいけないため、小屋のような家で、食事は1日に1、2回、トウモロコシの粉をお粥のようにして食べることがやっとの生活を営んでいます。そのような過酷な状況を実際に目にし、ただただ言葉を失い、いつも屈託のない笑顔を見せてくれる子ども達が時折見せる、大人びた表情を思い出しました。家族とは離れ

離れになってしまいますが、アスラマで暮らすことによって、衣食住には困らないし、学校に通って勉強することができます。ある種、アスラマで暮らす方が幸せなのだろうか。腰をかがめながら歩いていったブドウ畑の下、自分の無力さを肌で感じ、幸せということについて考え、自分自身の痛みのように胸が締め付けられる思いを持ったことは忘れることが出来ません。

アスラマの子ども達はいつも底ぬけに明るい笑顔で私達に接してくれます。とても人懐っこくて、その目は本当に輝いていて純粹や素直といった言葉がぴったりと当てはまります。その笑顔は、彼・彼女達にとって自分がかげがえのない存在なんじゃないかと自惚れさせる力を持っていて、子ども達に与えたかったたくさんの元気と愛を逆にもらっていました。

朝の祈りの言葉に「神よ、変えることのできないものについては、それを受け入れる平静さを 変えるべきものについてはそれを変える勇気を そして、変えることのできないものと変えるべきものとを識別する英知をお与えください。」という一文がありました。この一文を読む度に、貧困層やアスラマの子ども達の境遇、インドネシアの社会福祉環境、文化の違い、日々の自身の意識や考えなど毎朝様々なことが頭に浮かびました。IWCに参加させていただく中で、日本では当たり前の光景が、いかに幸せで恵まれているかということや物事を深く捉え考えることの大切さや難しさなど、改めて考え直したことや考えさせられること、感じたことがたくさんありました。

インドネシアでの18日間は、目まぐるしく毎日が流れていきました。出発する何ヶ月も前からたくさんの時間をかけて準備してきた学生達は、私とは比べ物にならない程、もっともっと早く毎日が過ぎていったと思います。大粒の汗を流しながら行っただワーク、小中高訪問での日本語授業、日本食作りやスポーツ交流など多くの出来事を臨機応変に対応しながら成功させていました。そういった一つひとつのことは「してあげている」というつもりが、周りの支えがあったからこそできたことであり、実はとてもお世話になっていたこと。子ども達をはじめ、現地の人々と関わることで、自分達が何かを「学ばせてもらっていた」ということ。「アジアの人々の協働から学ぶ」というワークキャンプのテーマを体感したことを忘れないで欲しいと思います。そして、このIWCを通して学んだことを何らかの力に変えて、これからの人生の糧にして欲しいです。

本当に数々の貴重な体験をさせていただきました。最後になりましたが、引率者として一緒に帯同させていただきお世話になった三宅先生・松平チャブレン・阪口先生・スイクラマさん・フォルマン君・美和さん、間近で多くの変化を見せてくれた参加学生達、笑顔で私達を温かく迎えてくれたワヤンさん・プリンビンサリ村の人たち、毎食おかわりするほどおいしい料理を作ってくれたイブたち、日本で見守ってくれていたチャペル事務室の皆様、インドネシアに嫁いでこいと冗談を交えながら快く送り出してくれた総務課の皆様、IWCを通して出会った全ての人々と縁の下の力持ちとなって支えてくれた方々に心から感謝いたします。

♥Members of IWC26♥

- A班 池田鷹弥 (たかや・交流班・A班リーダー) ハイテンション野郎！テンションの上がりすぎにはご注意ください (笑)
 香川貴俊 (たかとし・交流班) always sleeping ロック好きだぜ！！イエーイ♪
 寺田朱里 (あかり・日本食班) 縁の下の力持ち 実はおもろい姉さんです♪
 山口明理 (あーちゃん・日本語班) 皆の空気を和ませます。癒し系福岡女子♥
 Yusuf Edward (ユスフ) ギターにキーボード♪実はもてるんです (笑)
 Novelyn Rossy Andriar (ノフェリン) IWC26のアイドル！？日本語とっても上手なの♪
- B班 本村竜汰 (りゅうた・日本食班・B班リーダー) カーブファンの広島県人19歳☆★
 吉田真悟 (しんご・副隊長) クールな副隊長！でも不器用な所がかわいいんです♥
 高橋創 (はじめ・日本語班) 取り戻そう！信頼！！recoveryははじめました (爆)
 吉田芽生 (めいめい・交流班) スギは私の旦那♥ めいスギ大好きなんですよー♥♥♥
 吉田桃子 (もも・記録班) ただの桃だと思ったら大間違いうちの桃は気配り桃子♥
 Betty Alfasia Sukariath (ベティ) クレイジーガール！？ (笑) とーっても優しい女の子♥♥
- C班 中平菜摘 (なっち・日本語班・C班リーダー) もはやインドネシア学生！？ (笑) 笑顔が素敵ななっち★
 太西晋 (すっすん・隊長) 我らがリーダー★☆ テンション爆上げピーポー！！！！
 花澤広介 (こーすけ・交流班) always hungry！！！！Everydayおかわり♪♪
 中村紗希 (さきっちょ・記録班) 写真を撮るぞ！わー♥お花きれい♪♪
 入宮由季 (ゆき・交流班) 見えないところで頑張ります！しっかりもののゆきちゃん♥
 Adeadatus Hyronimus (アデ) 「yo！オレまゆ毛ないねー (笑)」インドネシア学生のリーダー的存在
- D班 香川友希 (ゆきち・交流班) 福沢じゃないよ香川だよ～♪地球と人に優しい自由人です★☆
 美浦純 (じゅん・交流班) 世界の平和を願う ハーモニカ男子☆
 石関真帆 (まほ・日本食班) ちびっ子元気だ cantikまほー♥♥♥
 喜田将王 (しょうおう・日本語班) お笑い大好き☆モノマネ得意なしょう♪♪
 Ishak Prenamia (イッサ) 優しい天然BPY お髭がダンディーね♥♥♥
 Rosvita Flaviana Osin (オシン) 「NO.GOOD↓」 (笑) めっちゃうるさいIWC26の愛されキャラ
- 引率教員、スタッフ
- 松平功 (チャブレン) IWCといえばこの人！！！！陰で皆を支えるチャブレン！
 三宅亨 (三宅先生) 我らが団長！皆を見守るお父さん！！！！
 阪口祐介 (阪口先生) 体験を経験に！サッカーのプレー最高でした♥ (笑)
 谷詰菜央 (谷詰さん) 癒し系♪皆の頼れるお姉さん♥
 石井美和 (美和さん) IWCのお母さん！優しい美和さん大好きです♥♥♥
 Nengah Swikrama (スイクラマさん) インドネシアと日本の架け橋！安心感がすごいです！！！！
 Forman Supradinata (フォルマン) チャラ男！？ (笑) 日本語上手なお兄さん♪♪

テーマ

ワークキャンプのテーマは、「アジアの人々の協働から学ぶ」である。そして私達IWC26のテーマとして「アジアの人々と協働の中で友に学んでいこう」と意味を込めた「Belajarlal untuk teman」、日本語で「友（共）に学ぶ」という意味のテーマを考えた。

「Belajarlal untuk teman」を掲げたTシャツを作成し日本の学生だけでなくインドネシアの学生、引率の先生方やみんなで着用した。私達はこのワークキャンプでテーマ通り、お互い協力し、協働しあう中で相手からたくさん学ぶことができた。



これが「Belajarlal untuk teman」を掲げたTシャツのデザインである。

募金活動

- 活動目的：プリンピンサリ村の子ども達へ歯ブラシを寄付し歯磨き指導を行うため
- 活動期間：7月3日～7月19日の間で9日間
- 活動場所：桃山学院大学チャペル前
- 活動時間：昼休みの12：30～13：10
- 活動人数：18人

ほとんどの学生が募金活動をおこなうのは初めてのことであり、全体的に固く恥ずかしい気持ちからか積極的になれていない学生もいた。さらに募金活動をおこなうにあたって詳しい内容が書かれているビラなどを配っていたらもっとたくさんの人に関心を持ってもらえたのではと考えさせられる。しかし、募金活動を通して全ての学生が人の優しさに触れたと感じている。正直こんなにも金額が集まるとは思っていなかった。初夏の暑い中わざわざ足を止め募金してくれたたくさんの方々に感謝の気持ちでいっぱいだ。

発送の日までに集まった35,000円で一本約78円の子どもの歯ブラシを448本購入することができた。この448本を先に発送でアスラマへ送った。最初はここから集まっていく金額分でさらに歯ブラシを購入し、分担して持っていく予定だったが相当な荷物となるため、現金でバリ・プロテスタント・キリスト教会のウィディア・アシ財団へ寄付することとなった。

アスラマの子ども達が使用していた歯ブラシは大きなサイズのもので（インドネシアで多く使われている歯ブラシはブラシの部分が日本の一般的な歯ブラシの約2倍はあるくらい大きい）子ども達の小さな口に合うとはいえない大きさだった。さらにかなり使い古されている歯ブラシを見た時は募金活動を通して歯ブラシを寄付して良かったと感じた。

最後に改めて募金活動に携わって下さった全ての方々に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。

日付	金額
7/3	雨天中止
7/5	4,085円
7/6	8,309円
7/10	7,310円
7/11	4,278円
7/13	10,017円
7/17	14,298円
7/18	11,678円
7/19	12,987円
合計金額	72,971円

調理実習

7月7日 堺市立青少年の家

<材料>

カレー粉（辛口）	2箱	肉（豚）	1キロ
ジャガイモ	6個	人参	2個
タマネギ	8個	油	適量

*お米は一合ずつ各自持参

<反省>

- 役割分担があまかった。
- 具材が多かった。
- 米を炊く鍋を確認し忘れ、米が焦げてしまった。



8月4日 シティープラザ

8月4日・5日で1泊2日の合宿をした。1日目の13時から調理室を借りて、辛口カレーを作った。調理器具はすべて揃っており、素早くでき美味しかった。1回目の反省を活かし効率的に進めることができた。

<反省>

- 油を買い忘れてしまった。
- 多く作りすぎてしまった。



合宿

8月4日～5日

(合宿1日目)

- 12:00 和泉中央駅改札前集合
- 12:30 和泉プラザにて調理実習の買い出し
- 13:00 お昼ごはん♪ カレー作り
皆で協力しおいしく作れた
- 17:00 合宿棟にてミーティング（日本語の英訳、しおり作成）
- 19:00 お風呂
- 20:00 ごはん
- 21:30 各班に別れてミーティング
- 24:00 就寝

(合宿2日目)

- 9:00 起床
- 10:00 朝ごはん&お昼ごはん各自で食べ、体育館へ
- 11:00 体育館
スポーツ交流の練習
交流会の練習
日本語の授業の練習
- 17:00 解散



2012年度 第26回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表

月日	曜日	時間	日 程	備 考
8/20	20 月	8時30分 8時30分 9時00分 11時00分 16時35分 17時05分 18時50分 22時00分	関空4F中央コンコースに集合（ユニホーム） 点呼 搭乗手続き（関西国際空港） GA883便にて出国（所要時間 6:45 時差-1時間） デンパサール空港到着 入国手続き（バスで移動） ホテルチェックイン・部屋割り 夕食、インドネシア学生と合同オリエンテーション 就寝	荷物を持って集合 パスポート、旅行保険証等を忘れないように 部屋割り、グループ分け (注)：引率者は毎晩会議があります 気付いたことなどご報告をお願いします ディアナブラ H
8/21	21 火	7時56分 8時10分 9時15分 10時 12時30分 13時30分 18時30分 19時48分 22時	朝の集い（ビーチ） 朝食 日本・インドネシア学生 ミーティング 引率スタッフは日本領事館、バリ日本人会訪問等 昼食 ミーティングまたはフリータイム 夕食 ミーティング 就寝	表敬訪問（団長、チャレン、谷詰さん）、年会費納入、両替等 ディアナブラホテルにて ディアナブラホテルにて ディアナブラ H
8/22	22 水	7時 7時15分 8時05分 11時40分 13時30分 15時15分 15時30分 18時00分 19時30分	朝の集い（ビーチ） 朝食 ソカへ移動およびソカ村見学（服装自由） 昼食 ソカ村出発・プリンビンサリへ移動 プリンビンサリ到着 ホームステイ先へ 夕食 帰宅 就寝	ディアナブラホテルにて ホテルチェックアウト ソカにて（ビーチレストランまたは弁当） 歓迎、アスラマで アスラマの子どもが各自案内 この日のミーティングはありません ホームステイ先家族と交流 お土産を渡したり…… プリンビンサリ
8/23	23 木	7時 7時15分 8時30分 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤ公立高校訪問（ユニホーム）／ワーク 昼食・休憩 ワーク 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	日本語プロジェクト 2クラス ① プリンビンサリ
8/24	24 金	7時 7時10分 7時45分 9時 10時 10時45分 11時20分 12時 15時 18時30分 19時15分 20時	朝の集い 朝食 オープニングセレモニー準備 オープニングセレモニー オープニングセレモニー ワーク 昼食 三宅先生による村案内 オープニングセレモニー片付け ワーク 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	スタッフはバニユボ村教会の牧師訪問、下見（団長、チャレン） プリンビンサリ
8/25	25 土	7時 7時15分 8時15分 12時 13時20分 17時 18時 19時15分 20時	朝の集い 朝食 ムラヤ公立高校訪問（ユニホーム）／ワーク 昼食・休憩 子ども達の出身村訪問（ユニフォーム） 帰宅・フリータイム 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	日本語プロジェクト 2クラス ② 隊長挨拶予定 プリンビンサリ

8/26	26 日	7時 7時20分 8時30分 12時 15時 17時 18時30分 19時15分 20時15分	朝の集い 朝食 プリンピンサリ教会訪問（正装） 昼食・昼休み スポーツ交流 スポーツ交流終了 自由時間 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	隊長挨拶予定 サッカー・バレーなどで子ども達とあそぼう プリンピンサリ
8/27	31 金	7時 7時10分 8時20分 12時 14時 18時35分 19時10分 20時	朝の集い 朝食 小・中学校訪問・交流（ユニフォーム） 昼食・昼休み ワーク 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	2グループに分かれて（引率も2つに分かれる） 2班にわかれて訪問 授業参観の後、 日本語授業やゲーム スポーツ、歌の指導 等をして過ごす。ムラヤ中学校へはトラックで移動。 プリンピンサリ
8/28	28 火	7時 7時15分 8時 12時10分 14時 18時 19時 21時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食・昼休み 交流会準備 夕食 交流会（Tシャツ） ミーティングはありません 帰宅・就寝	スタッフはホームステイ先訪問 学生と子ども達主催 プリンピンサリ
8/29	29 水	7時 7時15分 8時 12時 13時 18時30分 19時30分 20時	朝の集い 朝食 ワーク 昼食 昼休み ワーク 夕食 ミーティング 帰宅 就寝	 プリンピンサリ
8/30	27 月	7時 7時15分 8時00分 12時00分 13時 18時 19時25分 19時45分	朝の集い 朝食 ワーク、日本食材料買い出し（引率：谷詰さん） 昼食 日本食の準備 日本食パーティ（服装自由） ミーティング 帰宅 就寝	日本食買い出し学生を1～2名決めること プリンピンサリ
8/31	30 木	7時 7時15分 10時 12時 13時 18時 19時10分	朝の集い 朝食 エバリュエーション準備 昼食・休憩 エバリュエーション準備 夕食 帰宅、就寝	 プリンピンサリ
9/1	1 土	7時 7時15分 8時30分 12時 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 フリータイム 昼食・昼休み フリータイム 離村式 会食（パビグリン） 帰宅、就寝	荷造り等 子ども達と村内散歩など インドネシア語で謝辞 ホストファミリーと一緒に食事を しましょう ミーティングはありません プリンピンサリ

9/2	2 日	7時 7時15分 8時30分 11時50分 15時10分 18時 19時 21時	朝の集い 朝食 プリンピンサリ出発（Tシャツ） 第4アスラマ・ウンタルウンタル到着、昼食 ホテルへ 夕食 ミーティング 就寝	昼食後交流会&自由時間 ホテルにてエバリュエーション準備1 ミーティング ディアナブラ H プリンピンサリ
9/3	3 月	7時 7時10分 8時30分 12時 16時20分 18時 19時 21時30分	朝の集い 朝食 ディアナブラ大学訪問（ユニフォーム） ショッピングモール・マタハリで昼食と探訪 ホテルへ出発 夕食 エバリュエーション準備2 ミーティング 就寝	各自で昼食すること：両替可 ディアナブラ H
9/4	4 火	7時 7時15分 9時30分 12時45分 14時 17時 18時 19時 22時	朝の集い 朝食 文化探訪（服装自由） 昼食 文化探訪 ホテル帰着 夕食 エバリュエーション準備3 ミーティング 就寝	ヒンドゥ文化 アグン山のレストランにて ヒンドゥ文化 ディアナブラ H
9/5	5 水	7時 7時15分 9時 11時 12時 14時10分 15時 17時30分 21時 21時30分	朝の集い 朝食 エバリュエーション（正装） アガペー・フェスティバル（正装） 感謝の昼食会 荷造り フリー、出発準備（服装自由） インドネシア学生と手紙交換、お別れ会 フリータイム マタハリ出発 空港到着：搭乗手続き	（アガペー：バリ風のキリスト教儀式） ノサルア（地名）5つの宗教施設へ ノサルアにて マタハリ、フリー、各自夕食
9/6	6 木	24時45分 8時30分 9時00分 9時30分	GA882便にて出国（所要時間7:00、時差+1時間） 関西国際空港 入国手続き 感謝の折り・解散	機内泊

注：服装を合わせることが多いので、よく考えて洗濯しましょう。（17泊18日）

注：ワークの内容はプリンピンサリ村の出入口道路舗装工事。

入村式

8月22日（3日目）

プリンピンサリ村のアスラマの前に着いてバスから降りると、入り口で子ども達が待っていた。子ども達はみんな特別な衣装をまとっておりとても可愛く、日本にいる時から会うのを楽しみにしていた私達は自然と笑みがこぼれた。また、想像もしていなかった歓迎ぶりに驚かされて、移動の疲れも吹っ飛んだ。初めて会うにも関わらず向けられた子ども達の笑顔は忘れられない。子ども達に案内され、数人の子ども達が木琴によく似たインドネシアのガムラン楽器を演奏していて、しばらくの間、全員が聞き入った。演奏しているのが全員子どもで、しかも上手だったのでさらに驚かされる結果となった。そこには椅子が用意されており、演奏が終わるとアスラマの館長のワヤンさんからスタッフの紹介やアスラマについての説明があり、スィクラマさんが通訳をしてくれてアスラマの運営形態について知ることができた。ワヤンさんの挨拶が終わると今度は三宅先生からの挨拶があり、とうとうアスラマにやって来たのだという実感と、活動に対する意欲が再び湧いてきた。それも終わると遂にホームステイ先の発表が始まり、ペアになった学生が呼ばれていく。呼ばれた学生はアスラマの子どもに案内されてホームステイ先に向かって行き、各自これからお世話になる家族の元へ行き、お互いの自己紹介やお土産を渡すなど挨拶や雑談をして過ごした。



ブリンビンサリ村

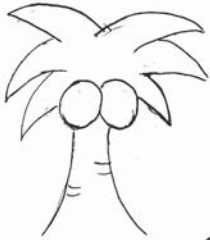
ブリンビンサリ村にアスラマがあり、私達がホームステイでとてもお世話になった村である。村の人みんなが温かく、全く知らない人でもすれ違いざまに必ず挨拶をしてくれた。小さな村であるため村の人みんなが顔見知りですべて仲が良かった。

ココナツの栽培が盛んにおこなわれているため、あちらこちらにヤシの木があり、中身を取り出す作業をしている村の人を見かけた。家によってはバナナ、マンゴー、パパイヤなどの木が植わっているところもあり、緑豊かな村であった。しかし、くさりで繋がれている犬もいたが、放し飼いにされている犬も多くいて、その犬に追いかけることがあり、夜道などは特に怖かった。

村の人達は毎週日曜日になると、礼拝のため教会に集まる。私達もこの礼拝に参加し、この日のために練習してきた「Amazing Grace」を日本の学生とインドネシアの学生みんなで歌った。礼拝のために集まった200人程の村の人の前で歌うことに緊張し、お世辞でも上手かったとは言えないほどで、少し残念な結果に終わってしまった。でも、私達が下手ながらも一生懸命に歌っている時、教会に集まっていた村の人達と一緒に歌ってくれた時は、ブリンビンサリ村の人々の優しさを感じることができた。私達を温かく迎え入れてくれたブリンビンサリ村の人々に感謝の気持ちでいっぱいである。



フリンピンサリ村



教会



小学校



今回作業を行った
道路と畑



村役場



アスラマ

アスラマとは

アスラマ (Asrama) は日本語で「学寮」を意味する。日本でいう、児童養護施設だ。貧困や虐待等が原因で、やむを得ず親元を離れなければならなくなった子ども達がこのアスラマで共に生活する。

ウィディア・アシ財団がバリにある7ヶ所のアスラマを運営している。プリンビンサリ村の第2アスラマは1975年に建てられ、1987年から始まったIWCの活動の拠点となり続けている。今回私達、IWC26も主に活動を行っていた場所である。

この第2アスラマでは、イブ (女性スタッフ) など数名のスタッフで約80名の子ども達の面倒を見ている。その80名の子ども達の内のほとんどが小学生である。



第2アスラマの建物の壁に描かれた絵

アスラマ内の動物・無駄をつくらない工夫

アスラマ内には牛や豚、鶏、ナマズなどの多くの動物が飼われている。牛と豚は外部へ売るために飼育している。しかし、その牛や豚から出た糞尿も無駄にしないように第2アスラマでは工夫されている。アスラマ内に備えられている発酵槽で糞尿を固形物とガスとに分離する。固形物は農作物の肥料として、ガスは料理をする際などの火に使われるのだ。



牛



豚



糞尿を固形物とガスに分ける発酵槽



ナマズの水槽

鶏とアヒルは卵を産ませるために飼育している。しかし鶏の卵とアヒルの卵では用途が異なる。鶏の卵は第2アスラマの子ども達の食用として使われ、アヒルの卵は出荷用として使われるのだ。

他にもナマズを飼育している。このナマズは食用として育てられているが、汚れた水を浄化させるという役割もある。

アスラマの設備

第2アスラマには多くの施設や設備がある。その1つが水の浄化装置である。第2アスラマがあるプリンビンサリ村の水道水は飲料水としては使用できない。なので、第2アスラマではこの浄化装置を使って飲めない水を飲料水にするのだ。

IWC19（2005年）の学生達で作った貯水槽の水を浄化装置で9回浄化すると、飲料水となる。



貯水槽



水の浄化装置

そして畑では、第2アスラマの子ども達の食糧として多くの野菜などを育てている。

今回、私達がワークの一環として石拾いやゴミ拾いをおこなったアスラマの入り口の横の畑では、まずは野菜が育ちやすいように土壌改善をするため、比較的育ちやすいとうもろこしの種を植えた。

種を植えて約1ヶ月が経った時点でとうもろこしは芽を出し、順調に成長している。



とうもろこしの種を植えたばかりの畑



種を植えて1ヶ月後の畑

その他に、図書室やバスケットコート、ゲストハウスなど、第2アスラマの施設や設備は充実してきてはいるが、まだまだ改善すべき点はある。その改善すべき点を私達はエバリュエーションで提案した。



牛を飼育している前の道



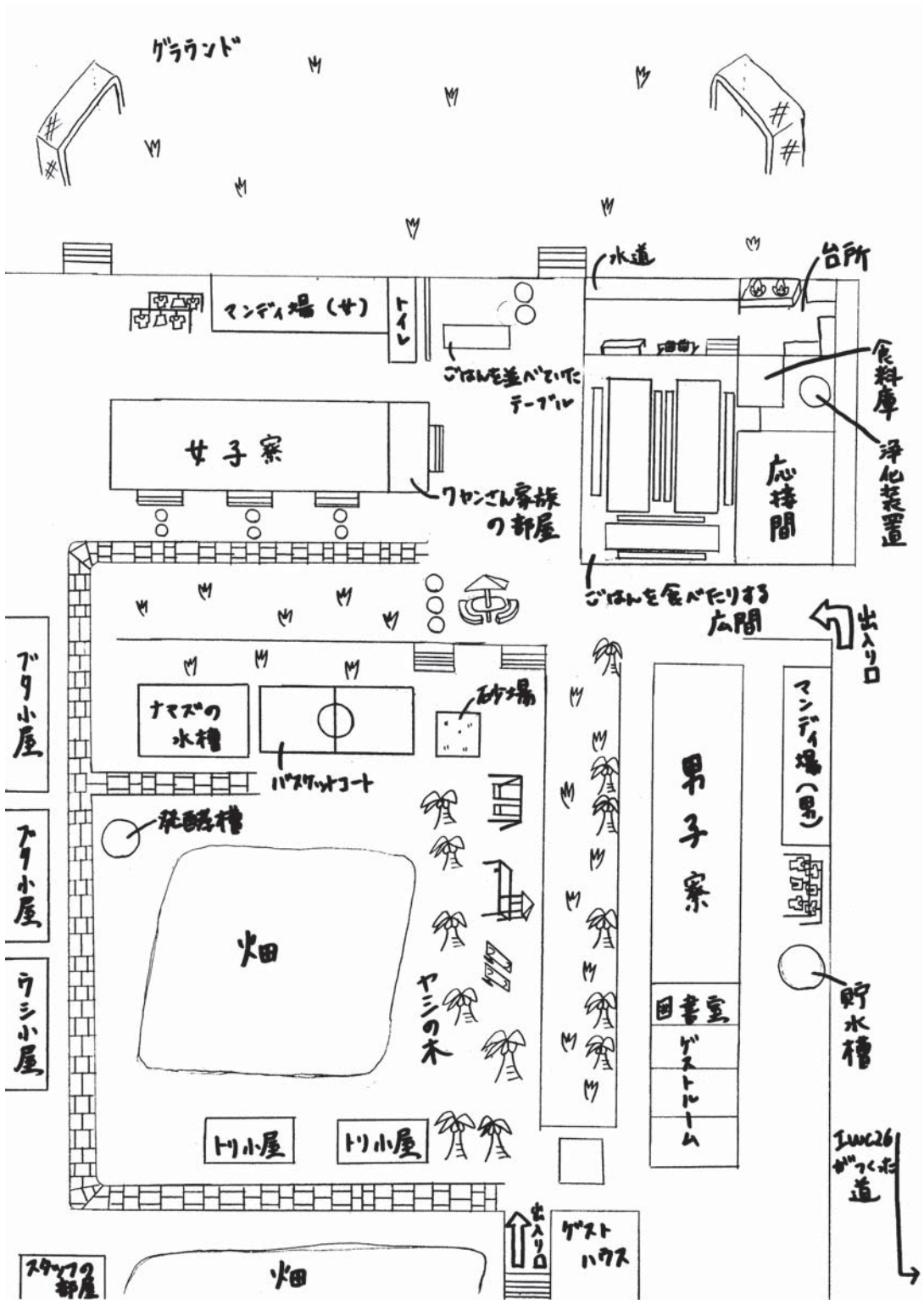
豚小屋の前



バスケットコートと女子寮の間の道



右手の建物が男子寮





バスケットコート



砂場、遊具



遊具で遊ぶ子ども達とIWC26メンバー



ごはんを食べたりする広間



水道



グラウンド



ごはんを並べていたテーブル



ワヤンさん家族の部屋



女子寮



男子寮



台所



食料庫

アスラマの子ども達

アスラマの子ども達は何より元気で素晴らしい笑顔を持っていた。自分のことは自分でする精神がすでに身に付いており、食事の用意、食器洗い、掃除など身の回りのことは自分で何でもしていた。一人ひとりの子ども達に親と暮らせない事情がある。それは、私達には、わかることのできないくらい悲しく寂しい気持ちだろう。そんな子ども達も私達といる時は、ここぞとばかりに甘えてきてくれた。私達にとっても嬉しかったし、子ども達も喜んでくれた。本当はすごく甘えたいんだろうなと感じた。離村式の前になると私達のために子ども達の自由な時間を使って、みんなで一生懸命に楽器などの練習をしてきていた。自分達のために見えないところで練習をしてきていた。子ども達は何事にも本当に真っ直ぐで純粹だった。小さい子ども達も思いやりがあって優しい気持ちを持っている。しかし、子ども同士喧嘩をすることもあった。それを大きな子ども達が小さい子ども達の面倒を見たりと周りをよく見ている、アスラマの中で共に生活して、共に成長していることを感じた。



(アスラマの子ども達)

(子ども達の日)

- 4 : 30 起床・マンディ
- 5 : 00 朝の祈り
- 5 : 30 朝食・掃除
- 6 : 30 小学校へ登校
- 7 : 00 授業開始
- 正午 授業終了・下校
- 12 : 30 昼食
- 13 : 00 昼寝
- 15 : 00 起床・宿題、課外活動
- 16 : 30 掃除 (掃除・家畜の世話・畑の水撒きなど)
- 17 : 00 マンディ
- 18 : 00 夕食
- 19 : 00 宿題・自習
- 21 : 00 就寝



オープニングセレモニー

8月24日（5日目）

<概要>

- 桃山学院高等学校のサッカー部からサッカーボールを約40個寄付。
- 桃山学院大学からバレーボールを約10個寄付。
- 歯ブラシ448本と約38,000円を寄付（募金によって集まったお金）

次の日から子ども達がサッカーボールやバレーボールで遊んでいた。あのボールで練習してくれた子ども達が虫歯なく、将来サッカー選手やバレーボール選手になる子がいることを祈っています。



オープニングセレモニーの様子

日本語プロジェクト

<事前準備>

現地の高校と小・中学校を訪問し授業をおこなうことになっていたため、日本語班は授業内容を決めプログラムを作成した。そして、授業で使う教材と授業の台本を手作りで作成した。教材と台本を作成する際には、他の班の人にも手伝ってもらった。現地の生徒にはインドネシア語しか通じないので、日本語で作った台本を英訳し、またその英訳をインドネシア語に訳した。英語からインドネシア語への翻訳は、現地で合流したインドネシアの学生にってもらった。

授業内容を決める際に念頭に入れたことは、小・中・高と全て同じ授業内容のためレベルに差が出ないように難しいものは避けた。また、たった1日や2日の授業で日本語をマスターできるはずがないので、日本での英語の授業の様なものではなく、楽しめるようないろいろと遊びの要素を入れたものにした。



小学校訪問

8月27日（8日目）

アスラマのすぐそばにあり、生徒のほとんどがアスラマの子ども達である小学校を訪れた。2つの班に分かれて、それぞれのクラスで授業をおこなった。1クラスの人数は20人くらいだった。

<授業内容>

日本語で自己紹介	黒板に簡単な自己紹介の文をローマ字と日本語で書いた。1人ずつ順番に発表してもらった。
衛生の紙芝居	紙芝居はインドネシアの学生に読んでもらい、歯磨きの大切さを伝えた。
シチュエーションゲーム	料理、ダンス、サッカーなど様々なシチュエーションを、子ども達がジェスチャーで表し、それを当ててもらった。
折り紙	折り鶴や花を一緒に折った。
かるた	高校訪問の時に使用した教材をそのまま使用した。
じゃんけん列車	学生も子ども達も一緒になっておこなった。

シチュエーションゲームの時など、積極的に手を挙げて発言してくれる子が多かったため、とても授業がしやすかった。また、私達が話している時は、真剣に話を聞いてくれたり、一生懸命メモを取ってくれたりしている姿を見られて嬉しく思った。

<反省点>

高校訪問で授業をする時に比べ、事前に十分な打ち合わせをしていなかったため、あまりスムーズに授業を進めることが出来なかった。また、折り紙をしている途中で、他の班のクラスと一緒にになり、更に予定にはなかった音楽をかけてしまったので、子ども達に落ち着きがなくなった。少しの間、授業がまともにはできる状態ではなくなった。



中学校訪問

8月27日（8日目）

<インドネシアの中学校>

私達が訪問したムラヤ中学校は、バスで30分程のところにある。初めに校長先生に中学校の話をしていただいた。ここでは13科目を学び、その中でも理科・数学に長けている子は特別な学習を受けることができる。科目の中にはクラブ活動も含まれており、今はマーチング・バンドに重点を置き始めたそうだ。教科書やノートはアスラマから支給、体操服などは政府からの支援があるため、物がよほど不足しているといった様子はなかった。だが、ムラヤ中学校は知名度が低く、政府などに援助を求めるためのプロモーション力が足りないという話もあった。

<反省点と感想>

私達は1つのグループにつき1つのクラスを受け持つものだと思っていたのでグループごとに授業内容を決めていた。しかし中学校に着き急遽4つのグループを3つに分けることとなり、予定と違う中での進行になってしまった。結果的に全員が臨機応変で上手に進めることができたが、言い方を替えれば行き当たりばったりの状況であった。

授業自体は日本のマナー講座・フルーツバスケットなどをして大いに盛り上がった。グループを3つに分けたためインドネシアの学生が常に教室に居るわけではないので、いない時はどう進めたら良いのか不安だったが、私のグループはインドネシア語をある程度話せる日本の学生がいたおかげで日本の学生だけでも進めることができ、インドネシアの学生の手を借りずに授業をした。といっても当たり前だがインドネシアの学生ほど言葉が通じるわけではない。しかしそれでも授業が形になったのはこちらの伝えたい気持ちとそれを受け取ってくれる中学校の生徒の気持ちが通じ合ったからで、コミュニケーションをする上で言葉はとても重要だが、それ以上に伝えたい気持ちが大切だとわかった。インドネシアの学生とも授業を一緒にしたかったが、こういう状況に身を置くことで逆に一人ひとりが積極的にできたのは良かったと思う。また、高校訪問での反省点を改善できた点や時間の問題でできなかった教材を使えた点でも達成感があるものだった。



高校訪問

8月23日、25日（4日目、6日目）

【雰囲気】

ムラヤ高校の高校生は日本の一般的な高校生とは全く異なり、とても熱心で意欲的に私達のおぼつかない授業に参加してくれた。あいうえお表の発音にも大きな声で発音してくれるほどの素直さだった。生徒達は文化の紙芝居をととても真剣に聞いてくれた。そしてその後のいす取りゲームでは最高に盛り上がった。いす取りゲームは、本当に無条件に盛り上がり私達と高校生の距離がすごく縮まるのでやって良かった。

【反省点】

実際に授業を始めていくと1つの内容が終わって次の内容にいくまでの段取りに時間がかかった。なので前に立って授業を進めていないメンバーが次の準備をしておけばさらにスムーズに授業を進めていくことができた。またインドネシアでは男女間のハグはタブーとされているにも関わらずゲームが盛り上がるとおかまいなしにハグし合ってしまった。知らなかったとはいえ事前にインドネシアの学生に確認しておけば良かった。そしてかたを床でおこなったことによりかたをぼろぼろにしまった。物をとても大切にしているインドネシアの学生の前で軽率なことをしてしまったと反省する。最後に、学生の全員が前に立って授業するのではなく中心となって前で授業を進めている以外のメンバーは、生徒の中に入って行き一緒になって生徒の側から見ることでもっと教室全体を見ることができたのではと考える。

【感想】

日本語の授業は日本語の台本を日本の学生が読み、それを英訳したものをインドネシアの学生にインドネシア語で生徒に伝えてもらうというやり方で進めていった。ホテルでミーティングした際、インドネシアの学生が授業の内容をきちんと理解してくれていたおかげで実際の授業をスムーズに進めることができた。インドネシアの学生には感謝してもしきれない。当たり前のことだがクラスによって雰囲気も違うし前で授業を進める日本の学生、インドネシアの学生のカラーによっても授業の雰囲気は全く変わってくる。台本と授業の流れは決まっているが大切なのは一人ひとりが『日本語を好きになってもらいたい、興味を持ってもらいたい』と思う気持ちで一人ひとりの積極性だと感じた。



IWC26 ワーク内容

8月23日～8月30日（4日目～11日目）

今年度のワーク内容は、アスラマへ向かう道路（約95m）作りと道路脇の畑を耕し、石やごみを取り除きトモロコシの種を植えた。道路は子ども達が通学で使う道にも関わらず、でこぼこしており危険であった。IWC25がエバリュエーションで、改善点として指摘し今回のワーク課題となった。また畑は環境が悪くても栽培しやすいトモロコシから植え始め、今後は収穫のたびに土壌を改善して、子ども達が食べる様々な野菜を、栽培していく計画である。

ワークに関しての事前準備は、各自持参の軍手（2枚）のみであった。現地でも作業は変化していき、休憩の判断や作業の分担など引率教員の先生方への報連相（報告連絡相談）がワークリーダーには求められる。

道路作りでは、まず機械にセメント、土、砂利を混ぜ、出来たコンクリートを流し込むという単純な作業であった。機械に流し込む作業やコンクリートのネコでの運搬は男子が担当し、パケツリレーでのコンクリートの運搬や、流し込んだコンクリートをならす作業には女子が担当した。単純な作業だが重労働であり、最初は慣れない部分もあった。

畑作りは、石やごみを取り除き畑に水が行き渡るように水路を作った。日向と日陰で暑さが別世界のように異なり、畑ではなるべく日陰での作業を心掛けた。また畑にはサソリが生息しており見つけ次第駆除した。水路作りは力が必要で男子が担当した。正直なところこの作業が一番重労働であった。石やごみを取り除く作業は、女子や体調が万全でないものが担当した。

作業をやっていくなかで、競争心が生まれ、休むことに対して引け目のようなものを感じ、休まず無理して体調不良者が出るなど、体調不良者が美和さんの忠告に対して強がる状況になってしまった部分があり、今回のワークで最も反省すべき点であった。

反省点は多々あったが、現地の人々や子ども達、仲間と共に、汗を流しながら協力し道路や畑を作れたことは、貴重な体験でありワークを通じ「協働」する事ができたと感じた。



ワークでの様子

交流会

8月28日（9日目）

私達は、アスラマの子ども達と親睦を深めるために交流会を行った。食事やミーティングで使う広間の机を退かし、長椅子を観客席として使うと、あっという間に舞台が完成した。学生の挨拶で交流会が始まった。

子ども達はバリの伝統的な歌とダンスを披露してくれた。子ども達は化粧をして、伝統衣装に身を包み、いつもとは違い大人っぽい印象だった。男の子のガムラン楽器の演奏に合わせて女の子がバリダンスを踊ってくれた。バリダンスの途中で子ども達に誘われ、子どもと学生もしくは教員の1対1のペアで踊る。恥らう人、踊り狂う人、それぞれの楽しみ方で大いに盛り上がった。

次に、子ども達は歌を披露してくれた。イブ（女性スタッフ）のギターに合わせて一生懸命歌う姿が印象的で綺麗な歌声に魅了された。次に女の子達がインドネシアのアイドルグループのダンスを披露してくれた。とても可愛くて男子学生の目は釘付けだったのではないだろうか。



ガムラン楽器を演奏する男の子達



バリダンスを踊る女の子達

<プログラム>

「Hari ini」	歌	学生全員
「会いたかった」	ダンス	学生全員
「瞳をとじて」	歌	学生全員
「カントリーロード」	歌	日本の学生
「心の友」	歌	インドネシアの学生
劇		友希・菜摘・広介・芽生・ノフェリン
「よさこい」	ダンス	日本の学生
「We are the world」	歌	学生全員
「世界に一つだけの花」	歌	日本の学生
「Amazing Grace」	歌	学生全員
「会いたかった」	ダンス	学生全員・子ども達
「SAYONARA」	歌	学生全員

※ユスフ（ギター・キーボード） 純（ハーモニカ） 広介（オカリナ）

私達学生は歌と劇とダンスを披露した。インドネシアの学生は「瞳をとじて」と「心の友」の出し物を用意してくれた。日本語の歌詞にも関わらず、インドネシアの学生の歌声は美しく、6人だったが歌の上手さは圧巻だった。学生全員のプログラムはホテル滞在中のミーティング時に日本とインドネシアの学生同士で教え合い覚えた。



「会いたかった」練習風景



「心の友」を歌っているインドネシアの学生

ダンス「会いたかった」は子ども達も知っていてとても盛り上がった。最後に時間が余ってしまい学生の判断で急遽2回目を今度は子ども達と一緒に踊った。「よさこい」はかっこ良く決めたかったが出だしがずれてしまったのは悔しい点である。後日、子ども達が「よさこい」を真似て踊ってくれていて、とても嬉しかった。最後に「SAYONARA」を歌い、学生達で花道を作り子ども達を見送った。これは毎年恒例になっており、歌が始まると子ども達は自然と花道を通って行く。何度も繰り返し通るのでなかなか終われないのも毎年恒例のようだ。



劇を披露する学生



「会いたかった」を子ども達と一緒に踊った

<成果・反省点・改善点>

交流会を通して一緒にダンスをしたり歌ったりすることにより、子ども達との距離が縮まったと思う。またインドネシアの学生には、劇の台詞や司会進行の翻訳を頼んだり、とてもお世話になった。私達学生も交流会の準備を通してコミュニケーションをとることが出来た。私達にとって非常に重要なプログラムだった。交流班は前日にワヤンさんと打ち合わせをして、CD再生機を借りる交渉や交流会での要望や当日のプログラムの進行の確認をするべきだ。また、時間配分には充分気を付けた方がいい。今回もそうだったのだが時間が余ったり、足りなくなったり。対策としては、出し物のうちいくつか絶対やりたい物を決めておくべきだ。後は臨機応変にカットしたり、評判が良かったものを2回したりといった対応が必要だ。

歌を歌っている時、子ども達は退屈そうにしていたので、もっと子ども達と一緒に交流できるプログラムを用意しておけば良かった。子ども達と「会いたかった」を踊っている時、輪に入れずにいた子ども達がいたので誘うなりの配慮をするべきだった。



「We are the world」を歌う学生



子ども達が踊っている写真

スポーツ交流

8月26日（7日目）

私達は交流会同様に、今回IWC26交流班のメインの1つでもあった子ども達とのスポーツ交流は、身体を使って思い切り遊べる野外スポーツであるサッカー、尻尾取り、バレーボールと室内遊戯である折り紙、塗り絵、シャボン玉、あやとり、それに衛生の紙芝居を加えた室内で遊べるようなもので大きく2種類に分け、子ども達の得手不得手や好みを考え、好きな遊びに自由に入っては抜けたりのできるように数種類用意し、同時進行によって進めた。

日中は気温が高くなるため、野外スポーツを担当する生徒を考慮し、15分おきにプレーと休憩をとり、タイムキーパーを交代で受け持つようにしていた。

また、サッカーなどのチームは、尻尾取りの際に使用した色別のテープを腕に巻いてもらい時間をかけず円滑にチーム分けを行うことが出来た。



<反省>

当日は珍しく、雨が降る場面があり、野外スポーツを執り行うかどうかの判断が遅かった。

室内遊戯の人气が予想以上に高く、折り紙や、シャボン玉の備品が不足した。

野外担当の学生と室内遊戯担当の学生がほとんど入れ替わらなかった。

子ども達は折り紙に感心が高かったので、学生達はもっと折り紙を勉強していくべきだった。



日本食

8月30日（11日目）

私達は、11日間お世話になった、ホームステイ先の家族、アスラマの子ども達、アスラマのスタッフ、イブ達（母達）に感謝の気持ちを込めて約200人分のカレーライスを作った。日本食班で何を作ろうかと悩んだ結果、去年と同じくカレーライスを作るようになった。

私達は、日本で調理実習を2度おこない、効率良く作業を進めるためにA・B・C・D各班で役割を決め、各班何の食材を担当するのか、どのように切るのか、洗う係、混ぜる係など細かく役割分担を決めた。当日は、細かいところまですることを決めていたが、臨機応変にみんなで作業を分担した。買い出しは、日本食班2名と教員1名、イブ（女性スタッフ）1名、スィクラマさんの合計5人で、他のメンバーが労働をしている間に町のスーパーに買い出しに行った。

●買い出しリスト

- ・豚肉 20kg
- ・玉ねぎ 10kg
- ・じゃがいも 8kg
- ・にんじん 5kg

●日本から送った物

- ・まな板
- ・包丁
- ・ピーラー
- ・おたま
- ・しゃもじ

●日本から持って行ったもの

- ・カレーのルー（辛口）

8月31日（12日目）

私達は、今回バケツプリンにも挑戦した。このバケツプリンを作る作業は、日本食班でおこなった。このバケツの問題点は、冷蔵庫の大きさが現地に行くまで正確には、分からないということだった。現地に着いてから冷蔵庫を確認したところ、十分にバケツが入るスペースがあったのでひと安心した。すべての人にプリンを配りたかったが、プリンとの関係でアスラマの子ども達約80人へのみ提供することになった。提供する時は、お菓子とキャラメルソースも一緒に入れコップに入れて提供した。プリンは、子ども達も喜んでくれ大成功した。

●買い出しリスト

- ・バケツ2個

●日本から送ったもの

- ・プリンのもと



肉切り苦戦中

<感想・反省点・改善点>

- ・IWC25の学生から、材料は火が早く通りやすいように小さく切るべきだということを聞いていたので、それを念頭に置いて切ることができた。
- ・豚肉は固く、切るのに時間もかかり人手も必要だった。
- ・材料を炒めたり煮たりするのは、一部の人に任せきりなところがあった。
- ・ルーの量に対してご飯が足りていなかった。
- ・鍋の数や食器の数などは事前にイブ（女性スタッフ）と確認しておいた方が良かった。



カレーを食べる子ども達

衛生指導・掃除

私達は、子ども達の衛生指導を目的に歯磨きの紙芝居をおこなった。日本での事前準備の段階で内容を考えて、紙芝居を作成した。内容は、現地でインドネシアの学生にインドネシア語に翻訳してもらうため、事前に英語に翻訳して行った。そのため、インドネシアの学生と内容の確認をした時は、スムーズに話を進めることができた。そして、紙芝居は子ども達分かるようにインドネシアの学生に読んでもらった。子ども達が楽しめるように工夫して読んでくれたので、しっかりと聞いて学んでくれたように感じた。



歯磨きの紙芝居の様子

また、私達は、子ども達が使用しているマンディー場の掃除と、台所の流しとその周り、さらにアスラマのゴミ拾いをおこなった。あらかじめ日本から用意して持って行った激落ちくんのスポンジなどを使用したけど、マンディー場などの汚れはなかなか取れなかった。台所の流しは、残飯が詰まることが多々あった。ゴミ拾いでは、ゴミ箱が何ヵ所かに設置されているが、お菓子のゴミやタバコの吸い殻などがたくさん落ちていた。素足でいる子どももいたので危険であると感じた。



台所の流し



アスラマ

私達は、事前準備不足で紙芝居とマンディー指導を1回ずつしかおこなうことができなかった。その1回ではアスラマの子ども達全員に、衛生についてきちんと指導することはできなかった。もっと子ども達のために衛生について考えて準備し、行動するべきだった。

出身村訪問

8月25日（6日目）

私達は、アスラマの数人の子ども達の出身村であるバニュポ村に行った。事前学習として三宅先生からバニュポ村について説明をして頂いた。この村は、1970年に東ティモールで火山が爆発した際に、そこから逃れてきた難民が住んでいて、政府が手を付けることをしない村である。川が乾燥しているため、水がない。食事は1日に1,2回で、トウモロコシの薄粥が主食である。

村の人々は土地を地主に借りて、ブドウ園を営んでいる。そのブドウで主にワインを作って収入にしているが、その7割が地主の元に行く。そのため、とても少ない収入で親はなんとか子どもを育てている家庭・育てる余裕がない家庭があり、ここがアスラマの数人の子ども達の出身村である。そこで村の牧師が各家庭を調査し、児童養護施設へ行く特に貧しい家庭の子どもを選ぶ。しかし、その家庭の子ども全員がアスラマへ行けるわけではなく、兄弟のうち1人だけの場合もある。

バニュポ村へはバスで移動した。移動中にだんだんと緑が減っていく景色を見て驚くばかりで、バス内も静かだった。出身の村に帰ることもあってか、いつもは元気な子ども達が今日は寂しげな顔をして窓の外の景色を見ていた。村に着いてブドウ園の中へ入ると、村の子ども達が走り回っていた。私達は村に入ってから驚くばかりで、全てが衝撃的だった。自分達の生活より収入源のブドウを大事にしている、飲み水・マンディ場・寝床・台所・痩せている牛や豚・どうしようもない悪循環が存在していて、私達の無力さを実感した。そこには人の生活があり、何より子ども達が笑っていた。満面の笑みだったのがすごく印象的だった。

出身村訪問はアスラマの子ども達の背景を知れて、もっとたくさんの愛を子ども達に伝えたいと思った貴重な1日だった。



離村式

9月1日（13日目）

私達がプリンビンサリ村を出る前日の夕方、アスラマで離村式が行われた。私達はそれぞれホストファミリーが用意してくれた衣装などを着用して、ホストファミリーと一緒に席に座った。そして、ひと家族ごとに前に出て、インドネシア語で書いた手紙をホストファミリーに渡し、感謝の言葉を伝えた。ホストファミリーと握手をしたり、泣きながら抱き合ったりする姿が見られ、“別れ”を改めて意識させられた。



ホストファミリーへ感謝の気持ちを伝える



ホストファミリーと学生



この日のアスラマでの最後の夕食には、様々な料理と豚の丸焼きを用意してくれた。この豚の丸焼きはバビグリンといい、バリ島の伝統的な料理である。また、この丸焼きにされた豚はアスラマで飼育されている豚だった。豚が殺められている場面を見た学生もいて、食べ物に感謝するということを再確認できたのではないだろうか。夕食はそれぞれホストファミリーと一緒に食べた。これが2度目（日本食パーティが1度目）にして最後のホストファミリーとの食事になった。



バビグリン入刀

その後、子ども達がバリダンスやガムラン楽器の演奏を披露してくれた。この日のために、真剣に練習してくれていたようだ。私達も一緒にバリダンスを踊り、楽しむことができた。離村式も終わりに近づいてくると、私達に抱きついてくる子どもができた。翌日の朝にも子ども達と会うことができると思っていたため、子ども達ときちんとお別れの挨拶をすることができなかった学生もいた。

ホストファミリー、子ども達、イブ達（女性スタッフ達）、そしてプリンビンサリ村との別れが本当に辛かった。また、私達のために様々な用意してくれたプリンビンサリ村の人々には心から感謝している。あっという間に離村式は幕を閉じ、ホームステイ先でプリンビンサリ村での最後の夜を過ごした。



ガムラン演奏



バリダンス

第5アスラマ

第5アスラマは、中学生66人、高校生26人、大学生8人といった少し年齢の高い子ども達がいる。男の子は、58人、女子45人で計103人である。小学校を卒業すると、この第5アスラマに来る子がほとんどである。子ども達のほとんどは、進学している。現在は、ムラヤヤヌガラの技術高校に通っており、ジャカルタの大学に通っている子もいる。

施設環境は、段々と良くなってきている。テレビがあり、マンディ場も日射しが入り新しい。勉強部屋、図書室、パソコンルームもある。子ども達は、楽器の演奏、裁縫、動物の飼育、農業指導などもしている。壁一面には、きれいな絵が描かれており、建物もきれいである。子ども達の年齢も高いので、機械や遊具は、きれいに維持されている。

今後は、塀を作ったり、農具を増やしたり、またパソコンなども増やしていきたいと考えている。子ども達が集中して勉強でき、快適に生活できるようにと、日々努力されていた。



裁縫室



子ども達



アスラマの植物



パソコンルーム



壁の絵

ソカ村

8月22日（3日目）

IWC24・25期生の方達が植林を行ったソカ村を見学した。植えられたセゴンという苗木は5年で20mほどに成長し、1本3000円から5000円の価値になる。この木を売って施設運営の資金にするという計画のため、去年まで行われていたこの植林プログラムが、今年はなかったのが非常に残念だ。



炎天下の中、影もないところでそれらの作業を24・25期生の方達はしてくださっていたのだと思うと、感慨深く思う。1年、2年という月日をかけて成長した木はものすごく高くなっていて驚いた。

頑張ってくださった先輩方の結果がそこにはあり、実際にこうして「目に見えるもの」、「形のあるもの」としての成果を見ることができて、IWCは本当に貢献しているのだなと身をもって感じる事ができた。すぐに与えられるものではなく、時間をかけて成長させていくからこそ価値があり、今後のためにそれらを考え行動に移すということは本当に素晴らしいことだと思う。そしてこれからの環境を良くするために欠かすことのできない考え方だと思った。



ウンタル・ウンタル

9月2日（14日目）

この施設は1981年に創立され、バリ・プロテスタントキリスト教会のウィディア・アシ財団が運営しているウンタル・ウンタルにある、第4アスラマである。特徴としては他のアスラマと違い中高大生の年代の女の子達が共同生活をしている。また、運営費の確保のためにアメリカの企業と契約してミシンを使って、かばんや衣服などの商品を作っており、商品を作ることで、将来において社会で生きていくための訓練になっている。

施設はタイル張りの綺麗な建物で、施設の女の子は5～6畳の部屋で寝起きしており、最低限のプライバシーが保てるように配慮してあった。また、掃除が行き届いていて綺麗だった。プリンビンサリ村のアスラマよりも設備が整っていた。

私達IWC26のメンバーは、この施設を訪れて、交流会をした。交流会では「ソーラン節」やAKB48の「会いたかった」のダンスを踊り、平井堅の「瞳をとじて」を歌った。また、インドネシアの学生だけで「心の友」も歌った。施設の女の子達からも歌やバリダンスなどが披露され、とても楽しい時間を送れた。



大学訪問

9月3日（15日目）

私達はIWC26の数人のインドネシアの学生が通っているディアナプラ大学を訪問した。
そこで、学長や先生方から大学についての話を聞き、その後大学内を見学した。

<ディアナプラ大学>

- 2011年に専門学校から総合大学に変わった。
- 桃山学院大学と提携を結び、交換留学が可能になった。
留学の費用は無料。生活費は自費。
- 力を入れているのは観光学科であり進路は旅行会社やホテルなどに就職。
- 1年間で行われている行事は入学式、学園祭、バレーボール大会などである。
- 数は少ないが、バレーボール、サッカー、バトミントンなどのクラブがある。
- マングローブ植林などのボランティア活動もしている。

<大学の目標>

桃山学院大学と交換留学が可能になったばかりなので、これからたくさんの学生達が交換留学をして、日本の学生とインドネシアの学生が親密な友好関係を結べるようにしたい。



アガペー・フェスティバル

9月5日（17日目）

アガペーとは、キリスト教の神の教えのひとつである、「愛」についてのことである。私達が思っている、恋人や配偶者を「愛する」こととはまた違う意味を持ち、すべての人々を分け隔てなく「愛する」という無条件の愛のことをいう。



このアガペー・フェスティバルは、果物を盛り付けたグボガンという塔のようなものを、さまざまな色の花で彩られた十字架の形をしたテーブルの真ん中に置き、私達はそのテーブルを囲むように座り、行われた。

参加するまで、正直どんなことをするのか分からず戸惑いがあった。しかし、ヒンドゥー教の儀式のひとつである、果物や紅茶をIWCの仲間への感謝の気持ちを込めて交換し合うという行いをしていくうちに、みんなもその場に馴染みだし、

雰囲気を楽しんでいた。それは、このIWCでの活動を通して得た私達への課題や反省、そしてインドネシアで過ごした日々を振り返る時間となり、私達が暮らす日本では体験することのない異文化に触れる貴重な体験となった。



文化探訪

9月4日（16日目）

文化探訪は2日に分けて行われ、この日はバロンダンスの見学やアゲン山で昼食があった。

●バロンダンス

バロンダンスはバリ島の伝統芸能のひとつで、善を司る聖獣「バロン」と悪を司る魔女「ラダン」の戦いを描いたものだ。この踊りは木琴に似ているガムランというバリ独特の伝統楽器の演奏と共に、バリ島の神秘的な雰囲気をかもしだしていた。この善悪の戦いには終わりはなく、「人の心には『良い魂』と『悪い魂』が同時に存在している」というバリ人の考え方を表している。



●キンタマーニ

キンタマーニはバリ島の東北部に広がる高原で、有名な観光地だ。私達はここのレストランで昼食をとったが、テラス席からはキンタマーニの景色を一望できて雄大な景色に圧倒された。また、近くの貧しい村から子どもから年寄りまで物売りの人がたくさん来ていて、買うに買えない状況は非常に心苦しいものがあった。

9月5日（17日目）

●ヌサドゥアの5つの宗教地域

カトリック（左上）ヒンドゥー（左下）プロテスタント（中央下）イスラム（右下）仏教（右上）の5つの宗教施設が並んでいる。これは、宗教戦争を経験したインドネシアの人々が、お互いの宗教を尊重しあい、国家一丸を目指すスローガンの象徴とする建造物群だった。それぞれの建物すべてに宗教ごとの特色があり、隣り合って建てられているが宗教ごとの規則はきちんと分かれていて、多宗教国家であるインドネシアならではの印象を受けた。



エバリュエーション

<概要>

- 日時、場所 2012年9月5日(水) ディアナプラホテル 9時～
- 参加者 バリ・プロテスタントキリスト教会関係者の方
スィクラマ氏を含めたアスラマ関係者の方々
教職員・日本の学生・インドネシアの学生
- 形式 日本の学生1名 英語であいさつ
日本の学生A～C班から代表者3名、インドネシアの学生の班から代表者1名
英語で提案
→バリ・プロテスタント教会の方が応答

<A班>

1. 布巾の色を台拭きと食器拭きで分ける。

提案理由：色分けをすることによりイブ（女性スタッフ）や子ども達が分かり易く使えるうえに、衛生的であるため。

2. 歯磨きの指導に力を入れる。

提案理由：子ども達には歯を大切にしてほしいため。

3. スタッフの人員を増やす、再教育を行う。

提案理由：子ども達の世話や食事の準備などのことを考えると、スタッフは多い方が良いと感じたため。スタッフの再教育については、掃除の仕方など衛生面では特に見直しが必要と考えた。

<回答>

1. さまざまな色があるため、イブが分かっても子ども達が分かっていないことが多い。
今後、分かり易くしていきたい。
2. 歯のチェックは毎月おこなっている。アスラマに長くいる子どもは虫歯が少ないが、新しく入ってくる子どもはたくさんの虫歯がある場合が多い。インドネシアでは歯磨きの習慣が無い。
3. プリンビンサリ村のアスラマのスタッフは10人と、他のアスラマと比較しても1番多いので、増員は厳しい。しかし、年に3回のスタッフトレーニングがあるため、スキルはアップされている。



<B班>

提案 物を増やす

1. 図書室の本や机などを増やす

提案理由：運動が得意な子どもばかりではないため、図書室の本を増やすべきだと感じた。また子ども達にとって集中して勉強できる環境を作るべきだと感じたため。

2. 料理場に椅子、机の設置

提案理由：イブが床に座って食材を切っているのは、不衛生である。またイブの負担軽減にもつながるため。

3. 掃除用具入れの設置

提案理由：掃除用具の置き場が点々としており掃除をする際不便であるし、1カ所にまとめて管理することにより用具の破損を防ぐ事ができるため。

<回答>

1. 図書室については、以前より本を増やす事によって子ども達のやる気を出させるような環境を目指しており、アメリカのNGOと協力し近日500冊増加する予定である。机や椅子の増加については本の増加後検討してゆきたい。

2. バリでは床で料理を作る文化があり、今後イブ達に教育していく。10月に机が設置される予定。

3. 現在、掃除用具は子ども達が掃除したら自分の部屋に置いている。今後教育していきたい。

<C班>

提案 施設の強化

1. 女子マンディー場の強化

提案理由：女子マンディー場は狭くて脱衣所もなく、グラウンドから見える状態にあり、思春期の女の子にとって悪影響であると感じたため。

2. 男子寮の前の道の舗装

提案理由：男子寮の前の道がでこぼこであり危険なため。

3. 遊具の修理

提案理由：遊具に壊れている箇所があり危険。子ども達が安全に遊べる環境を作るべきであるため。

<回答>

1. マンディー場はインドネシア方式であり、シャワールームを作り一度に多数入れるような仕組みを作りたい。

2. 以前は子ども達の通学の際に利用していたが、現在は今回のIWCで作った道を使っているので、今はあの道を管理維持することに努めたい。

3. 現在アスラマの改善のため、3年計画をたてている。その計画の中に遊具の修理も含まれている。

<インドネシアの学生>

- ・放し飼いについて

<問題点・提案>

犬やニワトリの放し飼いは衛生的に悪い。そのため、ニワトリのゲージを作って欲しい。また、アスラマ以外の犬やニワトリに関しては、飼い主と相談してほしい。そして犬も感染症などになるかもしれないのでゲージ・リードを要する。

<回答>

ニワトリは、ウィディア・アシ財団のものではなく、村人の所有物である。不衛生であるから子ども達のためにも勇気を出して、村の人に話さなければならない。

犬の問題点は、去年も出た。去年は6匹いたが今年は減った。また、ワクチンも打たなくてはならないようになった。きっと来年には、アスラマに犬はいないだろう。

<反省点>

- ・今年は去年に比べて意見の数が少なかった。日頃からもっとアスラマに目を向けるべきだった。

<最後に>

アスラマで11日間を過ごし、改善しなければならないことが見えてきた。私達は、アスラマで過ごした日々を振り返り、改善点についての意見を交換した。私達が考えた意見を、来月または2カ月後には実行したいと言ってくださり、とても驚いた。こういったことがこれからのアスラマを変えていくのだと思う。私達がバリ島でできる活動は終わりましたが、来年も再来年もこのような活動をしていくことが大切だと思う。私達はこんな小さなことしかできないけれど、子ども達にとってアスラマがより住みやすい場所になることを願っている。



参加学生のレポート

たくさんの人達との出会い

経済学部経済学科 太西 晋（すっすん）



<きっかけ>

今回、国際ワークキャンプに参加したのは、IWC24に参加した学生から話を聞いたことがきっかけである。彼女は嬉しそうにIWCとは何なのかを教えてくれて、アスラマの子ども達の写真を見せてくれた。写真に写る子ども達はみんな眩しいぐらいの笑顔ですごく可愛かった。私はその数多くの写真の1枚1枚に魅了された。その時から「私も彼女と同じように子ども達を笑顔にできるのか」、「私も子ども達に何かできないのか」と考えるようになり、IWCの参加を決めたのである。

<事前研修>

インドネシアでの活動は8月20日から9月6日の18日間だが、インドネシア語の勉強や事前準備などで、IWC26のメンバーは4月からチームとして動き出した。最初はぎこちない関係で不安であったが、日を増すごとに仲を深めていった。

夏休みに入るとほぼ毎日現地で行う交流会などのためにダンスや歌の練習をしたり、みんなで協力してしおりの作成をした。夏休みになる前まではほとんど練習していなかったダンスや歌は、毎日練習した成果もあってだんだん良くなっていった。そうした目に見える進歩が嬉しく、とても楽しかった。早く子ども達に披露したいと思う反面、みんなと共に頑張つてでき上がった全てが終わっていくような感じがして、インドネシアに行く日

が近づいてくるのをすごく寂しく感じた。正直、ずっと事前研修をしたいと思ったほどである。

<インドネシアの学生>

初対面の日、私達の乗ったバスは交通渋滞に巻き込まれ、1時間半ほど予定より遅れて待ち合わせであるホテルに到着した。到着したら長い間待たせたにも関わらず、インドネシアの学生は笑顔で迎えてくれた。私達が疲れていると思ったのか「キャリーバッグ運ぶのを手伝うよ!」と日本の学生に声を掛ける姿に凄く優しさを感じた。そして一緒に食事をし、日本語授業に向けてのミーティングをした。私は英語もインドネシア語もあまりできないが、一生懸命理解してくれて日本語授業で用意したゲームなどを一緒にやりつつ、楽しく順調にミーティングは進んだ。最後に交流会で歌う曲の練習をした。私達が難題にしていた“Amazing Grace”もインドネシアの学生の綺麗な歌声のおかげですごく良くなった。彼らは日本の曲である「心の友」や「瞳をとじて」を交流会のために準備してくれていて、とても上手だった。日本に帰った今もこの曲を聴くが、本物の歌手よりも彼らの歌声のほうが好きなのでまたもう一度聴きたい。

彼らは、勉強熱心でバスの中でも「○○って日本語でなんて言うの」などを聞いてきたりした。そして教えた日本語をずっと使ってくれた。また、私達がインドネシアでは非常識なことをすると注意してくれたり、冗談を言って笑わせてくれたりと何回も彼らには助けられた。

6人のインドネシアの学生、アデ、ユスフ、イッサ、ベティ、オシン、ノフェリンのおかげでこのワークキャンプを無事に終えれたと思う。もし、彼ら6人がいなければワークキャンプは成立しなかっただろう。本当に心から感謝しているし、皆のことが大好きだ。別れはすごく悲しかった。時間が経たなくても必ず再会をしたい。

<ホストファミリー>

3日目から私達の12日間の拠点となるプリンセンサリ村にあるアスラマに着いた。子ども達は日本では見たことのないガムラン楽器の演奏で私達を迎えてくれた。演奏の後にホストファミリーが発表された。私はインドネシアの学生のイッサと一緒にだった。アスラマの子どもに案内され、私達はホストファミリーの家に着いた。家にはイブとパパ、イブとパパの息子であるマディーさんの家族も一緒に住んでいた。

家族で英語を話せるのはマディーさんひとりだったが、ルームメイトのイッサが手伝ってくれたこともあり、イブ達と一緒に日本から持ってきたカードゲームをしたり仕事の話をしたりしてすぐにとけこめた。マディーさんとは夜遅くまで日本の文化について、お互いの趣味についてや、世間話などを毎晩のように話した。

イブとパパは私達を本当の息子のように接してくれてナシゴレンを作ってくれたり、フルーツを切ってくれたりした。そして離村式では私達に服をプレゼントしてくれた。別れの朝には「いつでも帰っておいで！ 待っているよ！」と言ってくれた。本当に嬉しかった。

イブとパパ、マディーさん一家にはとてもお世話になり凄く感謝している。絶対にまた、「ただいま」と言って再会したい。

<アスラマ>

アスラマの子ども達はすごく可愛かった。笑顔がとても印象的で、初対面の私達に人見知りをすることもなく話かけてくれた。カメラを向けるとポーズをとったり、あの可愛さは文章じゃ伝えられない。また、子ども達は運動神経が良く、特にサッカーが凄く上手だった。私達がアスラマでワークした時、子ども達は率先して手伝いに来てくれた。日本の子ども達とは違う印象もあった。

<言葉の壁>

インドネシアに行って言葉の壁で分かったことがある。言葉の壁は不便だが悪いことばかりではない。言葉の壁があるとコミュニケーションを取

ることにお互いが必死になり、なかなか伝わらなかったことが伝わると心が通じ合ったような気持ちになった。相手の言っていることを「理解したい！」相手に「伝えたい！」とお互い思っている会話はすごくいいものだと思った。

<最後に>

阪口先生がある時に言ってくれた「体験を経験に変えろ」という言葉。知恵を積み、今後の人生に使えるのは経験だと教えてくれた。このIWCで体験したことを今後の経験として今後のIWCに貢献していきたい。

今回IWCに参加して本当に良かった。この18日間は本当にあつという間だった。日本に帰りたくなるほど楽しかった。その短い期間で私は、様々な経験やたくさんの人達と出会えることができた。たくさんの人達の笑顔を見ることができた。何より良かったことはIWC26という素敵な仲間と出会えたことだ。このワークキャンプに参加できたことは私の人生の中でも貴重なものになるだろう。だから私はこのような貴重な体験をさせてくれたIWCにお礼を言いたい。

そして、最後になりましたが募金に協力して下さった方々、事前研修でお世話になった方々、先生方を含むIWC26のメンバー、キリスト教センターのみなさん、IWCに関わって頂いた全ての方々、本当に、本当にありがとうございました！！

Terima kasih

Susumu Onishi (Susumu)

Saya punya banyak pengalaman di Indonesia. Sebelum saya pergi ke Indonesia, saya sangat cemas. Perbedaan budaya dan Bahasa menjadi penghalang.

Tapi rasa cemas saya hilang ketika saya tiba di Indonesia. Orang Bali sangat baik. Saya tidak bisa berbahasa Indonesia dan Inggris terlalu banyak. Tapi, semua orang berbicara

kepada saya seolah-olah hal seperti itu bukan penghalang untuk berbicara.

Anak Asrama tersenyum dan itu sangat menyenangkan.

Kegiatan IWC26 tidak akan berhasil jika orang tidak bekerja sama.

Misalnya, Kunjungan ke SMA dan memberikan pelajaran bahasa Jepang, kegiatan seperti bekerja di Asrama.

Saya pikir IWC26 tidak berhasil jika tidak ada mahasiswa Indonesia di IWC26. Saya ingin berterima kasih kepada mereka dengan tulus. Terima kasih banyak.

Saya ingin belajar lebih banyak bahasa Inggris dan Indonesia. Ketika saya pergi ke Indonesia di waktu berikutnya, saya ingin berkomunikasi lebih banyak dengan semua orang.

Saya ingin kembali ke rumah homestay. Dan aku ingin melihat keluarga tuan rumah. Jika saya melihat keluarga tuan rumah, saya ingin mengatakan "SAYA Pulang".

Saya ingin makan Nasi goreng lagi yang dibuat oleh ibu saya.

Saya tidak akan pernah melupakan 18 hari ini. Saya kadang-kadang berharap untuk bertemu kembali dengan orang yang saya temui di Indonesia. Akhirnya, saya berpikir kata yang tepat untuk diucapkan adalah senyum ketika saya pergi ke Indonesia.

Saya pikir saya tidak ingin kembali ke Jepang. Karena saya mencintai bali.

Saya ingin mengucapkan terima kasih kepada semua orang yang terlibat dalam IWC. terima kasih.

素晴らしい出会い

経済学部経済学科 吉田 真悟 (しんご)



<はじめに>

今回、IWCに参加して感じたことは、本当にたくさんあります。いろいろな感情にさせられましたし、また、たくさんのお出会いと別れがありました。私がIWCに参加したのは、友人に誘われたのがきっかけです。ボランティアのような人の役に立てる事がしたいという気持ちがあったことが動機です。私は、ボランティアというものを生まれて今までしたことがありませんでした。ボランティアに興味があったものですが、行動に移すことができなかったのです。些細なことでも人に喜ばれるのが好きでしたし、またインドネシアに行ってみて、私の中でできる限り同じ目線になって子ども達の今と過去を知ってみたかったという気持ちも強かったです。私がこのIWCに参加したことは今まで生きてきた中で、最も大きなアクションでしたし、また一番の変化と成長に繋がった経験となりました。

<アスラマ>

インドネシアでは、たくさんの児童養護施設に行かせてもらいました。女子寮のみの所、中学生など少し大きくなった子ども達がいるところ、そして私達が過ごさせてもらった、まだ幼い子ども達がいる第2アスラマと呼ばれている施設です。アスラマによっていろいろな特色がありました。建物のきれいさ、施設環境もそれぞれ違っていました。でも私の中の児童養護施設のイメージが変わるくらい整っているなども感じたのを覚えています。最初に子ども達と出会った時に感じたことは、笑顔の素晴らしいことでした。私の中では、

孤児で寂しい生活を今まで送ってきてかわいそうという思いがあったのかもしれませんが。しかし、子ども達と出会った時は、そのような思いなど一切なくなりました。むしろ、彼らの笑顔や元気に圧倒されるぐらいの勢いでした。私達は日本に住んでいるだけで、裕福で周りには何でもあるぐらいの生活をしてきました。そんな私達がアスラマでできたことは、本当に数えることができるくらいだと思います。私達がしてあげたことより、アスラマの子ども達・イブ（女性スタッフ）達にしてもらったことの方がはるかに多いです。そんな私達を盛大に歓迎してくれて、おいしい食事を食べさせてもらって、たくさんの素晴らしい笑顔を見せてくれて、また自分のちっぽけさを気付かせてくれたこと、全てに感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にいろいろな子どもがいました。一人ひとり個性がありました。活発な子もいれば、おとなしい子もいました。子ども同士で喧嘩しているのも何度か見たのを覚えています。けれど個性がある中で共通していたのが、子ども達の思いやりの強さと優しさでした。お菓子をくれたり、ワーク中に疲れている私達に水を持って来てくれたり、小さなことだけど大きな優しさがそこにはあったと振り返ってみて思いました。

子ども達と一緒にアスラマでお泊りした日も私の中で印象強かったです。泊まる当日は、夕方からアスラマに残って子ども達とマンディをしました。私が面倒を見たのは、数人だったけれど、どの子もきちんと体を洗えていませんでした。水で流すだけで出ようとする子ばかりでした。一緒に中に入って洗ってあげたけど、こういった基本的なこと、歯磨きも含めそういった教育がいき届いていない部分がまだまだあると感じました。その後、夜の自由時間になりました。その日は、私達の離村式の前日であって、その準備を夜にしているのを見ました。食事が終わって、寝るまでの自由な時間を使い私達の前で披露してくれる楽器の練習を一生懸命しているのを見ました。演奏に釘付だったけど本当に嬉しかったです。演奏していない子ども達も一緒に見ていました。私達のため

にここまでやってくれていたのを知って、何とも言えない気持ちでした。思い通りにいなくて怒っている顔、夜にバイバイの時にする寂しそうな顔、遊んでいる時にたまらないくらいに楽しそうにしている顔、みんなの一日一日変わるいろんな表情を見られたことが、自分のインドネシアでの元気の糧になったと感じています。とても元気にしてもらいました。

<ホームステイの家族>

私のホームステイの相方は、インドネシアの学生のユスフでした。言葉の面で、最初は本当に不安でした。うまくコミュニケーションがとれるかなど、いろいろネガティブに考えていました。しかし、ユスフの助けもあって、日に日にいろんなこと話し合うようになりました。最初の歓迎してくれた時のことも印象強いです。快く笑顔で歓迎してくれました。私のホームステイ先は、警察官家庭で、正直見た目も怖いイメージがありました。けれどそんな見た目とは逆に、たまらないくらい優しさを持っている人達でした。いつも帰ってきた時に、言ってくれる「おかえり」、出発する時の「いってらっしゃい」、その言葉が自分にとっては、すごくでかいものでした。おじいちゃんとした朝の散歩もいつも楽しみで、本当に大きな思い出です。他にも部屋をきれいに掃除してくれたり、いろいろな親切と優しさももらい、私達が快適に過ごせるようにしてくれました。家族のおかげでアスラマでのワークも頑張れたと思っています。家族みんなが「自分たちはインドネシアでの真悟の家族だよ」と言ってくれた時は、たまらないくらい嬉しかったし、正直泣きそうになりました。あの時も今もこれからも感謝の気持ちは忘れません。本当にありがとうございました。

<インドネシアの学生>

IWCで共にいろんなことを学び、共に頑張れたインドネシアの学生6人に出会えたことは本当に感謝です。ユスフ、アデ、イッサ、ノフェリン、ベティ、オシンです。最初に会った時、フレンドリーに話してくれました。自己紹介してお互い

を知り、共に頑張ろうと思っていましたが、その反面、心のどこかにうまくやっけていけるかなという不安はありました。私の下手な英語とほとんどわからないインドネシア語で困ったことも何回もありました。こんなにコミュニケーションをとるのが困難だと思ったのは初めてでした。事前研修も含め、自分の勉強不足に対して、本当に後悔しました。インドネシア語の指差し本で必死に会話しようとしている私に彼らは、ゆっくり優しく聞いてくれました。日々が経つにつれて、段々とみんなの性格も分かってきました。いろんな所で私が伝えたいことをうまく訳してくれたりして、いつの間にか不安など消えていました。皆が仲良かったけれど、ホームステイも一緒だったことかユスフと過ごす時間が一番多かったです。毎晩一緒に帰り、朝は2人も眠たい目をこすりながらアスラマに歩いたのを印象深く今も、覚えています。プライベートの話もよくしました。心から、一緒に過ごせたことを良かったと思えました。

印象に残っているのが、彼らの家庭事情を聞いたときでした。貧しい家庭の学生もいれば、逆に裕福な学生もいたり、昔の戦争で逃げてきた家庭の学生もいたりいろんな家庭がありました。今は、自分でアルバイトをしながら学費を払っている学生もいました。自分の管理がすごくできている学生達でした。日本で親に学費を払ってもらい、大学には行っているものの、ちゃんと学びたいことが学べているかどうかかわからない私が本当に情けなく感じました。

もう1つ印象に残っているのが、インドネシアの学生達の勤勉さでした。何か1つ疑問があると、答えを必ず出そうとする探究心がとても伝わってきました。そんな彼らを私はただ見ているだけでした。彼らには本当に助けてもらいました。日本語授業、交流会、ワーク、台本などの英訳、全て彼らがいなければ、実現すらできてなかったと思います。私達にとって彼らは、必要不可欠でかけがえのない仲間です。来年から始まるディアナプラ大学と桃山学院大学の交換留学で日本に来たいといっている学生達も何人かいました。お金の事情もあるし、留学できるかまだ定かではないです

が、もし彼らが日本に来ることができなかったとしても、いつまでも繋がってたいです。本当にありがとう。

<ワーク>

今年のワークは、畑を整備してトウモロコシを植える事とアスラマの入り口から施設までの道路舗装でした。これは、去年のエバリュエーションでIWC25が発案されたことです。労働班を先頭に着々と活動していきました。最初は、畑と道路を分けてワークをしていました。畑では、まず、石、ごみ、植物肥料を分けて、耕すことができる環境をつくる作業でした。一方で道路では、砂利と土を運んで、それらと水をローリーという機械で混ぜます。それでできたコンクリートを器具とバケツで順番に運んでいき、それを流しきれいに整えていく作業でした。コンクリートを作り、器具で運ぶのは基本的に男子で行い、バケツリレーや整える作業は女子と役割分担をしていました。この道自体、坂道なので結構過酷な作業でした。ここで問題だったのが、できるからといって頑張りすぎる事でした。みんなですしているワークの中で個人プレーが目立ってしまう部分がありました。一つひとつの作業に大変なところがあるのに仕事内容の重要性で順位付けしてしまっているという、チームとしてやってはいけないことをしてしまいました。道路工事の作業の方が、畑の作業よりも重要に勝手に決めつけていたのです。そのことを先生達にも注意され、労働班を中心に話し合い、反省し、日々徐々に効率も良くなり、成長できたと思っています。後半からは、開始から7日目でようやく道路が完成しました。最後まで丁寧に作業をし、完成をみんなで見届けました。そして8日目には、トウモロコシの種も植えることができました。この作業もゆっくり焦らず丁寧に作業しました。このワーク内容ができて本当に良かったです。子ども達が安全に歩ける道路、子ども達の成長につながる食物であるトウモロコシを植えることができ、光栄でした。アスラマの入り口からその二つが並んで見渡せることができます。最後に見たときはこの2つを私達がやり遂げ

ることができて嬉しかったです。この毎年の積み重ねでアスラマが限界なく、もっともっと子ども達が快適に過ごせるようになることを祈っています。

<まとめ>

IWCの18日間を終えて一つひとつ学べたことが宝物です。出来事の小さい大きいなど関係なく、いろんな考えができるようになったと思っています。アスラマで出会った人々・ホームステイの家族・村の人々・小、中、高校で出会った子ども達、吸収させてもらったことばかりです。結果的にいうと私の成長には、本当に繋がりました。けれど私が良くなることなどより他人のために何かできたこと、他人を喜ばせてあげること、そうすべきだったことが数えられないくらいあります。IWCの中では、プログラムが決まっています。ワークをしたり、日本語授業をしたり、子どもとの交流などたくさんありました。その時間ももちろん大事ですが、それよりインドネシアで過ごした普段の時間にどれだけ他人のことを考え、目の前のことに対して今、私は何ができるのかももっともって考えて行動すべきでした。できなかったのは、活動している中で、どこかに自分自身のことを優先にしていた部分があったからです。今、考えても遅いですが、後悔している部分もあります。ただの口先だけでは意味がなく、行動にしなければ意味がないということも重々わかりました。もし参加する前に戻れるのなら、重く考え過ぎずに、今私ができることは何か、他人に与えることのできるものは何か、そういった単純だけど決して忘れてはならない大事な思いを胸にこめて行動していると思います。最初にも言いましたが、出会いと別れがたくさんある日々でした。いつ、どこで、どうやって人と会おうかは様々です。今回のいろんな人との出会いにも、一つひとつ意味があります。私の人生に影響を与えてくれる人もいれば、印象に残らない人もいると思います。それは人それぞれなのであると思います。人間なので忘れてしまうかもしれませんが、出会った時にいろんな感情になって、相手の良いところを吸収さ

してもらうのも、私が何を与えるかも自由です。出会いには、本当に大きな意味があります。IWCでたくさんの感謝の気持ちにもなり、申し訳ない気持ち、嬉しくも悲しくもなりました。その一つひとつを大事にしてこれからの日々を過ごしていくつもりです。最後になりましたが、アスラマのみんな、インドネシアでの私の家族、そして団長の三宅先生、松平チャブレン、阪口先生、谷詰さん、スイクラマさん、フォルマンさん、美和さん、キリスト教センターの方々、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

Terima kasih

Shingo Yoshida (Shingo)

kebudayaan di indonesia dan jepang memiliki banyak perbedaan

dalam perbedaan kebudayaan itu saya menghabiskan waktu selama 18hari di indonesia berbeda dalam cara makan, waktu tidur, dan juga tata krama

pertama kalinya saya tidak terbiasa akan hal itu

tetapi sangatlah mudah bagi saya untuk membiasakan diri

saya memiliki waktu yang sangat menyenangkan di indonesia

tinggal di asrama sangat enak

saya mendapat makan 3kali sehari

pada saat itu ada banyak hidangan dan nasi

hal tersebut terasa sangat mewah

terima kasih

saya sangat berterimakasih kepada keluarga di tempat saya menginap

saya sangat senang mereka memperlakukan saya seperti anak mereka sendiri. mereka adalah orang-orang yang sangat baik

terimakasih juga kepada para pelajar Indonesia saya sudah di bantu berulang kali maaf jika saya tidak bisa mengajarkan bahasa jepang dengan baik yusuf, ade, ishak, betty, osin, novelyn, terimakasih

saya bertemu dengan banyak orang di indonesia saya mendapatkan banyak keberanian saya sangat senang bisa mendapatkan banyak pengalaman. saya tidak akan pernah melupakannya saya sangat berterimakasih telah bertemu dengan kalian semua.

terima kasih

社会学部社会福祉学科 香川 友希 (ゆきち)



<行くぞ！ インドネシア>

「私はこのまま大学を卒業するのはもったいない」「社会人になってしまっただけでは海外に行く機会はない」「大学生生活最後に貧しい人達をこの目で見て、少しでも自分ができたいことをしたい」「将来に生かせるような経験をインドネシアでしたい」という思いからIWCに参加しようと思いました。

<事前研修&準備>

私は授業の都合で、木曜日の事前研修に出席できず、後で研修内容を収録したDVDを見て学んでいました。正直なところDVDを見てもあまり頭に入ってこず時間ばかりが過ぎていました。しかし、夏休みの合宿や事前準備でダンスや歌の練習をすることで皆との仲も深まり、毎日がすごく

充実していて、IWC26のメンバーでインドネシアに行って、さまざまな事を学びたいという気持ちが高まってきました。

<言葉の壁>

私はホームステイがインドネシアの学生と一緒にでした。最初のうちはホストファミリーと挨拶などの簡単な話しかできずほとんどインドネシア学生のベティに任せきりで、インドネシア語があまり分からない私は取り残されている気持ちでした。しかしベティとは辞書やインドネシア語の指さし本を使いインドネシア語で会話してすごく仲良くなり、ベティと一緒にホストファミリーと話すことでゆっくりではありましたが、コミュニケーションをとることができるようになりました。私はベティと一緒に本当に良かったです。私の聞き取りにくい英語やインドネシア語を理解したいという気持ちがすごく伝わってきてとてもうれしかったです。理解したいという気持ちがあれば言葉の壁なんてないと思いました。

<アスラマの子ども達>

アスラマには、多くの貧しい子ども達が生活しています。親がいない子どもや、家族とバラバラになっている子どもがアスラマで生活しています。子ども達がアスラマで生活している理由は、インドネシアでは貧しい場所が多くあり、家族みんなで生活できない家が少なくないからです。貧しく家族がバラバラで生活しなければ生きていけないという環境は豊かな国である日本では考えられないことです。しかし、子ども達は家族から離れて寂しいはずなのに、笑顔でとても楽しそうでした。子ども達は、アスラマにいれば学校にも行けるし、毎日3食ご飯を食べられるし、危険におびえることなく暮らせるので幸せだと言っていました。アスラマの子ども達は貧しくて、親から離れて生活している現状をしっかりと受け止めて、生活していると思い、たくましさを感じました。

<幸せとは>

インドネシアの子ども達は質面が貧しいけど、

日本の子ども達は心が貧しいというスィクラマさんの言葉を聞いてその通りだと感じました。確かに日本の子ども達は物に不自由することはほとんどないと思います。しかし、虐待や親に放置されている子どもがいることから、心が貧しい子どもが多く存在しています。日本の子どもは恵まれている環境に慣れすぎていて幸せの基準がすごく高いと思います。幸せの価値ははたして物があるからでしょうか。私は正直欲しい物はたいていなんでも手に入る日本の子ども達は、インドネシアの子ども達と比べてすごく恵まれていて幸せな国だと思っていましたが、スィクラマさんの話を聞いてそんなこともないと思いました。幸せはいつも自分の心が決めると思います。私はインドネシアの子ども達がかわいそうだと思っていましたが、インドネシアの子ども達はすごく笑顔で楽しそうでした。私はインドネシアに行って子ども達と過ごすことによって幸せについて深く考えることができました。そして、小さな事で悩んでいる自分自身を情けなく思い、どんな状況でも明るく楽しく生きていこうと思いました。

<食べ物>

私は今まで動物園で見る、牛や豚や鳥などの生き物が食べる肉という事を知ってはいましたが、分かってはいませんでした。アスラマには養豚小屋があり豚を見学に行きました。日本のカレーを作る時に生きた豚の首を切り、毛を剃っている姿を見ました。そして、アスラマのババ達によってバラバラに解体された豚を日本の学生が細かく切りました。豚はとてもきれいな赤色をしていて、臭みはほとんどなかったです。肉だけではなく、鼻や耳なども袋に入っていて、本当にあの豚なのだと思います。それから、カレーが出来上がり、その肉はいつもよく見るカレーの肉でした。私は生きた豚がカレーの肉になるまでの過程をまじかで体験し、食べ物は生き物の命を奪ったものだと改めて思いました。私は、この経験から「いただきます」という言葉の重さを知り、また与えられた食べ物に感謝し、残さずに食べようと思いました。

<交流会>

私は交流班のリーダーでありながらみんなを上手くまとめることができなかつたと思います。私は自分がこうしたいという意見をしっかり持っていて、交流会を成功させたいという意志からリーダーになったのですが、実際は意見をぶつけ合う皆をまとめることができず、他の班の人達にまで不快な思いをさせてしまって申し訳なかつたです。しかし、交流会が近づいてくると皆で協力し、練習もスムーズに進める事ができ、また本番の交流会でも子ども達と学生がみんな1つになって楽しむことができたので私は大成功だつたと思います。

<IWC26のメンバーたち>

今年のIWCに参加できて本当に良かったです。私は始め4回生が1人だけだし、自分が一番上だから先輩としてしっかりしなきゃと思っていて、少し気を張っていました。しかし、多くの仲間のおかげでIWC26が自然体でいられる自分の居場所になったと思います。私は、みんなのおかげでワークキャンプを乗り越えられたと思います。本当にありがとうございます。みんな大好きです。

<最後に>

インドネシアで過ごした18日間は本当に感謝でいっぱいでした。たくさんのお会いと別れがあり、あっという間に18日間で過ぎていきました。出会った人達は皆温かくて、私はインドネシアで出会った人達が大好きになりました。私は、もうすぐ卒業して社会人になりますが、人との出会いを大切に、インドネシアで出会った人たちのように温かい気持ちで人に接しようと思いました。IWCに参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。

Terima kasih

Yuki Kagawa (Yukichi)

Bagaimana kalian?

Aku baik-baik.

Sun adalah dalam hidup saya benar-benar tak tergantikan selama 18 hari dan orang-orang ini. Hal ini begitu penuh rasa terima kasih telah bertemu banyak indah.

Pelajar Indonesia yang berusaha sangat keras untuk memahami bahasa Inggris saya miskin dan Indonesia.

Mereka sangat ramah dan ramah dan cerah.

Jadi saya bisa menjadi teman dengan mereka segera.

Saya pikir tanpa mereka, IWC26 ini tidak berlaku.

Saya benar-benar senang menjadi bagian dari IWC. Makan siang dan semua

Saya ingin mengucapkan terima kasih kepada orang-orang dan semua.

Saya melakukannya dari sana, karena semua orang punya.

IWC Saya pikir ini adalah sesuatu yang kita membuat diri kita, dan telah didukung oleh berbagai orang.

Saya sangat berterima kasih kepada rekan-rekan yang telah mendukung IWC26 keduanya belajar bersama.

Terima kasih semua orang.

Hal ini berkat Indonesia yang telah berkembang.

Saya ingin mengatakan kepada orang-orang yang saya temui di Indonesia. Terima kasih. Aku akan melihat Anda lagi. Saya juga selalu seperti yang dijanjikan, akan bertemu dengan setiap orang.

Saya pikir saya telah menjadi anggota masyarakat segera setelah lulus dari St Andrew, mencoba

untuk terhubung ke orang-orang di suatu perasaan hangat sebagai orang-orang yang menghargai pertemuan dengan orang yang saya temui di Indonesia.

Saya benar-benar senang menjadi bagian dari IWC.

Terima kasih

学びと成長

経営学部経営学科 香川 貴俊 (たかとし)



<初めに>

この国際ワークキャンプ（以下IWC）に関わってくれた全ての人に感謝したい。私は、だらけた大学生活を変えたくて、IWC26に参加した。昨年も応募したのだが、筆記試験と面接で落選してしまった。しかし、どうしても参加したくて再度応募した。なぜそんなにも参加したかったのかというと、「刺激がほしかった」「自分の何かを変えたかった」「今まで様々な人に頼って生きてきた分、他の誰かの為に貢献したかった」という理由からである。そのような思いが私の心を突き動かしたのだろう。

<インドネシア バリ>

デンバサール空港に降りた私は、まずバリの気候を肌で感じた。日本のジメジメとした、立っただけで汗ばむ、そんな気候ではなくカラッとした気持ちの良い暑さだった。ホテルまでバスで移動したのだが、バスから見える風景は汚い街並みで、交通マナーが全く守られていなかった。バイクの3人乗り、ノーヘルメット、無理な

追い越しなど。これが有名な観光地バリなのかと衝撃を受けた。ただ、その風景は、空港周辺だけでホテル、市街地、プリンピンサリ村は綺麗だった。交通マナーは相変わらずだが、インドネシア人はフレンドリーで街中の人と目が合うと手を振ってくれる。文化の違いというのは面白いものだ。

インドネシア料理は、辛くなくとても美味しかった。私は見た目通りの少食なのだが、そんな私が必ず3食ともにおかわりをした。日本ではありえないことで、それほど美味しかったのだ。

<インドネシアの学生>

オシン、ノフェリン、ベティ、アデ、イッサ、ユスフの6人は日本の学生と18日間、IWCを共にする新しい仲間だ。初日のホテルでの食事時、2日目の日本語授業と交流会についてのミーティング時、私は緊張しっぱなしだった。私は極度の人見知りで、これは私にとってどうしようもないことなのだ。私と同じような日本の学生もいたのではないだろうか。しかし、インドネシアの学生は全員フランクに積極的に私に話しかけてくれた。コミュニケーションは本当に大切なことだ。18日間共にする仲間、日本語授業、交流会、スポーツ交流、IWCすべてのプログラムにはインドネシアの学生の力が必要だった。私も慣れない英語と格闘しながらもコミュニケーションを取った。仲良くなるのにそんなに時間はかからなかった。

インドネシアの学生はとても勤勉だ。日本語についてよく聞いてくる。日本語での自己紹介をしてくれた学生もいた。夢を聞くと日本に行くことだと言っていた。だから日本語の勉強をしているそうだ。夢の為に必死に勉強をしている姿を見ると私も頑張らなければと思った。

ホームステイ先は、アデと一緒にになった。彼は12日間1つ屋根の下、同じ部屋、ダブルベッドで寄り添いながら寝た、親友だ。彼は優しく明るく、よく寝る、よく食べる。インドネシアの学生全員がそうなのだが、そして、真面目であり面白い。会話はインドネシア経済のことから、日本のギャ

グに至るまで盛りだくさんであった。日本のギャグを完璧にマスターした彼は、IWCメンバー全員を笑わすことに成功した。またインドネシアの文化について熱く語っていた彼の顔は忘れられない。一つひとつの小さなことが思い出になった。本当に楽しかったし、それぞれの個性が強かったインドネシアの学生との交流は、貴重な体験だった。別れの時、悲しくていっぱい泣いた。久しぶりにいっぱい泣いた。

<プリンピンサリ村 アスラマ>

アスラマに着くと子ども達が歓迎してくれた。ここの子ども達78人は故郷に学校がなかったり、教育費が払えなかったり、様々な家庭事情により保護されている。様々な国がアスラマを支援して、多くの人がボランティア活動をしている。ここの子ども達は人懐っこく元気いっぱいだ。久しぶりに全力で追いかけてっこをしたり、アルプス一万尺をしたり、たくさん遊んだ。日本の子どもと何かが違った。一概には言えないが、育った環境が違うのか、転んだだけでは簡単には泣かない、アスラマの館長ワヤンさんの教育のおかげか、食器洗いや掃除をする時にしてもふざけず真剣だ。アスラマの子ども達は、自分の身の回りの事は全て自分です。オンとオフの切り替えがしっかりできていて、しっかりしているような気がした。

ホームステイ先は、温かく幸せいっぱいの家庭、そんな感じだった。家族は英語が喋れず、コミュニケーションを取るには、通訳としてアデが必要だった。アデには感謝しきれない。しかし、直接話さないと会話をしている気がしなかった。インドネシア語の指差し本を使い、つたないインドネシア語でも分かるうとしてくれる家族にとっても感動した。毎朝、熱くて甘い紅茶とパンケーキを出してくれたり、ベッドメイキングをしてくれたり、本当にありがとうございます。日本食パーティーにはイブと末っ子の子どもが来てくれた。日本食パーティーは学生が作ったカレーをホストファミリーに振る舞うプログラムだ。少し辛かったみたいだが、とても喜んでくれた。恥ずかしがりの末っ子の子どもと偶然家に帰るとき会って、

コンビニでお菓子を買ってあげた、直接ありがたうとは言えず、イブを通して聞いた。いつになるかは分からないけど、また必ず会いに行きたいと思う。

<ワーク>

このIWCで一番頑張ったこと、それはワークだ。胸を張って言える。今回は未舗装の道路をコンクリートで舗装する仕事だ。この道路は子ども達の通学路になっていて、転ぶと危ないということでIWC25の学生が提案してくれた。それと、畑を耕してトウモロコシを植えること、同時進行で2チームに別れてワークをする。みんなで声を出して、士気を高める。体を動かすことは好きだ。一回も体調を崩すこともなく身体は絶好調。きついワークだったが、楽しくてしょうがなかった。砂利と砂とセメントを機械で混ぜてコンクリートを作り、“ネコ”とバケツリレーで運び、木で囲われた所に流す。均すのも人の手によってだ。日本のようにすべて機械でするのではなく、ほとんどが人の手によって作業を進めていく。コンクリートが服や身体中についたし、汗もいっぱいいた。それでも仲間と共に1つの目標に向かって体を動かすことが、こんなにも楽しいことだとは知らなかった。

しかしワークに慣れてきたころ早く仕事をすれば良い、そんなことを思いはじめた。これは、協働ではないと先生に指摘された。チームワークを大切にする事が協働の意味だ。私は、早く仕事をすればすごいとかかっこいいと、そういう風に勘違いしていた。指摘を受けてからは、現地の人たちを含め皆で協力し合えたと思う。予定通り道路が完成し、私は充実感に満たされた。畑仕事の方もアスラマの職員さんの下で鋤を振り続け石を運び畑を耕した。離村式の日にはもう芽が出ていた。トウモロコシは水が貴重なアスラマでは最も良い食物なのだ。

<交流会>

8月28日交流会当日。交流班の一員として、何としても成功させたいと思っていた。結果から言

うと、個人的には大成功だったと思う。事前研修からずっと練習してきた、歌とダンス。インドネシアの学生も日本の歌を用意してくれた。すごく上手くて、とても練習してくれてののだと思う。当日、スムーズにプログラムが進むように前日にワヤンさんと打ち合わせをした。CDの再生と停止を押す役、急遽プログラムの変更、様々なことを自分なりに頑張れた。途中でメンバーと衝突したこともあった、完成度の低い歌、本番に出だしがずれてしまったダンス、それでも大成功だったと思う。とても楽しかったから、子ども達がとても喜んでくれていたから、披露したダンスを後日、子ども達が真似て踊っていたから、交流会を通して、子ども達と学生はより仲良くなることができた。また、交流会の準備を通じて私達学生が仲良くなるきっかけになったのではないかと思う。また、皆の意見をまとめることの難しさ、リーダーシップを執ることの難しさを強く感じた。

<帰国>

日本に帰国して、普段の生活に戻ってしまった。IWCに参加する前とは違い、だらけた大学生活がIWCの予定で忙しくなり、友達も増えた。今になってまた一段と強く思うことがある。インドネシアでの生活の充実感と最高の思い出ができたことだ。毎朝6時に起床し、夜22時に就寝する。規則正しい生活は、日本に帰国して崩れ去ってしまった。一日中何かしら活動していた充実感は計り知れない。インドネシアの文化を体験して、たくさんインドネシア人に出会い、インドネシアを様々な角度から見る事ができたのは、今後の自分にプラスに働くと、そのように思っている。少しではあるが自分の成長につながったと思う。

最後に、この報告書を読んでIWCに興味を湧いた学生の皆さん、参加しようか迷っている学生の皆さん、是非IWC27に参加して欲しいと思う。自分の中の何かが変わります。

Kenangan

Takatoshi Kagawa (Takatoshi)

Saya pikir saya baik untuk dapat berpartisipasi dalam IWC. Saya ingin mengucapkan terima kasih kepada orang-orang yang telah terlibat dalam IWC26. Saya pikir jika tidak ada kerjasama dari semua orang, tidak program ini tidak akan berjalan dengan baik. Saya telah belajar banyak hal dari mahasiswa Indonesia. mereka memperlakukan saya dengan baik dan ramah. saya tidak akan melupakan kalian sampai kapan pun. Kalian adalah teman terbaik bagi saya.

Staf Asrama, selalu menyediakan makanan bagi kami, atau membantu saya dalam hal pekerjaan, terima kasih kepada ibu. Saya dibuat senang oleh anak - anak asrama lewa senyuman mereka.

Untuk keluarga homestay. Terima kasih karena, selalu menyediakan saya secangkir teh setiap pagi, Terima kasih untuk tempat tidur. Waktu untuk berbicara dengan ibu dan ayah adalah waktu yang sangat berarti. Saya ingin berkunjung lagi ke homestay suatu hari nanti. Saya sangat terkesan dengan kehangatan dan kebaikan dari masyarakat Bali. Budaya Bali sangat menarik. Semua tempat dan kebiasaan orang Bali membuat saya terkejut, karena itu semua merupakan pengalaman pertama bagi saya. Saya pikir pada saat yang sama dan masih tidak lupa untuk mandi di malam hari, dan juga ingin mengalaminya kembali.

Saya tumbuh melalui IWC26. Saya berpikir bahwa ada kerjasama dari Anda juga. Silakan siswa terbaik di Indonesia untuk pergi ke Jepang, dan wujudkan impian. Impian saya adalah pergi ke Indonesia, Anda juga harus pergi untuk melihat Jepang. Terima kasih semuanya!

大きな愛に包まれて

経営学部経営学科 高橋 創 (はじめ)



<初めに>

何か意識して物事に当たる時や、ふとした瞬間に自分の意見を改めることや、考えの幅が広がったと感じることがよくある。今回参加した国際ワークキャンプ（以下IWC）でも、そう感じるものがたくさんあった。プリンペンサリ村である日、先生が「体験を経験にする」という話をしてくれた。この言葉を私は、「様々なことに意識を向け、そこで自分が思ったことを大事にしてください」という意味でとらえているが、IWCの活動の中でしてきた貴重な体験を、経験にしてこれからに役立てていきたい。

ボランティアに関して、高校生の時までは学校行事で行われる地域の清掃活動のようなものにしか触れたことがなく、「なんでこんな面倒なことをしないといけないのか」という思いをずっと持っていた。ボランティアに興味を持つようになったのは、大学に入ってからで、去年参加した東北と和歌山の復興支援活動がきっかけだった。それらの活動で色々な経験をさせてもらい、ボランティアの意義を実感した。もちろん最も重要なことは支援活動だが、活動をする中で何かを感じるといふことに大きな意味があると思う。IWCとは、振り返るとそれら全てが含まれている活動であった。

<日本からインドネシア・バリ島へ>

関西国際空港から飛行機で約7時間、バリ島は想像していたよりも遠かった。乾季のインドネシアの気候は、日差しは強いが日陰に入ると涼しくからっとして、日本のまわりつくような熱

気は無かった。またバリ島の交通に関して、この島には電車が無いため、バイクがとてもたくさん走っている。プリンピンサリ村へ向かう時など、片道一車線の道でも結構きわどいタイミングで追い越しをかけたりして危ないと感じた場面がいくつかあり、インドネシアの運転は少し荒いと思った。

＜インドネシアの学生＞

インドネシアの学生はとても親しみやすく、慣れない土地で緊張している私達を気遣ってくれる優しさを持っていた。初めは言葉の壁を感じ、どう話していいかわからなかったが、仲が良くなるにつれてお互いに言いたいことがわかるようになり、コミュニケーションの幅も広がった。また幸いだったのは、インドネシアの学生は英語が堪能だったことだ。そのことによりコミュニケーションをとる上でとても助かったと同時に、インドネシアの学生の凄さと自分の語学力の無さを思い知ったし、使い慣れない言語での会話だったのでお互いに伝えきれないことがあり、もどかしさや異国間のコミュニケーションの難しさを味わった。日本に行きたいと言っていた学生もあり、桃山学院大学とディアナブラ大学との交換留学制度が整ったらぜひ来て欲しい。

＜ソカ村を訪問して＞

デンパサールからプリンピンサリ村へ向かう途中で、去年のワーク地のソカ村へ訪問した。植林地の紹介で、去年に植えた木を見せてもらったが、1年しか経っていないにも関わらず、もう私の背丈以上にも伸びていた。インドネシア全体を通して水は貴重なものだが、ソカ村では特に清潔な水が不足しており、農薬などで汚染された水を生活用水として使わざるを得ない深刻な状況にある。そこで、今年からオーストラリアの支援団体と共同で井戸を掘ることになり、私達もその井戸を見せてもらった。日本では蛇口を捻ればすぐに水が出てくるが、水不足できれいな水ではないとわかっていながらも、その水を使わなければならない場所もあることが身をもって分かった。

＜アスラマ・プリンピンサリ村＞

今年アスラマの入り口の道をコンクリートで舗装するというワーク内容もあり、1日のほとんどをアスラマで過ごした。アスラマの子ども達は本当に可愛く元気いっぱい、満面の笑みを私達に見せてくれて、私達にたくさんの元気をくれた。プリンピンサリ村のアスラマは小学生ぐらいの子どもを受け入れているので、小さな子どもが多かったが、みんなしっかりしていて、食後の掃除や食器洗いなど、自分でできることは自分でするようにしていた。アスラマは貧困により子どもを育てることができない家庭の子どもや、紛争で親を亡くした子どもを受け入れている施設だ。だからアスラマにいる子どもはみんな何かしらの理由で親元を離れて暮らしている。子ども達の出身村のパニユポ村に行く機会があったが、村に近づくにつれて土地がだんだん痩せていき、緑が無くなり土色の風景に変わっていく様は忘れられない。パニユポ村の住民はいわゆる小作農をしていて、ブドウを育てている。しかし収入のほとんどを地主に渡さなければならず、そのために教育に回すお金が出せず、教育を受けられないまま育つので、その子どももまた貧困から抜け出せない状況にある。その流れを変えるためにアスラマでの受け入れをしているが、受け入れ人数にも限界があるため、兄弟の中から1人だけアスラマに行くこともある。私達と遊んでいる時は無理して笑っていたことはないと思うけど、その笑顔の裏でそんな辛いことがあったらと思うと、私達が行ったことで少しでも心が軽くなってきていたら嬉しい。

プリンピンサリ村はとても過ごしやすい村だった。村人は挨拶をするとバイクで走っていても笑顔で返してくれて、ホームステイ先の家族だけでなく村全体が優しくしてくれた。慣れない土地で過ごす私達にとってこれは何よりもありがたいことで、プリンピンサリ村での日々を心地よく過ごすことができ、とても感謝している。ただ犬が放し飼いにされていて、夕食後に帰ると毎回吠えられ、足首あたりまで寄ってきたこともあったので、それは怖かった。

<バリの家族>

デンパサールで泊まったホテルとは違い、ホームステイ先では勝手の違いに戸惑うこともあった。まず日本の浴室にあたるマンディ場ではお湯が出ない。マンディは日本でいうお風呂で、いってみたら水浴びだ。最初は寒くてたまらなかったが、暮らすうちに慣れていき、ワーク後のマンディなどは特に気持ちがいいと感じるようになった。日本人2人のペアで、インドネシア語での会話になると厳しいと感じていたが、パパや兄弟が英語を話せたので、仕事やバリについて色々聞くことができた。イブも言葉は通じないがよく声をかけてくれて、寝る前に辞書を片手に色々なことを話した。家族は全員が明るく、寝る前の会話はとても楽しかった。朝が早いにも関わらず毎朝ご飯やコーヒーを出してくれたり、交流会で着る伝統衣装を貸してくれたり、挙げていったらきりが無いけれど、たくさんお世話になった。ホームステイはほんの短い間だったけど、私達のことを息子と言ってくれて、また私達は家族だと言ってくれて本当に嬉しかった。またバリ島に行く機会があれば行きたい。

<ワークについて>

今年のワークはアスラマの入り口の舗装だった。業者の方に来てもらって、機械にセメントの粉と、トラックで運ばれてきた石と砂を入れてコンクリートを作り、バケツリレーと手押し車でそれを運び、コテでそれを均すという内容だったが、日中の作業はとても暑く、コンクリートを作るのに重い土や砂利を常に運ばなければならなかった。体力のベースを保つのが大変だった。またコンクリートを作る側は重い物を運ぶのがメインになるので、どうしても男手が必要となるので、男女で負担の差ができてしまい、ちょっとした問題になった。そもそもこれは協働なので、負担が大きい方が頑張っているというわけではないのだが、進行具合を見るのが難しく、期限内に終わらせたいという意識の中で、ペースを上げすぎて、入りにくい雰囲気を作っていたかもしれないので、これは反省すべき点だ。

<ありがとうございました>

IWCの活動ではたくさん得るものがあった。日本やインドネシアでの活動では普段考えないようなことを考える良い機会になったし、日本に戻ってきてから思うこともあって、そういう意味ではまだ体験中なのだと思う。まだ中学・高校訪問、交流会、日本食、そしてワークなど、それ以外にも書ききれない程のたくさんを経験した。それをしていく中で得たものはとても貴重なことばかりだ。

今回の活動を通して、「協働」を特に強く意識した。ワークをしているとどうしても体力の差などの理由から人によってできる、できないことがある。でも、そこで全員がひとつになってことに当たっているという意識を持つことがワークの内容や全体の充実につながるはずだ。今回の活動ではまだまだやりたかったこと、できなかったことがある。思い返すと空回りばかりしていて悔しい思いもあったが、それ以上にみんなとIWCの活動に取り組めたこと、インドネシアでのワークや交流などで胸がいっぱいだ。迷惑をいっぱいかけてすみませんでした。でも、IWCに参加してこんな経験をさせてもらえて本当によかった。IWC26期のメンバー、教職員の方々、チャペルセンターの事務の方々、スィクラマさんフォルマンさん、募金に協力してくれた方々、IWCを支えてくれたすべての人にありがとうございました！

Terima kasih

Hajime Takahashi (Hajime)

Aku benar-benar baik untuk pergi ke Indonesia
Bahwa saya benar perasaan
Saya tahu banyak hal untuk berpartisipasi dalam IWC
Acara di Indonesia tidak hanya hal yang bahagia
Ada juga untuk melihat kenyataan pahit
Namun, ada dapat dilihat untuk pertama kalinya sehingga

Saya menyadari masalah di IWC saat ini
Saya menyadari hal itu
Aku seharusnya menyadari orang lain
Jika banyak orang memiliki rasa masalahnya
adalah demikian untuk memecahkan
IWC jadwal sibuk merasa sangat menyakitkan
Tapi kami selesai dengan aman
Setelah menyelesaikan kunjungan desa dan
desa Banipo Soca, tampak skala kecil kegiatan
ini
Saya ragu apakah ada artinya untuk melakukan
hal ini benar-benar
Namun, saya tahu saya lakukan, karena ada
orang yang bersukacita
Indonesia sehari-hari kemudian memenuhi
Pertemuan dengan mahasiswa Indonesia dan
keluarga homestay dan anak-anak dan penduduk
Burinbinsari Asurama adalah sesuatu yang tak
tergantikan
Mereka selalu ramah
Saya pikir benar-benar melihat diri saya sendiri,
dan hal-hal yang kurang
Saya berpikir untuk pergi ke Indonesia, Jepang
dan banyak hal
Namun, ingat hari-hari di Bali, saya pikir orang
yang saya temui dan budaya yang unik dari
Indonesia
Lalu, saya merasa kekayaan yang berbeda dari
Indonesia masih belum matang di beberapa
tempat
Tetapi berbeda dengan orang miskin
Indonesia adalah negara yang menarik
Saya suka Indonesia
Saya suka orang Indonesia
Terima kasih banyak
Sampai jumpa lagi!

インドネシアでの18日間

国際教養学部国際教養学科 寺田 朱里（あかり）



<はじめに>

インドネシアワークキャンプに参加しようと思ったのは、何か大学生のうちに今までにやったことのないことがしたいと思ったからである。今までの貴重な大学生活の中で特にこれといった経験もなかった私は、この機会を逃したら後悔すると思い参加することに決めた。私の家には父が農業をしている関係で東南アジアから研修生が来ることが多く、彼らとの出会いもまたインドネシアへ行く大きなきっかけとなった。

<異国の地で>

私は今まで日本から出たことがなかった。つまりインドネシアは私にとっての初めての海外だった。デンパサール空港について現地の人々が地面に座っている様子がまず目に飛び込んできて、正直異様な光景だった。しばらくはインドネシアに来たという実感が湧かず、ホテルで大きなヤモリをみた時にああ外国に来たのだと感じた。ディアナプラの町中はオートバイだらけで3人、4人乗りはごく普通のこと。本当にあのバイクの量には驚いた。

私がインドネシアに来て一番文化の違いを感じたのが入浴（マンディ）とトイレである。ホームステイ先ではお湯は出ず水だったが、私はホームステイの初日に間違えて洗面用の水を使い、水かさが減っていたためにホストファミリーが驚いていた、と同じホームステイのインドネシアの学生が教えてくれた。シャワーが上についていると知ったのはその後だった。あとで考えてみると、シャワーと水を溜めてあるところが分かれているの

だから何に使うのかは分かるし、洗面用の水の方が水温も低いので私はそれで水浴びをしていたかと思うと、笑うしかない。水が冷たくて心臓に悪いくらいだったし、修行僧のような気分になった。今では良い笑い話だ。トイレは日本のようにトイレットペーパーはなく、水で洗うという様式だったため慣れるまでは大変だった。日本人は世界で一番トイレットペーパーを使うというから驚きである。でも「郷に入れば郷に従え」で入浴もトイレも慣れると平気になっていた。文化的な違いであっても、日本ではごく当たり前のようにお湯が使えて、トイレットペーパーもあるという恵まれた環境で生きていて、当たり前のことを当たり前ではないと気付けただけでも私にとって人生の大きな糧になったと思う。プリンビンサリではホームステイ先に帰る時に犬がついてきて恐怖の体験をしたこともあったし、日本ではあまり見かけないリスや猿を見かけることもあった。とにかく日本では絶対できないことをたくさん味わった。驚きの連続と新たな気付きで日々が過ぎていった。

<温かいホストファミリー>

プリンビンサリではホームステイを体験した。インドネシアの学生とペアだと聞いた時は不安でいっぱいだったし、驚くしかなかった。事前研修でインドネシア語は勉強したが、自発的に勉強していなかった私は全然話せず、インドネシア語よりかはいづらか話せるということで英語を使っていた。初めのうちは上手くコミュニケーションがとれず、一人泣いたこともあった。私はインドネシア語が全然話せなかったので、ペアのインドネシアの学生のノフェリンは、ホストファミリーと話す時私のために英語で通訳してくれた。そのため彼女はホストファミリーとはインドネシア語、私とは英語で話していた。また、日本語も上手でヒアリングがいいのだと感じた。ノフェリンはいつも私のつたない英語に耳を傾けてくれ、私は本当に助かっていた。彼女の通訳がなかったら私はホストファミリーと交流できなかった、といっても過言ではない。彼女には本当に感謝している。

ホストファミリーとは初めのうちはほとんど話せなかったが、インドネシア語の指差し本を使ったり英語も少し通じたりで、少しずつだが緊張が解けていった。パパ（父）はとても陽気で、音楽をこよなく愛している人だった。パパのガムラン、リコーダーの演奏は大好きだ。イブ（母）はおだやかで優しい人で、洗濯物を干すのを手伝ってくれたり私の体調が悪かった時に気遣ったりしてくれた。娘さんとも最後の方はたくさん話することができたり、写真を一緒に撮ったりお菓子を食べたりと、団らんの中でホストファミリーの温かさにとくさん触れることができた。また、ホームステイ先がアスラマから遠いこと、ノフェリンが足を怪我したこともあってよくバイクで送り迎えをしてもらった。別れの時はとても寂しかった。またおいでと言ってくれて嬉しかったし、この家族に出会えたことに感謝したい。

<アスラマの子ども達>

アスラマでは経済的に苦しく、またはその他家庭の事情などで親と一緒に生活できない子ども達が生活している。初めて会った子ども達は無邪気な笑顔が印象的だった。その笑顔の裏にさまざまな想いをもちながら生活しているのだと思うと、胸が苦しくなったこともある。一緒に絵を描いたり折り紙をしたり、言葉はあまり話せなかったけど隣に座っているだけで温かさを感じた。アスラマで子ども達と一緒に過ごしていく中で、本当に一生懸命に明日に向かって生きているのだと感じた。それは決められた時間に寝起きしたり、ご飯を食べた後に食器を洗ったり掃除をしたりと、自立するためにそして生きていくために必要な、大切なことを身につけているのを見ていて思ったのだ。子ども達の方が自分よりよっぽどしっかりして見えることがあって、まだまだ親に頼ってばかりいる自分が恥ずかしく思えた。

子ども達からは生きていくうえで大切なことを学んだ。子ども達を見ているとワークで疲れていても頑張ろうと思えたり、彼らの笑顔には本当に癒された。名前を知らない話したことのない子ども気軽にあいさつをしてくれて嬉しかった。子ども

達のまっすぐで素直なところは見習うべきところ
だと思う。

<ワーク>

私達が取り組んだワークは道路舗装と、畑で野菜を育てるための石やゴミの除去である。道路舗装はでこぼこの砂利道が子ども達にとって危険だということで、コンクリートできれいに整えるというものだった。コンクリートを作る工程から始まり、パケツリレーでコンクリートを運び、流し入れの作業を繰り返し行った。初めは効率を上げることしか頭になく、結果早く疲れてしまうということになってしまった。その点も改善していった確実に着実に作業を行っていくうちに、達成感も感じるようになった。だから最後に道が完成してみんなで写真を撮った時はものすごく嬉しかったのを覚えている。道路舗装と畑の石の除去と二班くらいに分けて同時進行で作業をしたが、私は畑の方が多く、労働班でもあったので休憩の時間をみんなに知らせるということをしていった。最初人任せだったが、それではだめだと思い行動するようになった。畑がきれいになったときは嬉しかったし、大きく育った野菜を想像するとわくわくする。ワークに取り組むことで、みんなで何かを成し遂げるすばらしさ、物事を行うのには責任がついてまわることなど身をもって学んだ。

<周りの人々に感謝>

このワークキャンプで何度か体調を崩したことがあって、そのときに気づいたのが周りの人達の温かさだ。看護師の美和さんには何度もお世話になったし、気遣ってくれたIWCのメンバーには感謝したい。同時に自己管理ができていない自分の未熟さを感じた。また、このワークキャンプに参加させてくれた両親、募金してくれた人達、先生方、IWCの日本の学生、インドネシアの学生、ホストファミリーなど関わった全ての人達に感謝したい。ワークキャンプに参加できて心から良かったと思う。この経験は一生忘れないし、自分を成長させてくれたこの機会を逃さないで良かった。本当にありがとうございました。

Terima kasih

Akari Terada (Akari)

Seperti pencitaam materi perdikan untuk mengajar studi bahasa Jepang dan Indonesia dengan semua orang dari sebelum belajar, setiap hari adalah sulit.

Topi, saya bias menjadi bagian dari kamp ini sebagai anggota IWC26, itu bagus untuk bertemu anggota ini untuk berpikir. Saya tidak mungkin terpenuhi jika Anda tidak memiliki kemempatan ini, saya juga dapat menyadari pentingnya hubungan antara orang yang bekerja pada satu hal oleh sesuatu berusama-sama.

Indonesia juga merupakan pertama kalinya yang asing bagi saya, benar-benar hari saya bingung dan terkejut orang. Kondisi fisik dan belum mampu memecahkan manajemen diri, dan manadgis kejujuran kadang menyakitkan. Menit konten substansial, seringkali serius, saya kadang-kadang memyakitkan secara fisik pekeriaan, jadwal kamp kerja kang-kang menjadi keras mental di lingkungan yang tidak terbiasa dengan homestay yang. Karena ada kehangatan dari orang-orang sekitar dibantu dalam hal itu. Anak guru mahasiswa Jepang IWC, pelajar Indonesia, dari diskon, keluarga angkat, Asurrama. Saya terbiasa merasa benar-benar bahagia don aku tersenyum ketika saya melihat semua orang.

Saya adalah anggota dari tim Jepang dan kelompok kerja, terlepas dari yang paling tua di antara para anggota, itu tidak mampu bertindak agresif, Aku pikir aku tidak pandai keluar ke public, dan tidak ada cara saya juga akan diandalkan karena datang dengan yang pemalu juga. Tetapi Kenya taannya adalah saya juga berpartisipasi dalam kamp kerja Anda ingin mengubah sedikit seperti itu sendiri. Saat Anda membuka semakin banyak

anggota, pendapat mereka aku pergi sedikit demi sedikit Anda bisa mengatakan itu.

Saya pikir saya kau tumbuh sendiri sedikit dalam kesempatan ini. Saya sering berpikir pasif untuk apa-apa sampai saaf ini, sedikit telah berubah:aku juga tidak bertindak secara sukarela.

Karena aku juga bisa bertemu orang-orang baik, bertemu di kamp ini juga. Kehangatan dari orang-orang sekitar, untuk menghargai pentingnya adalah bahwa sayadajarkan dikamp ini. Terimi kasih.

振り返ってみて今

社会学部社会福祉学科 中平 菜摘 (なっち)



<ボランティアと自分>

新しい人との出逢いは新しい自分との出逢いだ。ボランティアを通して新しい人と出逢い、自分の知らない考え方、価値観を知り、自分の糧にしていけるところにボランティアの魅力を感じている。「ボランティアで～」と言うと「すごいなー」というようなことをよく言われるが、私はボランティアをする＝すごいことなんてかけらも思っていない。私が何かをしてあげるとのことよりも反対にいつも私がたくさんのことを教えてもらっているからだ。そしてただ単純に誰かのために尽くすことが好きだから、こんな特になんの取柄も特技もない私のできる些細なことに対して「ありがとう」と言ってもらえることに対して心の底から嬉しく思うから、私はボランティアが好きだ。

<日本語班での事前準備>

私には先生になりたいという夢があった。だからインドネシアで子ども達に日本語を教えたい、という気持ちが強くあり日本語班の隊長にもさせてもらった。25期のアドバイスはもちろん、今までの報告書を読みあさり向こうでの授業風景に想像を膨らませながら授業内容を考えていった。日本語班は教材の作成を中心に準備しておくことが山のようにあった。特に頭を抱えたことは授業の内容を考えることだった。というのも25期の方に「インドネシアでは何があるかわからない。言われていた時間数よりも増えるかもしれない」と教えてもらったことをきっかけに手持ち無沙汰になるようなことは避けたい、引き出しをたくさん作ろうとなったからだ。

どのくらい日本語を知っているのか分からない相手に対して授業の中身を考えていくことは簡単なことではなかった。私は限られた時間の中でとにかく話を進めていくことに必死だった。もっとみんなの意見を取り入れるべきだったし、言いやすいやり方で話しを進めていくべきだったと今になって後悔する。私が出しゃばらなかつた方がもっと良いものができていたのではないかと考えさせられたりもする。台本作りをはじめ、とにかくやる事が多くて自分で日本語班を担当することを決めたのに途中、やらされているように感じてきて『早く終わってほしいなー』と投げやりな気持ちになった時もあった。私のことだからきっと顔にも出ていたであろう。しかし日本語班には頼りがいがある信頼できる仲間がいてくれたおかげで私は何度も自分も頑張ろう。と思いつくことができた。文句ひとつ言わずに一緒に作りあげてくれた日本語班の仲間にはありがたうの気持ちでいっぱいだ。本当に。日本語班のみんな、ほんま時間かけて準備したよなー、テスト前の教材作り大変やったんとちゃう？ 一緒に一生懸命になってくれてありがたう。本当に、ありがたう！

<バリ in インドネシア>

インドネシアでの体験は出国までの私の胸の高ぶりを裏切らなかつた。見るもの全てが新鮮だっ

た。私にとって初めての異文化体験はとても刺激的なものだった。全く知らない人でも目が合ってニコっとするとニコっと返してくれる気さくさ。湿った浜辺に空が映るくらいに綺麗な海辺。プラネタリウムを思わせるほどの星空。日本にいる大切な人達にもインドネシアを堪能してほしいと思い巡らしながら18日間を過ごした。インドネシアの街並みは必要以上の舗装はされていなかった。バスからその景色を見つめながら身体の不自由な人にとってはバリアだらけの暮らしにくい土地でどうやって生活されているのだろうと気になった。

<ホームステイ先での生活 with オシン>

ホームステイ先のイブ（母）は顔を見ただけで絶対良い人。と思わせるような優しく豪快な笑顔で少し緊張した私を出迎えてくれた。私のつたないインドネシア語を聞き取ってくれて、また私が理解できるくらいにゆっくりと話してくれた。その時は不安や戸惑いなどかけらもなかった。しかしオシンとイブが話し始めると大阪のおばちゃんのような勢いでばーっと喋り出した。私は全く理解できないのに2人は楽しそうに笑っているのですごく疎外感を持った。1人きょとんとして寂しかった。と同時にきょとんとしている自分に悔しかった。語学の習得はこの国際ワークキャンプ（以下IWC）を通しての自分の目標の一つだった。IWCの参加を決めた1年前からこつこつと単語を覚えてきた。それなのに会話が全く拾えなくて、もっとできるようになっておけばよかったと後悔した。さらにオシンがワーク後の汚れた体でダブルベッドに飛び込まれることがまず嫌だったことから始まり、私が掃除したすぐあとから髪の毛を落とすし、お菓子のカスも落とすしで『なんやねんこいつ！』でしかなかった。バイバイの時に『ありがとう、オシン！』と思える気がしなかった。

1日が経ち2日が経ち、薄々思っていた『こんなあかん！』と思う気持ちを態度に表していきこうと決めた。イブとオシンの会話に入れなこともオシンが訳してくれないせいではなく自分の語彙

力のなさ故のだから。だから“Saya tidak bisa mengerti!!”（私わからない！）と言ってバンバン会話に入っていた。指さし本を使ってやり取りして使った単語はその時覚えて、オシンに教えてもらった言葉は逐一メモした。毎晩寝る前にさらっと見返した。日本で覚えていた時とは比べものにならないくらい頭に入ってきた。イブとオシンの会話に慣れてきている自分が手に取るようになった。自分ひとりでこうなれたわけではなく手を貸してくれたオシンにはありがとうの気持ちでいっぱいだ。毎晩その日1日の出来事、感じたことをイブとパパ（父）に聞いてもらう時間は本当に有意義な時間だった。『眠たいけどもって喋るとききたいなー』と思いがらのお休みなさいだった。イブもそうだけどパパは本当に優しさの塊みたいな人だった。言うまでもなくイブとパパが大好きだ。私のイブとパパがイブとパパで良かったと心の底から本気で思える。

オシンともいろんな話をした。IWCに参加した訳、将来の夢、大切な人のいる幸せetc。オシンと語っている時こそ最も自分のつたないインドネシア語にもどかしさを感じた。次に会った時は日常会話や身振り手振りの会話以上のもっと深い話も理解できるようになりたいと強く思った。

初日は疲れたのを理由にオシンと話すことを投げ出していた。しかし向き合って知っていくうちにオシンと自分は似ているのではと思うようになった。好奇心旺盛でとにかく私の持っている物を使いたがるオシン。嬉しい時は全力でギョウとしてくるオシン。不満な時はぶすーとしてくるオシン。すごくキラキラした目で話しかけてくれるオシン。そこらの歌手よりも抜群に美しい声で歌うオシン。野良犬の前では子猫になるオシン。笑顔が全力のオシン。そして自分に素直なオシン。最初はお世辞にも気が合うとは言えなかったオシンと私。たくさんぶつかり合って嫌な思いもさせてしまった。こんな私の強い私と一緒に過ごしてくれてありがとう。やいやい言ったけど、どこまでも仲良くしてくれてありがとう。自分と似ているオシンを見て自分を見つめ直すことができた。オシンと過ごした11日間を私は忘れない。成長さ

せてくれてありがとうございます。Terima kasih, Osin.

<バニユポ村で>

どうして生まれた土地が違うだけでこんなに違うのだろう、同じ人間なのに。ただただそれだけを考えていた。自分が恵まれすぎている日本でのうのうと暮らしていることに、恥ずかしく思い腹立たしくも思い、言葉にできない思いが込み上げてきた。ワークの序盤でバニユポ村に連れて行ってもらえて良かった。

<ブリンビンサリ村で私が考えていたこと>

よく意外と言われるが私は子どもが苦手だ。遠目に眺めている分にはいいがどう一緒に接すればいいのかいまいち分からない。しかしアスラマの子ども達はそんな私をよそに全力で飛び込んで来てくれた。言うまでもなく可愛くて仕方がなかった。子ども達のために何かできることをしたいと考えていた他のメンバーと同じように私も何かしたいと考えていた。私は最初目に見える事柄ばかりに囚われていた。イブの手伝いをすること、ワークに一生懸命になることは間接的に子ども達のためになっていることだ。もちろんそれらも大切なことだ。バニユポ村に行かせてもらい子ども達は家族と離ればなれで生活しているという現状について改めて考えさせられた。1番親に甘えたい年頃の子も達は誰に甘えているのか。誰に褒められ誰に愛しているとされているのか。アスラマには兄弟同然の仲間がいて、母親代わりのイブがいる。しかしそれだけで愛情に満たされているのか。もっと直接子ども達と同じ時間を過ごして触れ合ってたくさん愛してるを伝えることが私にできることの大きな1つなのではないかと考えるようになった。

フリータイムの時に子ども達の部屋に入ってみた。甘え方が分からないのかたじたとになっている子がいた。近づきたいけど恥ずかしいというような顔をしていた。小さい声でしか名前が言えないくらいの照れ屋さん。こちらもどう接するといいのか分からない状態だった。と、その時、部屋にいた子ども達が何を思ったのか一斉に騒ぎ興奮

しだした。我先にとタンスやベッド、高い所に上った。何を叫んでいるのか解らないが声を張り上げている。少し経って1人の子が満面のドヤ顔で私の方へ来た。右手で長さ20センチ弱の超巨大なヤモリの首根っこを掴んでいた。子ども達はこのヤモリを捕まえようと必死になっていたのだ。何とも言えない一体感が生まれていた。さっきの照れ屋さんは笑いながらピタッと私の隣にくっ付いていた。少し前の困った顔はもうしていなかった。自分から近づいていった甲斐があったと思った。理由は分からないが初日から私に懐いてくれる子どもが何人かいた。単純に嬉しかった。しかしさっきの子のようになかなか自分から歩み寄ることのできない子の中にはいる。来てくれる子どもだけ可愛がるのでなくこっちから歩み寄ってできるだけたくさんの子もを可愛がってあげよう、愛していると言おう、ぎゅっと強く抱きしめてあげようと思った。しかしある程度の年齢の男の子になるとやっぱり恥ずかしがられてたくさん愛しているを伝えきれなかった。もっと早くから子ども達の中へ入って行き、1人でも多くの子どもの名前を覚えればよかった。たくさん名前を呼んであげて、もっと『大切に思ってる。心の底から愛してる。』を伝えなかった。もっとぎゅっと強く抱きしめたかった。あの子達はどんな大人になるのだろう。その素直な心を忘れない素敵の人になってほしいと思う。

<ありがとうございます>

IWC26を行うにあたっていつも陰でサポートしてくださったキリスト教センターの事務の方々と引率の先生方、美和さん、フォルマン、スイクラマさん、私達のために事前学習をしてくださった先生方、優しい心で募金してくださった方々、1番ためになるアドバイスをくれたIWC25の方々、そしてたくさんのエールをくれた友達、IWC参加を黙って一番応援してくれた家族にこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございます。本当にありがとうございます。恥ずかしながら事前研修時や夏休みの準備の段階では自分のやるべきことではいっぱいいっぱいになっ

ていた。振り返ってみて今、特に身近な人には支えられていたなーと感じる。

そして学生隊長のすっすんさん。すっすんさん自身もIWCの参加は初めてで私達と同じように分からないことだらけだったであろうと思う。隊長というポジション故のプレッシャーや葛藤もあったと思う。それでもいつも満面の笑顔で私達を引っ張ってってくれた。私もみんなをまとめる側になる時がある。客観的に自分を見つめ直してみても自分はそんな周りを引っ張っていくほどの人徳があるのかと考えさせられた。すっすんさんは同じ学生なのにすごいと思う。IWC26の学生隊長がすっすんさんで良かった。いつもいつもありがとうございます！

<IWCと自分>

早く26期の報告書を読みたいと私は思っていた。メンバーが何をどこまで考えているのかが分からなかった。子ども達のためにアスラマのイブのために何かしたい、という気持ちは皆同じだったと思う。しかしそのことについて感じたこと考えたことをシェアしきれていなかった。だから個々では頑張れていても26期としてひとつになりきれていなかったのではと思う。もちろんワークや交流会、日本食、日本語授業では力を合わせて成し遂げた。でも型から外れた部分で26期の味が出せた所があるだろうか。もちろん誰かのせいなどではない。これが26期のカラーなのだ。

1回生が1回生と思えないほどしっかりしていることをはじめ、26期のメンバーは私にない物を持っていて、私の欠けている点が長けていて、私はメンバーから学ばせてもらえたことが多くある。だからこそもっと何かできたのではと今も考え出すと果てしなく悶々とする。次のこと次のことに追われて振り返りをしなかったことが悔やまれる。そして日本語班の隊長として、C班の隊長として、2回生としてのポジションで私はIWCの中で機能していたのか。周りに私はどう映っていたのか。

私はIWCで完全燃焼したとは言えないがこれだけは言える。参加して良かったと。異文化交流、

体験を通して視野を広げることができた。パニユポ村へ行き貧困ということについて氷山の一角だけが正面から捉えることができた。まっすぐな子ども達を見て自分を見つめ直すことができた。18日間で日本では得ることのできない刺激を受けた。IWCを通して多くのことを教えられた。反対に私は何を残すことができたのだろうか。考えても考えてもこれといった答えは見つからない。ボランティアを通して私が残せたこと。今はまだ模索中だ。この貴重な体験をこれからの自分の糧にし、これからも色々なことに挑戦していきたい。自分に携わってくれた全ての人に、心からありがとうございます。

Terima kasih

Nakahira Natsumi (Nacchi)

Wark camp suda ada sejak 26 tahun yang lalu. Saya melihat masyarakat Blimbingsri senantiasa menolong saya sekalian. Terima kasih.

Ketika saya dating ke Asrama, saya merasa sangat senang karena semuwa orang menyambut saya dengan ramah. Terima kasih banyak.

Ibu membuat makanan setiap hari. Enak sekali. Meskipun saya capek, tetapi melihat ibu selalu tersenyum maka saya semangat. Terima kasih.

Saya senang bertemu dengan anda sekalian. Saya ingin tingall di Blimbingsari lebih lama. Terima kasih.

Saya senang bertemu dengan bapak dan ibu.

Meskipun saya capek, tetepi bapak dan ibu selalu senyum maka saya pulang ke rumah, saya baik. Saya mencintai bapak dan ibuk. Saya pernah demam. Ibu baik sekali. Bisa merawat saya gembira sekali. Ibu membuat pisang goreng dan pagi makan setiap hari terima kasih. Bapak membuat jalan. Saya bertemu bapak. Saya

gembira sekali. Banyak makanan yang dapat saya ucapkan dalam bahasa Indonesia. Tetapi bapak dan ibu bicara pelan-pelan. Saya bias mengerti. Terima kasih. Saya tidak lupa saya tinggal bersama bapak dan ibu dan nenek dan Wiwi dan ade dan Osin. Terima kasih banyak.

Saya senang bertemu dengan mahasiswa Indonesia.

Anda rajin sekali. Maka pintar bahasa Japan dan English. Anda menolong sekali saya. Saya gembira sekali. Terima kasih. Banyak makanan yang dapat saya ucapkan dalam bahasa Indonesia. Saya mau bicara banyak anda. Jika anda akan datang ke Japan. Saya mau bertem dengan anda. Saya melihat foto setiap hari. Saya tidak lupa, setiap hari tinggal dangan anda. Trima kasih banyak.

反省と感謝

社会学部社会学科 中村 紗希 (さきっちょ)



<申し込みまで>

このワークキャンプのことは、桃山学院大学を受験しようと思っていた頃から知っていた。しかし、1回生の時は、入学したてだったことや海外に行った経験がないこともあり、不安がいっぱいで結局申し込むことができなかった。それから1年間、サークルの先輩からワークキャンプの話や海外の話聞いて、海外のことを知ることから始めた。そして2回生になり、再びワークキャンプの申し込みの時期が来た。この時の私は、不安よりも自分の目で見て体験したいという思いがいっぱいになっていた。なぜかと聞かれたら上手く答

えられないが、海外での体験談を話してくれた先輩達がきらきらと輝いて見え、私もそんな風になりたいと思っていたからなのかもしれない。そして、私は第26回インドネシアワークキャンプの参加を決め、申し込んだ。

<事前準備>

ワークキャンプに行くまでには、週2回の事前研修と夏休みの集まりがあった。事前研修では、インドネシア語はもちろんのこと、パリの文化や現地での注意事項など、様々なことを教えていただいた。また、事前研修の回数を重ねるごとに、ワークキャンプ参加メンバーの仲がより深くなっていった。夏休みの集まりでは、主にアスラマでの交流会で発表する歌やダンスなどの練習をした。この頃には、事前研修の時よりも更に仲が良くなっていた。仲が良くなるにつれて、私は緊張感が薄れてきて、楽しさを優先したり、だらけてしまったりしてしまった。そのせいで、出発間近になってから事前準備がばたばたとしてしまう結果になった。仲の良さは、時折だらけてしまう原因になってしまう。仲が良いことは決して悪いことではなく、寧ろ良いことである。しかし、今自分がすべきことは何なのか、何をしなければならないのかをもっと考えて行動する必要がある。しかし、ワークキャンプ参加メンバーの仲の良さのおかげで、楽しい準備期間を過ごせたと思っている。

<インドネシアの学生>

インドネシアの学生には大変お世話になった。小中学校と高校での日本語の授業では、私達と生徒達の間立って、たくさん通訳をしてくれた。日本の文化を紹介する紙芝居の長いセリフも、英語で書かれたものを事前にチェックして、授業では全てインドネシア語に直して、生徒達に伝えてくれた。説明しづらいフルーツバスケットのゲームのルールも、彼らを通してスムーズに生徒達に伝えることができ、生徒達に楽しんでもらえた。他にも、アスラマで歯磨き指導の紙芝居をした時には、子ども達の興味を上手くひいて楽しませて

くれた。また、離村式でイブとパパに渡す手紙の翻訳も手伝ってくれた。彼らがいなければできなかったことは本当にたくさんあるだろう。

初対面の時には、会話が続かなかつたりしたが、たくさん時間を共に過ごしている間に自然と彼らと仲が良くなっていた。歌が上手くて、おもしろくて、陽気で、日本語をたくさん覚えようとしてくれて、通訳をしてくれて、毎日体調を心配してくれる彼らが私は大好きだ。そして本当に感謝している。

<ホームステイ>

海外に行くのが初めてだった私は、もちろんホームステイも初めての経験だったので、少し不安があった。しかし、ホームステイ先に着いた時、イブ（母）とパパ（父）は笑顔で出迎えてくれたので、安心して不安はすぐに消えた。

イブとパパは英語が少ししか出来なくて、コミュニケーションをとるのは大変だった。インドネシア語の指差し本を使っても会話がすぐに終わってしまったり、質問は出来ても答えが聞き取れなかったりして、少しずつイブとパパとの会話がなくなっていく。そうして何日か経ち、先生達とホストファミリーの面談が行われ、その日のミーティングで「ホストファミリーの中に、自分のところの学生の名前が分からない人が複数いた」と言われた。それは、私のことだった。思い出してみると、初対面の時以外にイブに名前を呼んでもらった記憶がなかった。しかし、覚えてもらってなくて当たり前だった。会話という会話はほとんどしてなくて、挨拶程度しかしていなかったからだ。その面談以降イブとパパは名前を呼んでくれたが、恐らく先生達がイブとパパに名前を教えてくれたのだろう。

挨拶程度しかしていなかったのに、イブとパパは、私達がアスラマに行く時は笑顔で見送ってくれたり、マンディに慣れてない私達に「冷たいよ～」などと声をかけてくれたりした。毎朝、紅茶と一緒に朝食も作ってくれた。他にも私達のためにたくさんのことをしてくれた。

私はもっとホストファミリーと話すべきであっ

た。ホストファミリーと話せる時間はたくさんあったのに、疲れたから寝る、眠いから寝る、というように自分のことばかり考えていた。イブとパパには負担ばかりかけてしまっていたはずだ。しかし、こんな私に対して、イブとパパは嫌な顔せずいつも笑顔で私達に接してくれて、たくさんのことをしてくれた。イブとパパには、申し訳ない思いと感謝の気持ちでいっぱいである。

<プリンピンサリ村とアスラマ>

プリンピンサリ村での生活は、朝7時にアスラマへ集合し、朝の集いをして朝食を食べて始まる。朝食後、ワークをする日は休憩をこまめに取りつつワークをした。昼食後はだいたい、1度ホームステイ先に帰ってマンディをしていた。その後、アスラマに戻ってワークをしたりした。そして夕食前にもう1度ホームステイ先に帰ってまたマンディをして、アスラマで夕食を食べ、ミーティングをして予定の変更などの連絡をし合うというような流れだった。

アスラマの子ども達は、手を広げるとすぐに抱きついてきてくれるくらいの人懐っこさだった。また、カメラが好きで、カメラを向けると色んなポーズをしてくれた。カメラを持っていたら何回も「撮って撮って」と言われ、撮り終わったら「見せて見せて」と言われた。終わったかと思うとまた「撮って撮って」と言われた。だから、私は子ども達の写真をたくさん撮った。カメラのレンズに向って作った笑顔ではなく、私に向って笑ってくれた笑顔の写真は最高に可愛かった。そしてその笑顔は私も笑顔にさせてくれて、癒しや元気を与えてくれた。しかし、私は子ども達にほとんど何もできなかった。楽しみにしていたお泊り保育も体調の関係で泊まることができなくて、子ども達のことを理解することができなかった。子ども達のインドネシア語もほとんど聞き取れなくて、日々の出来事や、楽しかったこと、嬉しかったこと、悲しかったことなどを共有できなかった。もっと一緒に過ごせる時間はあったのに、また会える、また明日も会えるといった思いが心のどこかにあり、その時その時の“今”という瞬間を大切に

に出来ていなかった。

アスラマでの生活は、振り返るとただ作業をこなすことだけしかしていなかった気がする。初めての海外で浮かれて、自分は何をしに来たのか考えて行動できていなかった。現地でも何をしに来たのか考えて行動しなさいということは、何回も耳にしていたはずなのに、全くできていなかった。そのせいで、エバリュエーションのための意見を出す時に、見たら分かるような表面上のことしか出てこなかった。この時によく「何をしに来たのか考えて行動する」ということの意味が分かった。他にも、何かするごとにそれぞれの反省をみんなで共有するということができていなかったり、連絡と報告と相談もできていなかったりした。そのため、次に何かをする時に、悪いところをずるずると引きずってしまったり、それぞれの反省が活かせなかったりした。私個人のも含めて反省点は申し訳ないくらいあった。

<最後に>

私にとってこのワークキャンプは、メンバーも大好きだったし楽しかったが反省ばかりだった。もうやり直すことはできないが、せめてこの反省を無駄にせず、これからの過ごし方に活かしていきたい。“今”は過ぎたら戻ってこないのも、その時その時に、自分は今何をすべきなのかを考えて行動していかなければならない。

また、私はたくさんの人々に感謝しなければならない。私を支えてくれた家族、友達、IWC26のメンバー、引率教職員の方々、IWCに関わってくれているの方々、バリで出会ったたくさんの方々、ありがとうございました。そして、今述べた方々を支えてくれている皆さんにも感謝いたします。このように辿っていくときがありませんが、たくさんの人への感謝の上で行動させて頂いているということをお忘れずに、これからも前に進んでいきます。皆さん本当にありがとうございました。そして、今日もありがとうございます。

18 hari yang gembira

Saki Nakamura (Saki)

Apa kabar? Saya Sakiccho. Saudara-saudara, terima kasih atas 18 hari. Menyenangkan sekali.

<homestay>

Ibu dan bapak saya setiap pagi membuatkan sarapan, mencuci sepatu, membersihkan kamar. Pisang goreng yang ibu buat sangat enak sekali. Tetapi saya tidak bisa membantu ibu dan bapak. Kalau saya pergi ke Bali lagi, saya ingin membantu ibu dan bapak. Dan saya ingin lebih banyak berbicara dengan ibu dan bapak.

<anak-anak>

Senyuman anak-anak sangat lucu. Begitu melihat senyuman anak-anak saya menjadi bersemangat. Saya ingin lebih banyak berbicara dengan anak-anak. Kalau saya pergi ke Bali lagi, saya ingin lebih banyak berbicara dengan anak-anak. saya seharusnya lebih banyak belajar bahasa indonesia, sampai waktu itu.

<mahasiswa Indonesia>

Mahasiswa indonesia menyanyikan nyanyian dengan pandai. Masih ingat “kokoronotomo” yang mereka nyanyikan. Dan mereka mudah, tiap hari mereka berkata kepada saya “apa kabar?”. Meskipun bahasa indonesia saya tidak lancar, tetapi mereka selalu menunggu sampai saya selesai bercerita. Saya senang bertemu dengan mereka.

18 hari, saya sudah mengalami banyak. Saya sudah melihat macam-macam barang. Saya sudah merasa macam-macam barang. Saya sudah belajar macam-macam barang di Bali. Syukur pergi ke Bali di Indonesia Work Camp.

Senang sekali bisa bertem dengan saudara-saudara. Saya suka Bali. Saya mau pergi ke Bali lagi. Saudara-saudara, Terima kasih banyak! Saya berharap kita bisa ketemy lagi di Bali atau Jepang. Sampai jumpa lagi.

できること・やれること・望むこと・できないこと

社会学部社会学科 美浦 純 (じゅん)



<はじめに>

ありがとうございます。いつも心から思います。被災地(陸前高田市)でもそうでした。福祉活動でもそうでした。募金活動でもそうでした。席を譲るときも、ペンを貸すときもそうでした。何かしてあげたい。「僕でも何か力になるのでは」をきっかけに1回生の時からたくさんの活動をしてきたつもりです。しかしいつもたくさんのモノをもらって家に帰ります。いつも泣いて自分の非力さに腹を立てている毎日でした。それでは前に進めない。もっと強くならなくてはならない。今度こそ私の小さな力で少しでも多くの笑顔をつくりたい。次に繋ぐことのできる活動にしたい。去年の被災地ではできなかったことをインドネシアでしたい。また泣いて終わるのでないかと恐怖心がありました。そんな迷いを捨ててこのIWCに参加することを決めました。

<出発までの感謝>

たくさんの思い出が出発までにできました。月曜、木曜日の事前研修・日本食作りの練習・結団式・募金活動・合宿・夏休みのダンス練習。毎日が新鮮で楽しかったです。先生方、キリスト教セ

ンターの人達、友人・家族、IWCを続けてくれた人達、募金をしてくれた人、たくさんのお会いにありがとうって言いたいです。知らない間に私は本当にいろいろな人に支えられて、この事前学習ができ、インドネシアに行けます。

募金活動では、私の名も顔もどんな性格かも分からないのに「がんばれ」と一言優しく募金をしてくださる人が多かったです。その一言にどれだけ勇気ももらえたでしょうか。

本当にありがとうございました。この出会い・日々を忘れません。

<邪魔な壁>

不安と楽しさの気持ちのまま、私は飛行機に乗り、着くまでにインドネシア語をひたすら覚えめました。そして無事に到着。

初めて見たインドネシアの人、正直この時は怖くて何も話せませんでした。バスに乗り、ずっと景色を見たり学生らと会話をしたり、いろんなことを考えているとホテルに到着し、インドネシアの学生との初対面です。挨拶をして、とりあえず笑顔で握手をしました。ご飯を食べながらいろいろな話をしましたが上手く言いたいことが伝わりませんでした。言葉の壁を痛感しました。そしてホストファミリーと会う時もそうでした。しかしアスラマの子ども達との初対面はこんな悔しさはありませんでした。

初めて子ども達を見たのは遊具広場でした。子ども達が真剣に遊んでいる中に日本の学生が乱入します。何を話そうか迷っている私に子ども達は笑顔で対応してくれました。子ども達の顔を見ると自然と私も笑顔になり緊張も無くなり気が付けば笑い合っていました。その時になんとなくですがわかったことがあります。言葉の壁はもちろんありましたが、それだけではありませんでした。私は相手に対して厚い壁を作っていたと思います。言葉が分からないので無意識に相手を遠ざけていました。その壁をなくした瞬間にインドネシアの学生・ホストファミリー・イブとの心の距離は無くなっていました。目で会話をしてみたいになんとか相手は何を言いたいかそ

しわかりました。もちろんもっとインドネシア語を話せたらまた違う世界が見れたでしょうが、とりあえず私が言いたいことは相手が何を言いたいのかを知ろうとする姿勢が大切で、それを知るためには相手の眼を、心を見るが一番大切だと学ばさしてもらいました。

空港で最後に見たインドネシアの人、もう怖さなんてありませんでした。

<優しい子ども達>

アスラマの子ども達はすごいです。私の知らない・感じたことの無いことをたくさん知っていていつも笑顔でした。子ども達の背景を忘れさせられてしまうほど笑顔でした。先生方に子ども達のことを聞いて驚くことばかりで、私の想像をはるかに超えていました。

その中のひとり、いつも私に元気に声を掛けてくれる男の子フィットがいました。彼は2ヶ月前にアスラマに来たらしいです。サッカーが大好きで、自分の靴を障害物にして、軟らかいサッカーボールを持ってきて八の字練習を見せてくれました。眼は真剣で無我夢中にサッカーボールを追いかけていく姿に私は覚えてたの「かっこいい」を言うのでレデレの最高の笑顔をしてくれました。私はフィットの笑顔が大好きで一番心地よかったです。ここに書ききれないほどフィットとは思い出があります。さよならをする時のフィットの声を思い出すたびに涙が出てきます。ありがとう、たくさんのお優しいさをもらえました。ただ一つ後悔があるとすれば、遊びに夢中で写真を撮るのを忘れていたことです。かなりショックです。

お泊りをした日、私は2番部屋に寝ることになりました。先にお泊りをしていた女の子の情報は毛布などがなくて寒かったと聞いていたこともあり、とても不安だらけでしたが部屋に入った瞬間にそんな不安は消えていました。2番部屋の子ども達が笑顔で私を迎えてくれました。マンディーのお手伝いは疲れましたがずっと笑っていた記憶があります。

夜になり、「歯磨きを一緒にしよ」と誘われカバンから歯磨きセットを取り出すと歯磨き粉が無

いのに私は気が付きアタフタしていると、子ども達が物置き箱らしきモノから歯磨き粉を取り私に渡してくれました。これにより私は無事に歯を磨くことができました。歯磨きを終わって子ども達に歯磨き粉を返すと受けとってくれません。私は「貸してもらっただけですごく嬉しいからもう大丈夫」と伝えたと彼らは「それあげる」と言い、笑って部屋に走りながら帰っていきました。僕は嬉しくて泣いてしまいました。ソーダ味の甘い歯磨き粉です。私が反対の立場だとすれば、子ども達のように歯磨き粉をプレゼントできたでしょうか。アスラマの子ども達は寛大過ぎます。自分の小ささがわかりました。私も子ども達のような強く優しい人間になります。

<豚さんを食べるということ>

日本で食べ物を食べる時に食べ物に対して無でした。つまり無意識に口に入れてるだけで、食べられる生物に対して何の感情もありませんでした。いつも肉を調理する時はブロック体になっていて、包丁で切るのになんのためらいもありませんでした。知らない誰かが解体をしてくれているからです。それすら日本にいたら忘れてしまっている。感じさせない。隠しているかのように。私はインドネシアで豚を切りました。

カレーライスを作る為に豚肉が必要で、用意されていた豚肉の入った黒いビニール袋を受け取りました。中には私の知っている豚肉でなく、死んでいる豚が入っていました。豚には顔・脚・皮・しっぽがあり血だらけで重たくて、私はその時身動きができずにインドネシアの学生が切るのを見ることしかできなかったし、見るのもきつかったです。

勇気を出して肉に触ってみたが一秒も触れず、手が震えて全身鳥肌が立ち汗も出てきました。日本の加工されたのとは感触が違ってザラザラしたりヌメヌメしたり硬い部位や軟らかい部位、赤い肉や青がかった肉。

切った瞬間「これが食べる側と食べられる側なんだ」と思いました。私達日本に住んでいる人達は大切なことを教わらずに食事をしている。感謝

をしないといけない。涙が止まらない。同じ地球に生まれた生き物なのに、いろんなことを忘れて食べている。やっと同じ地球に住んだ感じがしました。

ありがとうございます、名もない豚さん。私は君にもたくさん教わりました。けど、ごめんなさい。その日の晩ご飯にでたカレーライスの豚肉はどうしても食べることができませんでした。ごめんなさい。

<バニユボの笑顔>

バニユボ村へはバスで行きました。バスの座席が無くて村出身のニューマンと2人で立ち、いろいろな話をしました。バニユボ村に近づくにつれてニューマンは静かに外の景色を見ていました。私はついついカメラを向けこっそり写真を撮っていました。

バニユボ村に着き、ブドウ園の中へ入り、歩いているとバニユボ村の子ども達がありました。私は手を振り近づいていくと、子ども達は走って逃げていきました。不幸中の幸いなのか体調が悪かった私は1番後ろで歩いていました。物珍しいのか私達の後を子ども達が着いて来てくれ、私は立ち止まり手を差し出しました。しかしその手に触れてくれる子は1人もいなかったのです。カメラを向けるとピースをしてくれました。30枚くらい撮りながらなんとか話をし、やっと私の眼を見てくれました。もう1度手を差し出して待っていると男の子がゆっくり手を私に向けてくれました。その小さな手を私は優しく力強く握りました。とっても嬉しくて私は全力の笑顔をしてしまいました。すると男の子も最高の笑顔で返してくれました。なんと子ども達全員と握手ができました。どんどん仲良くなれたのか、帰り道には「なまえは？」と聞かれ、嬉しすぎて大声で「じゅん!!!」と言ってしまい子どもたちは何故か大爆笑。子ども達は「じゅん、じゅん」と歩きながら私の名前を連呼します。その姿を見て私は写真を撮り続けました。楽しい時間だ。いい笑顔だ。「私がプロカメラマンならもっといいのを撮れたのかな。この子達はこれからどうやって生きていくのかな。」と考えているとあっという間にお別れの時です。

私は最後の握手をして手を振りました。すると子ども達が、私がバスに乗る瞬間まで手を振り続けてくれます。何もできない自分がいました。とりあえず笑顔でいました。そんなことしかできなかったですし、それしかできないですし、その場でやれた私の最高のパフォーマンスです。帰りに良い写真が撮れました。私は忘れない為にその写真をFacebook・Twitter・携帯の待ち受け画面に使用しています。

<わかってスッキリしたこと>

インドネシアでたくさんの方がわかりました。まずは、私にはできないことが多い。政治家でもないです、お金も無く知恵も無く講演もできやしないです、英語力も写真も撮れないです。一人一人救うこともできないのです。しかも心配ばかり掛けている。

しかし私はバニユボ村の子ども達を知っている。バニユボ村を知っている。笑顔が最強なことも知った。彼らに一瞬でも1秒でも笑顔をつくれた。私にもできる・できたことがある。この心のときめきにやっと出会え、やっと気付いた。今は自己満足の範囲でしか行動・活動しかできないのは認めます。いつかこの子ども達をいつでも笑顔にできる人間になる。

できる・望むことをやればいい。そしてできないことも認めてやればいい。

それでいい。今は1つでいい。その気持ちを核にしてこれから生きていきます。ありがとうございます。

tertawa

Jun Miura (Jun)

pertama-tama saya ingin mengucapkan terimakasih atas semuanya. terima kasih banyak indonesia. saya tidak akan pernah melupakan kalian. apakah kalian masih ingat kepada saya? nama saya adalah jun, seperti bulan juni!!

saya mendambakan perdamaian dunia karena itu adalah impian saya.

saya sangat suka tersenyum. apakah kalian masih ingat??

saya mendapatkan banyak pelajaran di indonesia, misalnya tentang betapa pentingnya tersenyum. saya sangat suka melihat kalian semua tertawa. saya masih ingat dengan anak kepala panti di asrama. saya belajar banyak hal dari dia dan selalu tersenyum. terima kasih.

saya juga mengucapkan terimakasih banyak kepada blimbing sari. banyupo. saya bisa berkeliling dunia dengan keberanian yang saya dapatkan dari orang-orang indonesia.

saya ingin berkeliling dunia dan bertemu dengan berbagai macam orang.

saya tahu bahwa orang-orang di asrama blimbing sari saling menyayangi satu sama lain.

saya ingin membantu mereka, tetapi saya bukanlah seorang politikus, ataupun seorang jutawan. dan saya juga tidak bisa menyelamatkan seseorang seperti superman.

namun saya senang karena saya bisa membuat anak-anak di asrama tersenyum.

anak-anak di asrama blimbing sari sudah memberikan banyak tawa dan kebahagiaan kepada saya, dan saya bisa tersenyum karena hal itu.

namun saya tidak ingin berhenti sampai disini. saya ingin menyebarkan senyuman itu keseluruh dunia.

tetapi saya tidak bisa melakukannya karena saya tidak bisa mengatakan perasaan ini dengan jelas

inilah perdamaian dunia yang saya impikan.

terimakasih semuanya.

senyum dan tawa kalian adalah kekuatan bagi saya.

saya akan berusaha untuk melakukan yang terbaik agar suatu saat nanti dunia ini dapat dipenuhi dengan senyuman kalian.

sampai jumpa.

たくさんの出会い!!

社会学部 石関 真帆 (まほ)



<ワークキャンプ>

私がこの国際ボランティアに参加しようと思ったきっかけは、AO入試の事前授業で見たワークキャンプのムービーでした。参加しようと思ってからは、アルバイトで働いたお金をちょっとずつ貯めて2回生で参加するという目標に向けて頑張りました。

<事前授業&準備>

初めの頃は事前授業が自分の負担になっていました。インドネシア語の勉強は、英語よりもよっぽど難しかったです。回数を重ねるごとにIWC26が一致団結し意欲が湧いていきました。最後の授業の日には、もう終わるのか、寂しいなと思うようにもなりました。

また、夏休みには、合宿や事前準備があり、みんなで朝から夕方まで交流会で披露するソーラン節の踊りの練習や日本語授業の練習にも取り組みました。事前準備は、大変だったけどみんなで力を合わせて取り組んだ結果、たくさんの思い出が出来ました。

<インドネシアの人々>

インドネシアの人々は本当に愉快的な方々ばかりで、私たち日本人にも親切です。空港に着けば、知らない男の方々が「日本！ 味の素」と話しかけてくれました。また、車から窓の外を眺めると、軍隊の人が手を振ってくれたりもしました。

そしてインドネシアの人々は、みんないつでも笑顔です。キラキラ輝いています。日本人には持っていない素敵なものを持っていると思います。

<ホームステイ>

ホームステイ先では、たくさんの壁がありました。文化の壁、言葉の壁……最初は、どのようにコミュニケーションをとったらいいのかさえ分からず、必死にインドネシア語の指さし本を使い会話しました。私の下手なインドネシア語を必死に聞いてくれるイブ（母）。いつも美味しい朝ご飯や甘い紅茶を用意してくれるイブの娘さん達。ホストファミリーはとても親切で、優しさで満ち溢れていました。私が自己管理不足で風邪を引いた時には、私にマッサージを一生懸命してくれました。この時、私は、本当に愛を感じました。そしてイブは、私に「私はあなたのお母さんよ」と言ってくれました。すごく嬉しくて涙が出そうになりました。

また、私達の部屋のトイレを壊してしまった時には、笑顔で「大丈夫、大丈夫、気にしないで」と言いながら部屋のトイレを取り外して直してくれました。

本当にホストファミリーには、感謝でいっぱいです。またいつか会いに行きたいです。

<アスラムの子どもたち>

アスラムでは、小さい子から小学六年生までの子ども達約80人が生活しています。そしてその中の約20人は、今年からこのアスラムにやってきた子ども達です。アスラムの子ども達は、本当に可愛かったです！そして子ども達は、私よりもよっぽど自立していました。食器洗いや、広間の掃除、部屋の片付けを全て自分でしていました。びっくりしました。

そして私は、アスラムに来て3日目の夜に子ども達のお話を聞きました。アスラムの子ども達はここにいることが幸せだということ。ここの施設に来て生活したい子は大勢いると……。そして、スイクラマさんに「アスラムの子ども達の幸せの価値観は低い」のだということを知りました。子

ども達は、衣食住できることが幸せなのだ。そして子ども達は、お父さんやお母さんと一緒に生活できないことで愛を求めているのだ。私は先生のお話を聞くまでは、自分自身がこのワークキャンプを楽しんでいました。そして観光気分にもなっていました。でもこのままではいけないと気付きました。私は、この子ども達の親になることもできないし、アスラムのイブになることもできません。だからこの限られた時間の中で愛を全力で与えたいと思いました。そして毎日笑顔で子ども達と接していきたくて思いました。

私を見つけると抱き着いてくれる子、私を友達と言ってくれる子、日本語が上手な子、カメラが大好きな子、私のもまねをしてくれる子、絵が上手な子、私を恋人だと言ってくれる子、いたずらが好きな子……みんながみんな本当に良い子達ばかりでした。

毎日子ども達と接していく上で子ども達との距離もどんどん近くなっていきました。ご飯を食べる時も「こっち来て」「僕の隣来て」と私の手をひいてくれたり「アスラムに泊まりに来る時は、私の部屋に泊まって」と子ども達から積極的に接してくれるようにもなりました。

そして離村式でホストファミリーと食事を食べる時、いつも仲の良かった男の子が「こっちで食べよ」と私の手をひいてくれました。ですが、この食事は、ホストファミリーと食べることが決まっていた「ごめんね……」と謝ることしかできませんでした。その時男の子は、とても寂しそうな顔をしていました。私がこの時、きちんと一緒に食べられない理由をインドネシア語で説明できれば良かったのに……と私は、罪悪感でいっぱいになりました。男の子は、ご飯を食べ終わった後、私の隣に座りに来て手をぎゅっと握ってくれました。この時私は、明日このアスラムの子ども達とさよならするんだ。と寂しさでいっぱいになりました。もうこの子ども達の笑顔を毎日見ることができないのだと思うと涙が出そうになりました。そう……私は、この時気付きました。私も子ども達からたくさんの愛をもらったのだ。

子ども達と過ごした日々は、私の人生の中でか

けがえないものとなりました。私はいつかまたアスラマの子ども達に会いに行きたいです。また子ども達の素敵な笑顔が見たいです。

<まとめ>

日本での私の生活はたくさんの物で満ち溢れています。水道の蛇口をひねれば美味しくて安全な飲み水が出ます。お風呂では、温かいお湯が出ます。そして、家の冷蔵庫を開けると私の大好きな食べ物がいっぱい入っています。

ですがアスラマでは、飲み水は、ペットボトルに入った水だけでした。もしも水道水を飲むことがあればお腹をくだしたりA型肝炎になる可能性だってあります。また、お風呂では、鳥肌が立つくらいの冷たい水しか出ません。また、食事の時間も決まっていました。好きな時間に好きなものを食べられない。

私の日本での当たり前は、インドネシアでは通用しません。今までの自分の生活を振り返ってみるとわがままな生活ばかり……。インドネシアで過ごした素晴らしい生活を忘れない為にも、家族・友達・みんなに伝えていきたいです。

私はいつか必ずインドネシアに帰ってきます。たくさんのお会い、たくさんの思い出、ありがとうインドネシア！！

<最後に>

私はIWC26のみんなに本当に感謝しています。このメンバーでインドネシアに行くことが出来て良かった。いつもマイペースで行動が遅い私を受け入れてくれてありがとう。みんな大好きです。IWC26のメンバーの一員になれて私は嬉しいです。

このインドネシアで経験したことは、これからの人生の糧になると思います。今も目を閉じれば浮かんでくるインドネシアの人々の笑顔。素敵な時間をありがとう。

Terima kasih

Maho Ishizeki (Maho)

saya sangat senang bisa berpartisipasi dan menjadi relawan dalam camp kerja ini. saya menghabiskan 18 hari di Indonesia, ini menjadi hal yang sangat penting dalam hidup saya. Kepada Mahasiswa Indonesia saya ucapkan terima kasih. keberhasilan camp kerja ini tentunya berkat dukungan kalian semua. Terima kasih karena kalian mau mendengarkan saya meskipun bahasa inggris saya kurang. Terima kasih atas terjemahan yang diberikan ketika kita mengajar ke sekolah. terima kasih karena sudah memberitahu saya banyak hal. saya tidak pernah melupakan kalian berenam. Kita selalu berteman meskipun kita berpisah. Saya tidak sabar untuk bertemu kalian lagi. Saya senang bisa bertemu kalian. Terima kasih semua terutama untuk keluarga yang boleh menerima saya. Meskipun kita hanya tinggal dalam waktu yang singkat namun itu sangat menyenangkan. Terima kasih telah memberikan saya obat ketika saya flu. Terima kasih untuk nasi yang enak. Terima kasih untuk teh yang enak. Terima kasih sudah memperbaiki toilet. Saya sangat ingin bertemu suatu hari nanti. Saya juga mengirim surat dan foto. Saya sangat senang bisa bertemu dengan anak-anak asrama. Anak-anak asrama sangat lucu. Selalu tersenyum. Terima kasih karena memegang tangan saya sepanjang hari. Terima kasih sudah memberitahu temannya, kekasih kepada saya. Terima kasih untuk gambarannya yang bagus. Terima kasih atas boneka sapi. Terima kasih atas surat anda. Terima kasih Pierce, Ini adalah kenangan terindah saya. Aku tidak akan pernah melupakan kalian. Kita akan bertemu lagi suatu hari nanti. Saya ingin pergi ke Indonesia untuk mengunjungi kalian. Sampai

nanti selamat tinggal. Saya suka semuanya.
Terima kasih

インドネシアでのとても充実した日々

社会学部社会福祉学科 花澤 広介（こーすけ）



<初めに>

私がインドネシアワークキャンプに参加した理由は、海外に興味があったからである。テレビで海外のことについての番組を度々見ていた「世界がもし百人の村だったら」という番組が印象的で、それは東南アジアの貧困の国に芸能人が行ってそこで暮らしている人達と会い、どのような思いで、そこで生活しているのかを聞き、感想を述べるという番組だった。それを見て私はテレビを通して知るのではなく、実際に現地に行って自分の目で見て、感じる事が大切だと思った。それで私はこのインドネシアワークキャンプに参加して、実際に自分の目で見て知り、いろんなことを感じたいと思い参加した。

<ワークキャンプ事前研修と事前準備>

事前研修とは月曜日と木曜日の5限に集会室で行う、インドネシアのことについて知るための研修だ。月曜日はインドネシア語を学び、木曜日はインドネシアの地理、歴史、政治などを学んだ。事前研修でインドネシアのことについて学べる事ができ、とても良かった。事前準備では日本のワークキャンプメンバーがインドネシアの子ども達に日本語を教えるため教材を作ったり、子ども達とコミュニケーションを取るためダンスの練習などをするために昼休みや夏休みに集会室に集まって準備をした。正直に言うと私は、初め事前準備

に参加するのは嫌だった。なぜなら、参加しても日本のワークキャンプメンバーに話す知り合いがあまりいなく気まずかったからだ。しかし、何回か参加するうちに日本のワークキャンプメンバー全員と仲良くなり、楽しいと思うようになっていった。もし、事前準備がなかったらメンバー全員仲良くならなかったらと思う。

<インドネシアの学生>

インドネシアの学生と会うまで、私はこれからの2週間半も共に暮らし活動していけるのか不安だった。しかし、実際に会ってみると、インドネシアの学生はとてもフレンドリーですぐに友達になった。インドネシアの学生は英語ができ私たちが日本語授業などで使う英文の説明文をすぐにインドネシア語に訳してくれ、とても助けてくれた。また、インドネシアの学生は勉強熱心で、バスで移動するときなど暇があれば日本語を教えると言われ、日本の学生が日本語を教えればインドネシアの学生はすぐに教えた日本語を使うようになる。インドネシアの学生の勉強意欲はとてもすごいなと思い、私もインドネシアの学生を見習いインドネシア語を教えてもらうようにした。インドネシアワークキャンプではインドネシアの学生にたくさん助けてもらったのでとても感謝している。インドネシアの学生は来年、再来年に日本に来ると言っていたので、逢える日を楽しみにしている。

<プリンピンサリ村>

プリンピンサリ村はキリスト教徒の村で私達を通ったアスラマやホームステイした場所である。プリンピンサリ村に着いたとき私は驚かされた。プリンピンサリ村に着く前までは、小さい家が建ち並んでいると思っていたが大きい家が建ち並んでいたからだ。また、子ども達が普通にバイクに乗って運転しているのにも驚かされ、文化の違いなんだなと思った。プリンピンサリ村から見る星空はとても綺麗だった。朝4時半に起きて、外に出て、夜空を見上げると満点の星空が見えた。それは日本では考えられないほど空が透きと

おっいて星が鮮明に見えるからだ。プリンビンサリ村の人達はとても優しい人達だった。それは一度も会ったことがない私達に笑顔で挨拶してくれて、ワークの作業が終わって疲れてホームステイ先に帰る時など「大丈夫？」と心配してくれたりしたからだ。プリンビンサリ村で人の温かさを実感した。

<ホームステイ>

私はオーストラリアでホームステイの経験があったのであまり怖くなかった。しかし、いざホームステイ先の家に着くと、とても緊張し怖くなった。なぜなら、言葉が全く通じないからだ。英語は少しだったら使えるがインドネシア語は挨拶ぐらいしかできない。ホームステイ先の家に入るとイブ（母）とイブの子どもが歓迎してくれた。はじめに緊張しながらも、つたないインドネシア語で自己紹介をしたら、イブにインドネシア語が上手だと褒められた。その時緊張がほぐれた。次にパパ（父）に挨拶をしてからイブに私達が寝る部屋に案内された。部屋を見たとき驚いた。なぜなら、部屋にはクーラーが付いていて、水洗トイレ、シャワーがあり部屋が思った以上に広がったからだ。部屋に入った瞬間設備の良さにペアの純とハイタッチをした。その日の夜日本から持ってきたお土産を家族に渡したらとても喜んでくれ、ジェスチャーやインドネシア語の指差し本を使いながら日本の文化などいろいろ話をし、とても楽しかった。私達が疲れて帰ってきたら、毎日のように「身体は大丈夫？」「薬はある？」など言って心配してくれた。私はそれが嬉しく、とても優しい家族だと思った。ホームステイ先では1週間半過ごして家族に優しくされ、とても感謝している。

<ワーク>

今回のワーク内容は、一般道からアスラマに入る坂道を舗装し、坂道の隣のごみなどが無造作に捨てられている場所を畑にするというものだった。坂道を舗装することを去年参加したIWC25期生が提案し、今年それが実現することになった。ワークはとても本格的でコンクリートを作る

ミキサーにセメントや土や砂利や水を入れてかき混ぜ、コンクリートをバケツに入れ、バケツリレーをして凸凹の坂道にコンクリートを流し、コンクリートを平にして乾かしていく作業を繰り返し、完成させた。坂道のごみなどが無造作に捨てられている場所を畑にする作業は、まずごみを1ヶ所に集めて、土を耕して、畑を作る作業だった。特に疲れたのがセメントや砂や砂利をミキサーに入れることである。なぜなら、たくさんのセメントや砂や砂利をミキサーにいれなければならず、肩や腰が痛くなったからだ。ワーク中は4グループに分かれて作業をした。4グループ中2グループが坂道の舗装をして、1グループは畑作業、もう1グループは休憩をとることを決め、それを15分間ずつやりローテーションしていくようにした。そうすることで効率よく作業ができた。坂道の舗装と畑の作業が完了したとき、とても感動した。ワーク1日目、1週間半で完成するのか不安だったが、皆の力を合わせたら完成することができたからだ。皆の力を合わせてやる作業はこれからの人生であまりないと思うので良い体験ができたと思った。

<アスラマの子ども達>

アスラマの子ども達はとても明るく元気だった。私はふと疑問に思った。アスラマの子ども達は貧困や虐待などの理由で親と一緒に生活できない子ども達で、寂しいのにも関わらず、なぜ子ども達は明るく元気でいられるのだろうか。私達はアスラマに来ている子ども達何人かの出身の村「パニユポ村」に行った。パニユポ村は地主に土地を借りてブドウを栽培している村だ。しかし、雨があまり降らないのでブドウがたくさん収穫できない。そのため、収入があまり無い。そんな中、家族10人ぐらいで住むのはとても難しく、パニユポ村の子ども達は学校に行くことができずにいる。しかしアスラマにいけば食事が朝、昼、晩食べることができ、学校に行って勉強もできる。なぜアスラマの子ども達が明るく元気なのか、それはきっと毎日不自由なく暮らすことができ、将来に希望を抱いて生活していけるからなのではない

かと思った。私はアスラマの子ども達と一晩一緒に寝る（児童養護施設で泊まる）ことができた。子ども達と一緒に寝ることで子ども達の1日が実際に知ることができ、子ども達とたくさんコミュニケーションを取ることができた。特に良い経験ができたのは子ども達と一緒に入ったマンディである。子ども達は初め一緒に入るのを嫌がっていたが、だんだんと一緒に入ってくれる子ども達がいるようになりとてもうれしかった。アスラマの子ども達は夢に向かって生活していると思うので、諦めずに頑張ってください。

<最後に>

国際ワークキャンプに参加して、とても良い経験ができた。それは実際にインドネシアに来て、生活し、インドネシアの人達はどのような人達なのか知ることができたからだ。インドネシアの気候は日本と違って日差しが強いが、からっとして涼しい。時間が流れるのが遅く感じゆっくりした生活が送れた。インドネシアの人達はみんな優しく親切だったので、人の温かさを知った。この18日間とても充実した日々を過ごせた。充実した日々を過ごせたのはアスラマの子ども達、ホームステイ先の家族、プリンビンサリ村の人たち、インドネシアの学生、ワークキャンプに携わったみんなのおかげだと思っている。みんなにとっても感謝している。これからはたくさんの学生達にワークキャンプのことを伝えて、たくさんの学生達にインドネシアの体験をして欲しいと思っている。これからの学生生活はいろいろなボランティア、海外ボランティアなどに参加して、たくさんの人と出会い、私の視野を広げていきたいと思う。

Terima kasih banyak

Kosuke Hanazawa (Kosuke)

Saya mengalami banyak hal untuk berpartisipasi dalam kamp ini. Aku pergi ke Mandy begitu dingin, melihat berbintang sangat indah tanda

langit penuh, bisa merasakan tidak bisa dialami di Jepang. Selain itu, saya telah membuka bukit bekerja sama dengan semua orang, membuat lapangan, bisa merasakan pekerjaan menantang. Saya menghabiskan hari-hari penuh berkat bagi semua orang, sangat berterima kasih.

Saya ingin mengucapkan ucapan terima kasih kepada semua orang.

Homestay keluarga. Saya mempersiapkan air setiap hari, bisa tetap binatu, terima kasih. Silakan hidup selaras dengan setiap keluarga di masa depan.

Asurama anak, untuk Hawa kami. Terima kasih untuk berbicara dengan saya dan bermain anak-anak selalu sehat. Good luck belajar. Terima kasih untuk selalu membuat Hawa beras lezat kami. Silakan membuat nasi lezat untuk anak-anak di masa depan.

Untuk orang-orang dari desa Burinbinsari. Saya baik kepada saya dari saat saya pertama kali bertemu, terima kasih. Anda, berhati-hati.

Indonesia kepada siswa. Selalu dapat membantu saya, memberitahu saya banyak Indonesia, terima kasih. Good luck di masa depan saya belajar bahasa Jepang. Saya berharap untuk datang ke Jepang.

Kami sangat berterima kasih kepada semua orang yang terlibat di kamp kerja di akhir.

経験という名の宝物

社会学部社会学科 本村 竜汰（りゅうた）



このレポートを書くにあたり、まずこの企画に携わって下さった引率教職員の先生方、現地で支えてくださったウィディア・アシ財団の方々をはじめIWCを支え、協働して下さったすべての人々に感謝いたします。

<きっかけ>

私がIWCへの参加を決意したのは、大学へ入学し、大学生活に慣れ始める中で自分の目標を模索している時である。

私は高校時代全寮生の部活動に所属していた。大学に入学し、良い意味でも悪い意味でも自由の生活の中で、全員が同じ目標に向かっていく生活をしてきた高校生活とのギャップを強く感じ、自分が目標を持って行動できる事を探していた。そんな時にIWCの企画を知り、説明会へと足を運んだ。自分達の経験を語り、成果をまとめたDVDを見る際、涙ぐまれるIWC25期生の姿は、充実感に溢れており、自分達のやったことに対する誇りが感じられた。

その姿を見て今の自分には、「これしかない、参加しなければ後悔してしまう」と思いIWCへの参加を決意した。

<事前研修>

目標を持ち参加したIWCであったが、徐々に大学生活に慣れ始め、アルバイトなどで忙しく生活していく中で、週2回の事前学習に対して面倒さを感じてしまう時もあった。夏休みに入ってから事前準備も、平日毎日集合というハードスケジュールであったが、効率的に進められたかとい

うと、そうではなかった。どこか友人同士の集まりのようになってしまっていた。IWC26の最も反省すべき点として、組織として動けなかったという点があげられる。事前研修の段階で一人ひとりが緊張感を持っていなかったことが、現地での組織力の無さにつながってしまった。もっと意見をぶつけ合う必要があったと思う。

このように、反省の多い事前研修であったが、事前研修の中でやって良かったと思えることもあった。

それは募金活動中での出来事である。私は正直なところ、人通りの最も多い昼休憩時に大きな声で行う募金活動に対し、恥ずかしさを感じていた。

その気持ちを大きく変える人との出会いがあった。その方は身体が不自由な方で車椅子に乗っておられ、自らの移動で大変であるにも関わらず、人ごみの中、募金をしてくださった。もし自分があの人なら同じことができただろうか？自分の事で精一杯の中、人のために募金することはできたろうか？そう考えさせられた。何不自由なく、健康である身体であるにも関わらず、募金活動で大声を出すことに対して恥ずかしさを感じていた自分が恥ずかしく感じた。あの方の姿に本当の意味での助け合いの心、心の美しさを学ぶことができ、自分がこのIWCに参加した目標を改めて認識させられた。

<現地での作業を通じて>

今回IWC26では、施設へ向かう道約95mの舗装と子ども達のための作物用の畑を作る作業を行った。

施設へ向かう道はでこぼこであり、毎日子ども達が通学する際危険であった為、前回のIWCでのエバリエーションで提案され、それが今回の課題となった。また、畑は作業開始時畑とはいえないような状態の空き地であり、石やゴミを取り除き、水路を確保して作りあげた。私達にとって、農作業の経験はほぼ無く、ましてや道を作る作業など、初めての経験であったので当初は慣れるまでに時間がかかってしまった。

作業行程は、コンクリートを機械で作り、道に流し込むという単純な作業であったが、石を運び、砂を混ぜ、泥だらけになりながらの作業は重労働でありとても疲れた。しかし、ここで現地の人と共に汗を流したことで距離が近づき、言葉の壁を超えることができた。お互いに言葉が通じなくても、ジェスチャーなどで伝わり合った時の感動は忘れられない。泥だらけになった服を寝る前に洗う作業がワークに匹敵する重労働であったのは、今となっては良い思い出である。日本では当たり前に使っていた洗濯機のありがたみを感じた。私はホームステイ先に洗濯機があり3日目以降は洗濯機にお世話になった。イブ（母）とパパ（父）に感謝である。

今回のワークは全体的に何とかグダグダになることなく、完成することができたと思う。しかし、反省点も多々あった。私はやる気と体力には自信があったので、ワーク班の班長として全体を指示した。作業分担に関しては、7度目の引率の三宅先生のお力添えもありスムーズに分担することができた。しかし、全体として間違った雰囲気が出てしまった。頑張らないといけないという気持ちが先行し、競争心のようなものになり、休憩を含めてワークということを忘れていた。休む事に引け目を感じ体調不良者が無理をし、更に悪化するという悪循環が生まれてしまった。引率してくださった美和さんの忠告を、全員が聞き入れるべきであったし、互いに体調をチェックし合うべきであったと反省している。このような雰囲気が出てしまったのは、ワークリーダーである自分に責任があったと反省している。この件で人の上に立って指示するという事は、単に作業分担や、休憩指示だけではなく、全体を把握しコントロールしなければならないと学ばされた。

自分達は協働をしにインドネシアに来たのに、単に道を作る、畑を作るという作業になってしまっていた。先生方の指摘が無ければ本来の協働の意味を見失ったままワークを終えてしまっていた。自分達の未熟さを思い知らされた。

しかし、最終的には協働し、道も畑も無事完成することができた。今回ワークリーダーを経験で

きたということは、自分にとって貴重な経験であり、成長することができた。

ワークと一言にいても、上記のように道や畑を作り身体を動かすことだけがワークではない。日本食を作り、現地のの人に食べてもらうこともワークの1つであった。私はワーク班と日本食班を担当していた。今回の日本食パーティーは、例年通りのカレー作りに加え今年は初めてバケツプリンに挑戦した。

カレーに関しては、毎年現地の人と私達の味覚の違いによる辛さの感覚の違いが大きな課題であった。現地の食事は香辛料などを多く使用しており、日本より辛さが強い。私も現地の唐辛子を食べたが辛過ぎて涙が止まらず、今まで食べた物の中で最も辛かったといっても過言ではない程辛かった。そのため今回はカレー対策を事前段階から準備し、日本から香辛料を持参し、現地の香辛料も使用した。その結果辛いと言わせたのは大きな成果であった。もちろん、日本人にとって辛過ぎたのは言うまでもないが、現地の人々に美味しく食べてもらったことはとても良かった。

バケツプリンにはIWCで初めて挑戦した。毎年様々な提案がなされるが、現地の環境は日本とは異なり、条件に合わず却下されてしまっており、今回も当初提案していた団子が却下されていた。そんな中で石関さんの提案したバケツプリンが条件に合い、現地で作ることとなった。現地の人々は甘い物が大好物であり、バケツプリンは粉と水とお湯があればできるという手軽さにより実現した。

日本食パーティーとは日程をずらしてプリンを出した。プリンは大好評であり、施設のイブ達が踊り出す程であり、日本食班は成功に終わった。何よりもイブ達の笑顔を見ることができたことが嬉しかった。

日本食班はワークと兼任しており、ワークでの反省点から、協働することの意味を考えさせられた。ワークでの経験を日本食に生かしたことが、今回の成功につながった。

日本食班全員がワークでの反省を踏まえ、自分達なりに成功につなげることができた。もちろん

完璧であった訳では無く、引率の女性教職員の方々の知恵を何度もお借りした。私はワーク、日本食班で班長を経験させてもらったことで、成長することができた。共に準備から協力しあった班員の人々に感謝したい。

<まとめ>

私はIWCに参加して本当に良かったと感じる。しかし、今まで述べてきたように反省することだらけであった。IWC26期が現地で協働することができたかと言えば、そうではない部分がほとんどであった。自分が班長としての責任を果たせたのか。ワークリーダーとしてまとめることができたのか。個人的に反省しなければならない点も多々ある。しかし、これらは全てIWCに参加しなければ、気付くことはできなかった。

引率教職員の方々、IWCの仲間達、インドネシアの学生、現地の人々、全ての人々との出会いが自分を成長させてくれた。

インドネシアは本当に良い国であった。空気がとてもゆったりとしていた。インドネシアの人々は助け合いながら生活しており、道であった村人はみな挨拶してくれた。このような人々のやさしさがこの国の雰囲気を作っているのだと思う。日本は様々なことに時間を追われ忙しさにとらわれ助け合いの精神が薄くなっていると感じた。

異国の地から来て、インドネシア語も十分に話すことのできない自分を「インドネシアでは私が母だから」と迎え入れてくれたイブ、ババ、笑顔で挨拶してくれる村の人々、そして、何よりも子ども達の笑顔が自分達を支えてくれた。ボランティアといっても周りから教わることだらけであった。自分にとってこの18日間の経験はかけがえない宝物である。

Terimakasih

Ryuta Honmura (Ryuta)

Selamat sore ! Nama saya Honmura Ryuta.

Pertama tama, saya ingin mengucapkan terima kasih kepada orang-orang yang telah bekerja sama di Indonesia. Terima kasih untuk hari yang telah terlewati.

Saya telah belajar banyak di Indonesia khususnya di Bali. Saya terkejut ketika saya pergi ke desa Banyuwangi . Dimana saya melihat orang miskin yang tinggal di lingkungan yang tidak diada di Jepang. Karena saya tinggal di Jepang, sebagai orang Jepang itu mengejutkan. Jepang sangat sibuk, tapi nyaman. Indonesia tidak nyaman.

Di Indonesia ada sesuatu yang penting bahwa Jepang telah lupa.

Di Jepang ada banyak orang yang bunuh diri. Hampir 300000 orang melakukan bunuh diri setiap hari membuat Jepang tidak nyaman, itu telah menjadi beban dalam pikiran. Kami membantu Indonesia karena ada orang-orang miskin.. Anda harus ingat, Jepang.

Bahwa orang-orang saling membantu dalam hidup. Saya benar-benar belajar banyak, saya yakin mereka semua sangat membutuhkan bantuan. Saya sangat senang dapat berpartisipasi dalam IWC.

Senyum anak-anak, kebaikan orang-orang tidak pernah saya lupa. Saya memberitahu orang Jepang tentang apa yang saya pelajari di Indonesia. Saya ingin memanfaatkannya untuk masa depan saya. Sampai hari saya akan bertemu lagi. Selamat tinggal!

Saya ingin mengucapkan terima kasih kepada rakyat Indonesia. Semoga Tuhan memberkati Indonesia.

Syukur ～すべてに感謝～

社会学部社会学科 入宮 由季（ゆき）



<きっかけ、挑戦への一歩>

私は大学の4年間で、色々な所に行き、様々なことに挑戦して、必ず大学生活を充実させたい、絶対に無駄にしたくないと思っていました。入学前に大学のパンフレットを見ていて、この国際ワークキャンプのことについて知りました。その時、私は絶対にこのプログラムに参加すると決めました。しかし、筆記試験と・面接のときは、「来年にまた挑戦しよう」と思うぐらいボロボロでした。そのため、参加させてもらえると分かった時は、すごく嬉しかったのと、頑張ろう！ という気持ちになったのを覚えています。

<家族のような仲間>

～日本の学生～

5月に入り懇親会があり、今回一緒に活動する18人が初めて集まりました。それからは事前研修が始まり、週に2回インドネシア語、インドネシアの文化や歴史などについて先生方から教わり、2ヶ月以上みんなと一緒に勉強してきました。昼休みにも、キリスト教センターで集まってミーティングを行い、夏休みに入ってからほぼ毎日集まって、日本語授業と交流会の台本作りや、歌・ダンスの練習をしていました。子ども達に歯ブラシを贈るための募金活動も行いました。

このワークキャンプは、現地だけで活動するのではなく、現地で行う日本語授業や交流会の内容を、日本にいる時から事前に1から全て私達で考えていきます。なので、みんなで意見を出し合い、時にはぶつかることもあったけれど、少しずつ少しずつと内容が決まってく中で、ひとりひとり

の責任感とチームワークがうまれる、すごく魅力的なプログラムだと私は思いました。また、こうしてお互いに協力していくうちに、皆は私にとってとても大きな存在になっていました。

～インドネシアの学生～

私たちはバリに到着すると、ホテルに向かいました。そこでアデ、ユスフ、イッサ、ベティ、オシン、ノフェリンの6人のインドネシアの学生と出会いました。私は、この6人がいなかったら、今回のプログラムで成し遂げられないことが本当にたくさんあったと思います。

事前に英語で作っていた日本語授業の台本と私達のつたない英語の説明を、一生懸命理解しようとしてくれて、少ないとはいえない量の台本を、大変にも関わらず嫌な顔ひとつせずにインドネシア語に翻訳してくれました。そのおかげで、日本語授業の当日は、授業内容がスムーズに進み、子ども達にも楽しんで日本語を学んでもらえたと思います。

アスラマで衛生指導を行うために作った歯磨きの紙芝居も、インドネシア語に翻訳してくれました。そして、当日は子ども達が引き寄せられるような読み方をしてくれて大成功でした。

インドネシアの学生は、いつも楽しそうに歌を歌っていたりして、一緒にいるとすごく楽しい気分になりました。しかし、私は英語もインドネシア語もうまく話すことができませんでした。聞きたいことや伝えたいことがたくさんたくさんあったのに、言葉にすることができない自分にすごく腹が立ち、悔しくなりました。それでもみんなは、私ができるようにゆっくりと話してくれて、インドネシア語の本と一緒に見ながら話してくれました。また、覚えた日本語のジョークを使って私達をいつも笑わせてくれました。私はそんなみんなが本当に大好きです。インドネシアの学生と17日間一緒にいて、たくさんの優しさを感じました。言葉では表せないぐらい、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。“Terima kasih”（ありがとう）

<笑顔がいっぱいのアスラマ>

プリンビンサリ村へ向かう当日、今まで日本の生活で普通にできていたことができなくなるといふ文化の違いや、言葉が通じるのか、などについて「本当に自分はやっていけるのだろうか」という不安が少しありました。しかし、プリンビンサリ村に到着すると、そんな不安を一瞬で吹き飛ばすかのような笑顔で、子ども達は楽器を演奏しながらアスラマへと案内してくれました。そこには、元気すぎる子ども達がたくさんいました。子ども達は“Nama Anda siapa?”(あなたの名前はなんですか?)と聞いてくれて、すぐに懐いてくれました。アスラマに行く子ども達が「ゆきー、おはよう!」と名前を覚えて呼んでくれるのがすごく嬉しくて、私も子ども達の名前をできるだけ多く覚えようと思い、名前と特徴をメモしていました。子ども達と一緒にいられる時は、これでもかというぐらい全力で遊び、一緒に歌をうたい、折り紙やお絵かきをして楽しみました。

アスラマにいる子ども達の笑顔は本当に魔法でした。私達はワークで、施設入口のコンクリート舗装と畑を耕したのですが、どれだけ疲れていても、アスラマに戻り、子ども達のニコニコな笑顔を見ると疲れなど一瞬でなくなりました。親と一緒にいたいと思う年頃なのに一緒に暮らせないという複雑な背景があるにも関わらず、それを感じさせない本当に眩しすぎる笑顔でした。10日間もアスラマにいると感じることや考えさせられることがたくさんありました。私は感情を抑えることができずに泣いてしまいました。そんな私をみて「泣いているの?泣かないで」と抱きしめてくれる子どもがいました。私はアスラマに来て、子ども達から、たくさんの笑顔と優しさ、愛、希望をもらいました。イブ(女性スタッフ)は、子ども達のご飯の準備だけでも大変なのに、朝・昼・晩と私達の分のご飯まで用意してくれました。逆に、アスラマにいる間、私は何ができたのか、何をしてあげられたのかと考えると、もっとできることがあったはずだと後悔ばかりです。それでも、1人でも多くの子ども達が私達のことを少しでも覚えてくれていたら、それだけで嬉しいです。

私は、アスラマにいるみんなと出会えて本当に幸せです。皆が元気に成長できることを心から願っています。

<私の大好きなホストファミリー>

ホームステイ先が発表され、家へ向かう途中、ホームステイが初めてということもあり、不安もありましたが、どんなイブ(母)とパパ(父)だろうとワクワクする気持ちもありました。家に到着すると、笑顔で迎えてくれて心がほっとしたのを覚えています。イブは毎日朝食を作ってくれました。イブのピサングレンはすごく美味しくて、どこのピサングレンよりも美味しかったです。家を出る時はいつも笑顔で「行ってらっしゃい」と手を振ってくれて、帰ってきた時も笑顔で迎えてくれました。イブとパパとは、インドネシア語の本を片手に話をしていました。一緒にいると本当の家族のように落ち着きました。きっとホームシックにならなかったのは、イブとパパのおかげです。ワークでドロドロになっていた私の靴が次の日ピカピカになっていて、イブの優しさを痛感しました。お別れの日になり、泣いている私を力いっぱい抱きしめてくれたことを忘れません。イブとパパは最後まで笑顔でした。

プリンビンサリ村は笑顔がいっぱいの村です。ご近所さん、すれ違う人、バイクに乗っている人までもが笑顔で挨拶をしてくれます。私はこの温かい村が本当に大好きになりました。

<感謝の気持ち>

このワークキャンプの18日間は、私にとって本当にかけがえのないものとなりました。「参加してよかった」と胸を張って言えます。毎日毎日が濃い1日で、日本では経験できないことが、たくさんできました。出会いと別れがたくさんあった18日間ですが、そのたびに色々なことを考え、たくさんのことを学び、経験することができました。また、協働するすばらしさを実感しました。私は、実際にインドネシアで異文化を経験して、「これで終わるのではなくて、もっとたくさん国に行き、本当の現状を自分の目で見たい。人の役に立

ちたい」と、さらに思うようになりました。このワークキャンプは確実に私にとって次に進むステップとなりました。

今回このワークキャンプに参加して、出会った人達、関わってくれた人達、協力してくれた人達に心から感謝の気持ちを伝えたいです。私達をずっと支えてくださった、引率教職員の先生方、キリスト教センターの方々、また募金活動に協力してくださった方々、本当にありがとうございました。そして私がこのワークキャンプに参加したいと言った時に、少しも反対せず「頑張っておいで」と背中を押してくれた家族、「気を付けてね」と見送ってくれた友達、ありがとう。最後はどんな時もお互いに協力してきたIWC26のみんな。いつのまにか仲間を越えて、家族のような存在になっていました。楽しい時も、うれしい時も、辛い時も、みんなと共に過ごした時間は絶対に忘れません。本当にありがとうございました。

私はまた必ずバりに帰ります。このワークキャンプは私にそう思わせてくれる、素晴らしいプログラムでした。そして、これを機にもっとたくさんの方に挑戦していきます。

最後に……、この報告書を読んで、少しでも興味を持ったり、行ってみたいという気持ちがあるのなら、是非参加してもらいたいです。絶対に良い経験になります。

Terima kasih banyak. Saya cinta IWC26

Yuki Irimiya (Yuki)

Terimakasih banyak untuk camp jepang yang telah berlangsung selama 18 hari. kamp kerja ini merupakan sebuah pengalaman yang baik bagi saya, ada pertemuan dan perpisahan yang saya alami selama 18 hari. Namun saya berpikir bahwa banyak pelajaran dan pengalaman yang saya dapatkan, saya

belajar tentang pentingnya sebuah kerjasama.

Saya ingin menyampaikan rasa terimakasih saya.

Terutama untuk bapak sikuram, bapak Horuman dan ibu Miwa ishii karena kalian selalu memberi dukungan kepada kami. Berkat kalian kami mampu menyelesaikan kamp kerja dengan baik.

Terima kasih banyak.

Dan terimakasih untuk enam mahasiswa Indonesia, saya sangat senang karena kalian selalu ramah dan tersenyum. Sebenarnya saya ingin lebih banyak berbicara dengan kalian, Tetapi maaf saya tidak bisa berbicara dengan bahasa Indonesia dan bahasa Inggris dengan baik. Kalian selalu membantu kami, berkat kalian kelas jepang dan pertunjukan cerita gambar dapat berlangsung dengan baik dan sukses. Saya sangat senang dapat bertemu dengan kalian, saya tidak akan melupakan kalian. Saya harap bertemu lagi dilain waktu.

Kemudian untuk bapak dan ibu saya di desa belimbingsari. Saya sangat senang karena kalian menerima saya dengan cinta dan kasih sayang. Ibu membuatkan saya sarapan setiap pagi, ibu membuatkan pisang goreng, ibu dan bapak sangat baik, saya ingin berjumpa lagi dengan ibu dan bapak, saya mencintai kalian.

dan untuk ibu serta seluruh anak-anak di Panti Asuhan Widhya Asih, ada banyak senyuman di asrama, terutama senyuman anak-anak. Mereka memberiku senyum, harapan, cinta dan kebaikan, apa yang bisa saya lakukan untuk membalas itu semua? saya tidak tahu, namun saya senang dan bersyukur dapat bertemu dengan ibu dan anak-anak. Saya harap anak-anak dapat bertumbuh dengan baik dan sehat. Saya tidak akan melupakan kamp kerja. Saya ingin mencoba hal yang baik di masa depan.

IWC26 adalah keluarga saya. Saya cinta IWC26. Saya cinta bali. Saya ingin segera pergi ke bali

lagi.

Terima kasih banyak.

アスラマの子ども達

社会学部社会福祉学科 山口 明理 (あーちゃん)



<はじめに>

今回のプログラムを行うに当たり、桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト協会、ウィディア・アシ財団、アスラマのスタッフ、プリンピンサリ村のホームステイ先の人々、事前研修でインドネシア語やインドネシアの歴史や文化を教えてくださいました先生方、現地で見守ってくださった引率の先生方、アドバイスやしおりの作成を手伝ってくださった25期の方々、募金に協力してくださったの方々、国際ワークキャンプを支えてくださった全ての方々に心から感謝します。

<アスラマの子ども達>

私達が訪れたアスラマは、経済的な理由など、様々な事情により親と一緒に暮らすことができない子ども達が約80人集まり生活していた。アスラマの子ども達の生活は、食事が終わると食器を流しに持っていき、自分達で洗う。食事をした場所の掃除をする。自分達の仕事は全て自分ですという習慣が身に付いていた。また、私達がワークをしていると手伝いに来てくれた。一緒にバケツリレーをしたり、畑のゴミを拾ったりきつい作業を頑張ってくれた。私は子ども達が自主的に手伝いに来てくれたことが嬉しかった。

子ども達の食事の様子を観察すると、うまくスプーンを使うことができていない子ども達が何人かいた。その子ども達は最近アスラマに来たとス

イクラマさんが教えてくれた。アスラマに来る前の生活では、スプーンを使う習慣が無かったため使い方にまだ慣れていないのである。同じような理由で、歯を磨く習慣が無かったために、歯が溶けて黒くなっている子ども達もいた。アスラマに来て少しずつスプーンの使い方を学び、歯磨きをする習慣を身に付けているのである。

アスラマに来て4日目の日に私達は、アスラマにいる子ども達の出身村の一つであるバニユポ村を訪れることができた。バニユポ村はアスラマからバスで約1時間半かかる場所にあり水不足、貧困に苦しむ村である。私はバスで移動中に、車窓から見えた景色に驚かされた。出発して最初のうちは周りに緑色の葉を付けた木が多くあったが、途中から景色が茶色に変わった。道路の両端に気が植わっているが、幹は細く、葉も付けずに枯れていた。水不足が影響している。山は乾燥しほとんど木が生えていなかった。水の流れていない川も見た。川幅3メートルはありそうな所に、水一滴も無かった。たとえ雨が降ったとしても、乾いた土が全て吸収してしまい川の水となることが無いとのことだ。日本では見ることもない初めて見た景色に言葉を失った。

私達が訪れたバニユポ村にはぶどう園が広がっていた。ここにも水不足の影響があり、稲作は水を多く使用するためできない。したがって、水をあまり必要としないぶどう栽培を行っているのである。収穫したぶどうは主にワイン用に出荷し、そこから収入を得ている。しかし、収入の約七割は地主に納めなければならない、主食のとうもろこしを、1日に一食するのがやっとという貧しい状況にある。アスラマから一緒に連れてきた子どもの家を訪ねた。家は農園の中にあり、十畳ほどの大きさで、電気は小さな裸電球があるだけだった。子どもにお願いして、家の中の台所を見せてもらった。台所の中は、薄暗く狭かった。とうもろこしがある他、黒く汚れた鍋があった。村の中には、外に台所が設置してある家庭もあった。台所といっても日本のようにコンロがあり、流しがあるというようなものではなく、石で作った小さな釜戸が一つあるだけで一見台所とは思えなかった。良

い衛生環境にあるというには程遠いものであった。

家から一步離れた外の所にマンディ場があったが、外壁も何も無かった。さらに、水は驚くほど黄色く濁っていた。私はその水に近づくことにさえ怖かった。それなのに子ども達はこの濁った水で髪の毛や体を洗っていると思うと、恐ろしく感じ鳥肌が立った。もし自分が同じ環境で生活することになったらと考えとき、生活の苦しさを感じ子ども達のことを思うと、涙を流さずにはいられなかった。

私はバニユポ村を訪れた後から、親や兄弟と離れてアスラマで暮らす子ども達の寂しい思いを少しでも和らげたいと思う気持ちが強くなった。それゆえ子ども達の前では常に笑顔でいることを心掛け、手遊びやおいかけっこをしたりして子ども達とたくさん遊び、たくさん子ども達を抱きしめた。子ども達の名前を覚えて呼んであげると嬉しそうな顔をしてくれるのでたくさん名前を呼んであげた。

子ども達は毎日無邪気に笑っていた。本来ならば私達が子ども達に元気を与える立場なのだが、逆に私達は子ども達の笑顔から元気をたくさんもらった。子ども達の笑顔は宝物だと思う。この宝物をずっと守っていききたい。そのためにもIWCの活動がこれから先もずっと続いていくことを願い、私自身も募金などの形で間接的にでも支援に携わっていきたいと思っている。

<最後に>

ワークキャンプの中でたくさんの人と出会い、人の温かさをたくさん感じる事ができた。ホームステイではホストファミリーは私達を快く迎え入れてくれ、毎朝、毎晩温かい紅茶とお菓子を出してくれた。イブは私達を本当の娘のように思ってくれて、いつも優しく抱きしめてくれた。

インドネシアの学生には、日本語の授業の翻訳、買い物する時のお金の支払いなど本当にたくさん助けてもらった。また、インドネシアの学生はそれぞれ个性的で明るく、優しく、一緒にワークキャンプを行うことができて楽しかった。18日間と

いう短い間で仲良くなれたのもインドネシアの学生のフレンドリーさのおかげだったと思う。本当にありがとう。

アスラマにいる子ども達のことを教えてくださったスイクラマさん、私たちの体調に昼夜問わず気を配ってくださった美和さん、ワークで共に汗を流したフォルマン、本当にいろいろとお世話になった。たくさんの人と出会い、たくさんの方の支えがあったからこそ、私達は18日間のワークキャンプを無事に終えることができたと思う。本当に心から感謝しています。

事前研修を含め約半年の間、IWCの活動を行ってきた。この期間中たくさんを経験してきた。この経験の中で考えさせられることも多々あり、自分自身を成長させるために良い時間だった。

ワークキャンプを通して得ることができたもの、学ぶことができたものをこれからの大学生活の中で更に高めていき、更なる自己の向上に努めていきたいと思う。

Terima kasih

Akari Yamaguchi (a-chan)

Menurut saya keberhasilan program ini dikarenakan oleh kerjasama dari berbagai pihak. Terima kasih untuk tuan rumah homestay kami, widia reed foundation, Bali Protestan Christian association, seluruh warga desa belimbing sari, bpk. Swikrama, anak - anak dan seluruh staff panti asuhan serta kepada semua yang terlibat dalam program IWC, terutama kepada Perawat Miwa Ishii yang selalu setia memperhatikan kesehatan kami sepanjang hari, saya ingin membayar kepedulian dan perhatian atas kesehatan kami.

Terima kasih bagi seluruh Mahasiswa Indonesia, mereka sangat ceria dan ramah, 18 hari yg unik dan menyenangkan yang telah saya lewati bersama - sama, membantu saya

ketika berbelanja,serta menjadi penerjemah saat kelas bahasa jepang.

Walaupun saya tidak bisa berbahasa Indonesia, kalian sangat baik bagi saya, terimakasih atas sambutan hangat yang telah kalian berikan. Saya sangat senang dapat menghabiskan waktu dengan keluarga saya di belimbing sari.

18 hari yang telah saya habiskan di Bali bagaikan mimpi, saya tidak akan pernah melupakan liburan musim panas ini karena hal ini sangat berarti,istimewa dan berharga bagi saya.

Melalui kamp ini saya banyak mendapat pelajaran yang berharga, saya akan lebih lagi belajar tentang nilai - nilai kehidupan dan berusaha untuk selalu meningkatkan diri dalam segala aspek kehidupan saya.

Saya harap kegiatan IWC ini dapat terus meningkatkan taraf hidup dan lingkungan hidup anak - anak. Saya juga berharap dapat melihat lebih banyak senyuman anak - anak.

心に残るもの

社会学部社会福祉学科 吉田 芽生 (めいめい)



<きっかけ>

福祉関係の仕事に就く。私にはそんな漠然とした目標がなく、夢と言えるほどの強い意欲も持っていなかった。ただ何気なく福祉に興味を持ち、周りからのアドバイスを受けながらこの桃山

学院大学の社会福祉学科を選んだ。そんななか、周りの友人は次々とやりたいことや将来の夢を見つけ出し、私は置いて行かれた感覚からひどく焦りを感じ、それと同時に、本当に私にはやりたいことが見つけられるのだろうかという不安も覚えた。

そんな時、このワークキャンプの存在を知った。私はもともと人と関わることが好きで、興味のあることには積極的に参加しようと思うのだが、どうも変に人見知りで、全く知らない集団や輪の中に入るのは苦手だ。ましてや日本語も通じない異文化の環境で過ごすなんて考えられず、それで高校の時も家族や先生から勧められた留学を拒んできた。

でも、いつまでもそんなことを言っていて、私が本当にしたいことなんて見つけられるのだろうか。自分自身を変えたい。そう思ったことがきっかけだった。

私の姉も、もう卒業したが同じ桃山学院大学にいて、在学中にバリ島でのホームステイや内モンゴルでの砂漠植林ボランティアに参加していた。そこで現地での体験談を聞き、こんな私にも何か見つけることができるかもしれないと思い、このプログラムへの参加を決意した。

<事前研修>

IWCへの参加が決まり頑張ろうと決意したのにも関わらず、いざ研修が始まってみると、やっぱり人見知りがあってか何に関しても消極的で、メンバーの中にもうまくとけ込めずにいた。頭の中では私がインドネシアに行くのだとわかっているはずなのに、どこか他人事のようにも感じられ、こんな気持ちのまま行っても何も変わらないのではないかと、不安になった。でも、日を重ねていくごとに少しずつだがメンバーとも打ち解けあえるようになり、夏休みに入るころには集まることが楽しみにさえなっていた。

夏休み前の研修で先生方からインドネシア語やインドネシアの歴史・文化などを教わり、夏休み中では歌やダンスの練習、日本語の授業のための準備など、皆それぞれのスケジュールがあるなか

大変に思うこともあった。でも、その過程があったからこそその現地での成功があり、ほぼ毎日顔を合わせるうちにみんなの仲もだんだんと深くなっていったように感じる。

<環境の違い>

バリ島に到着した時、まず、予想していた気候と違い暑さをあまり感じず、むしろ日本より涼しくて驚いた。次に印象を持ったのが交通状況で、日本のような交通ルールがないのか、狭い幅でもおかまいなしにバイクが走り、そのバイクの数やヘルメットなしの乗車、2人乗り・3人乗りは当たり前といったような光景に驚いた。

日本とはどこか少し違う味の食事や、シャワーがなく頭から水をかぶるマンディ、自分で水を使って流さなければならないトイレなど、覚悟はしていたがやっぱり最初は抵抗を感じ、辛く思うこともあった。でも日が経つにつれて、気付けばご飯もたくさん食べるようになっていたり、マンディも最初に比べれば抵抗がなくなっていたりなどして、慣れというもののはすごいなと思った。

しかし、いくら慣れたといってもワークキャンプも後半に差し掛かったあたりで体調を崩してしまい、美和さんを始め、いろんな人に迷惑をかけたしまった。一度夜のミーティングも、体調がすぐれずホームステイ先に帰ってしまい出ることができなくて、健康管理がきちんとできていなかったことをすごく悔しく感じた。

<インドネシアの学生>

インドネシアの学生と初めて対面する時、最初はうまく接することができるかどうか不安だったけれど、インドネシアの学生はみんなフレンドリーで接しやすく、安心した。けれども、インドネシア語どころか英語ですら苦手意識を持っている私は、話していてもわからない単語を理解するのに時間がかかり、英語力のなさに落ち込むことが多々あった。でも、そんな私の英語を頑張って理解しようとしてくれたり、インドネシア語を教えてくれたり、片言だけでも覚えた日本語を使い話したり、ふざけあったりしていくうちに、徐々に仲

も深まっていった。6人ともそれぞれ個性が強くおもしろくて、ちなみに歌も聞き入ってしまうほどうまくて、一緒にいる時間がとても楽しく感じるようになった。

今振り返ってみると、インドネシアの学生には、本当に数えきれないくらいのいろんな場面で助けてもらった。日本語の授業での訳や、ショッピングモールでの買い物の時のお金の払い方や管理など、すごく頼りになった。彼らがいなくてここまでやりきることはできなかったと思うし、本当に感謝している。

<ホストファミリー>

私には今までホームステイという経験はなく、ホームステイ先に着くまで緊張と不安でいっぱいだった。しかし、パパ（父）とイブ（母）はそんな私達を笑顔で迎え入れてくれて、すごく嬉しかったことを覚えている。

毎日ミーティングを終えてからの私達の帰宅時間は、いつも就寝が早いパパとイブにとってはもう寝ているはずの時間なのに、毎晩のように私達の帰りを待ち、「おかえり」と言ってくれた。朝は部屋の外から声をかけて起こしてくれて、紅茶やピサンゴレンなどをだしてくれた。必死に指差し本を使いながら、やっと一つひとつの単語を組み合わせたような私のインドネシア語に、伝えたいことがうまく言えなくてひどくもどかしさと悔しさを感じずにはいられなかった。そんな私のインドネシア語でもパパとイブはしっかり聞き取り、会話しようとしてくれた。

こんなにも愛情をくれたパパとイブは本当に家族のようで、だから別れはすごく寂しかった。別れの時、イブに「日本に帰っても、あなた達は私達の家族」と言ってもらえた時は泣きそうになった。私はここのホストファミリーで本当によかったと思った。

<アスラマの子ども達>

アスラマの子ども達は、初めて出会った時から初対面とは思えることができないほどの人懐っこさで、仲良くなるのにそう時間はかからなかった。

抱っこをしたり、ハグしたり、追いかけごっこをしたり、手遊びをしたり、言い出せばきりがないほどたくさん遊んだ。私のことを見つけると、名前を呼びながら駆けつけてきてくれたり、自分と私の名前を書いた内容や、長い文で嬉しいことが書かれた内容の手紙をくれたりしたことがすごく嬉しくて、私もそれに応えることができるように頑張っ て名前を覚えたり、インドネシア語で手紙の返事を書いたりしていた。

この子達の背景には、私の経験したことのない悲しみや辛さがあるはずなのに、それをまったく感じさせない笑顔がそこにはあり、与えるために来たと思っていた私の方が逆に彼らから笑顔ももらっていた。一緒にいる時間を、その光景を忘れたくなくて、私はひたすら写真を撮り続けた。走っているところも、笑っているところも、じゃれあっているところも、何気ないことも全部、写真に残したいと思った。

離村式の日、仲の良かった男の子に手紙をもらい、そこには「あなたのことを忘れない。だから僕のこと も忘れないで」と書かれていた。その日の帰り際、バイバイするためにつないでいた手を離すと、その男の子は「寂しい」と言って泣き、私もおもわず泣きそうになった。いよいよ別れの日、昨晚もらった手紙の返事を渡しにその子のところに行ったが、その子やほかの子の顔を見ると今度は私が泣いてしまった。すると子ども達から「泣かないで！笑って！」と言われ、泣きながらだけ最後に笑顔でお別れすることができた。

私は彼らと過ごす時間が大好きで、短い期間でも泣いてしまうほど濃いものがあった。形にあるものから目に見えないものまで、たくさんのもをもらい、彼らのおかげで貴重な体験をすることができた。

<最後に>

自分自身を変えたい。そう思ったことから始まったこのIWCへの取り組み。この18日間 で得たものは、簡単に言葉では表しきれないほどのものがたくさんある。

自分自身何か大きく変わったとまでは言えないが、普段生活する中にある些細なこと に対しての価値観や考え方、感じ方も、私でも驚くほどガラリと変わっていることを、日本に帰ってき てから強く感じるようになった。私の心の成長にもつながり、言われたことだけしかすることのなかった私が、「なにかもっと私にできることがあるのではないか」と、積極的な気持ちを持てるようになった。過ごした18日間を、ただ「思い出」として終わらせてしまうのではなく、これからの私の人生のなかでしっかりと活かしていこうと思う。

そう思えるようになったのもIWCでの経験をしたからで、その経験をできたのもたくさんの人との出会いと支えがあったからで。いろんなことを教えてくださった先生方を始め、事務所の方々、インドネシアの学生も含めたIWC26のメンバー、IWCの先輩方、美和さん、フォルマンさん、スイクラマさん、インドネシアで出会った人達。このIWCを通じて出会ったすべての人に心から感謝している。本当にありがとうございました。

Terima kasih

Mei Yoshida (Meimei)

Bagaimana Anda memutuskan untuk berpartisipasi dalam kamp kerja itu adalah salah satu tambang dari pikiran. Teman sekitar berurutan aku akan menemukan impian Anda di masa depan dan apa yang ingin Anda lakukan, saya tidak bisa menemukan sesuatu yang konkret seperti aku merasakan kecemasan dan ketidaksabaran. Karena sifat pemalu dan enggan saya telah sampai sekarang lolos. “Saya ingin mengubah diri Anda sendiri seperti itu.” Kesempatan yang saya pikir begitu, dan itu adalah awal dari segalanya.

Sudah sekitar satu bulan saya datang kembali ke Jepang.Saya ingat dengan jelas 18 hari aku menghabiskan di Indonesia masih.

Bila Anda tidak mengerti bahasa Jepang. Juga berbeda budaya. Yang pertama dipenuhi dengan kecemasan sehingga. Orang-orang bertemu di Indonesia Tapi semua orang saya disambut dengan senyum menempatkan saya lembut. Mahasiswa Indonesia, Bapak Swikrama, Bapak Forman, Miwa Ishii, tuan rumah keluarga, Anak-anak Asurama. Saya menghabiskan banyak waktu dengan orang-orang dan pertemuan. Mengajarakan Indonesia. Mengajarakan saya pentingnya tetap sehat. Mengajariku hubungan antara orang. Saya mendapat senyum. Bahwa kami datang untuk memberikan, lawan beberapa bentuk untuk apa itu tidak terlihat, aku punya banyak hal.

Juga menyakitkan secara fisik dan mental, ada saat-saat ketika tidak bekerja. Tetapi, berkat dukungan dari semua orang di sana saya mampu bertahan sampai akhir. Sendirian aku tidak bisa datang sejauh ini. Temui orang, belajar, merasa, melalui pengalaman ini, nilai, mental, persepsi, saya mampu mengubah. Aku baik untuk dapat bertemu dengan mereka. Saya berterima kasih kepada semua orang yang bertemu melalui IWC. Saya tidak akan melupakan 18 hari dihabiskan di Bali. Terima kasih banyak.

友と共に学ぶ

社会学部社会学科 池田 鷹弥 (タカヤ)



私がこの第26回国際ワークキャンプ（以下IWC）の存在を知った時、直ぐに参加したいと

思った。普段の学生生活では関わることのない人達と出会い、見たことのないものを見て、触れたことのないものに触れ、感じたことのない思いを感じ、たくさんの体験をし、自分の視野を、世界を広げる。それらの経験は私の考えや価値観を形作ったり、壊したりしながら今後、私の成長の糧になるかもしれないと思うと、わくわくした。だからIWC参加者合格発表欄に私の学籍番号があったときは本当に嬉しかった。

IWCの活動自体は5月から始まり12月の報告会、解団式まで続く長いプロジェクトだ。

<インドネシア学生と共に>

約7時間のフライトでインドネシア・バリ島に着いた時は、ついに来た！！と胸高鳴ったのを覚えてる。パリに島到着してからすぐインドネシアの学生と合流し、夕食を共にしながらミーティングを行った。男子学生：多才なひょうきんものユスフ、周りをよく見て気が利くイッサ、マイペース爆発のアデ

女子学生：笑顔のかまってちゃんノフェリン、元気のかたまりオシン、表情豊かなおてんば娘ベティの（日本人学生に負けず劣らず個性豊かな）6人。この時初めてIWC26期の24名全員が集まった。

彼らには驚かされ圧倒させられてばかりだった。インドネシアの学生の英語力の高さと、日本語を学びたい、理解したいという積極性、何より、日本の学生のつたない単語ばかりの英語でのコミュニケーションを成立させる程の理解力と根気よく理解しようとしてくれるその姿勢に頭の下がる思いでとても感心した。（自分の英語力のなさには傷心した。）初めてのミーティングでは、お互いに緊張し言葉の壁で会話にいたらなかったりすることこそあったものの、年齢も近く、インドネシアの学生も日本人の学生も仲良くしたいという思いがあったからか打ち解けるのは早かった。打ち解けてからは日本の友人に接しているのと何ら変わらないほどだった。お互いの家族や国の話、食べ物の話など、たわいもない話を、英語と覚えてたのインドネシア語と日本語を交えて笑い合

いながらたくさん話した。お互いの部屋に遊びに行ったり、プールで泳いだり、朝5時に私たちの部屋に来るから何事かと思えば、「散歩に行こう!」と言ってきてくれたり、プリンビンサリ村では買い食いして話しながら帰ったりと、一緒に全力でバカをした。特別なことなんて何もなかったのに、気付けば彼らとのコミュニケーションを難しく感じなくなっていた。

当然のことながらインドネシアの学生の協力なくしてこのワークキャンプのプログラムは成り立たない。ムラヤ第一高校訪問やアスラマの子ども達とのスポーツ交流、小中学校訪問など様々なイベントで惜しみなく協力してくれた。ギターもキーボードもできるし、アドリブだってお手のもの。機械にだって強いし、包丁さばきだっすごかった。(しかしこれに至ってはチャプレンが一番すごかったのには驚いた。)歌もこっちが歌うのをやめて聴きたくなる程上手だった。多才すぎる彼らに私も「君はどう思う?質問はある?」とよく意見を伺った。伝わるようにゆっくりと、真剣に答えてくれることが嬉しかった。彼らがいると、とても心強かった。本当に感謝している。必ずまた会いに行きたいと思う。

<プリンビンサリ村・ホームステイ先にて>

プリンビンサリ村に入り、アスラマに到着してすぐに、思わず笑ってしまう程かわいい衣装の子ども達が歓迎の演奏を披露してくれた。それから息つく間もなく案内されたホームステイ先は少し小高い坂の上にある、“Theインドネシア”の家だった。直ぐにイブ(母)リリィとパパ(父)モルティ、それに娘のフェリシア、息子のアルノウが迎えてくれた。やはりここでもほんの最初だけ緊張していたが、パパの冗談やアルノウが直ぐに緊張をほどいてくれた。パパとフェリシア、アルノウに英語が通じることもありコミュニケーションは直ぐにとれた。同じのホームステイ先の先輩、創さんの存在も大きかった。創さんはいつも私を気にかけてくれたし、後輩の私にとっても優しくかった。気を遣わずにいれたが、正直少し抜けていて私がしっかりしなくてはならないところも多々あ

り、しっかり後輩の私を成長させてくれるのだ。ホームステイ先の家と部屋自体は決して大きくなく、ベッドとキャリーバッグを広げると足の踏み場がなかったし、どこへ行くにもリビングを通らなければならなかったが、今思うとかえってそれで良かったと思う。自然と話す機会は増えたとし、今日は何があって、どんな一日だったのか、そんな話を毎晩できた。アルノウとフェリシアと邦画を見たことも、お互いの家族の話をしたことや、放し飼いにされている犬の対処法や星の話などをたくさんパパに教えてもらった。イブは私が鼻歌で「Hari ini」(インドネシアの代表的な歌の一つ)を歌っていると、一緒に歌ってくれた。そして、「こんなひょうきんな息子ができて楽しい」と言ってくれた時は感動した。日に日に家族になっていく。まさにそんな感じがしていた。それだけに別れの朝は悲しかった。それでもパパは「家族のように思っている。必ずもう一度帰っておいで。」と言ってくれた。私には帰れる家族が増えたのだ。

<アスラマの子ども達の笑顔のために>

「アジアの人々との協働から学ぶ」、「アスラマの子ども達のために」何より大きなIWCとしてのテーマでもある。子ども達との様々な交流イベントも、今回のワーク内容であるアスラマの前の道路の舗装もエバリュエーションでの会議内容も子ども達の生活環境や教育改善、全てはこの言葉に繋がる。だからこそ、私には考えれば考える程難しかった。プリンビンサリ村での生活にも慣れだしてきた頃、この言葉の意味を本当に理解出来ていなかったのかもしれないと痛感した。ワーク一つとってもその日のペースと効率を重視してしまい班員と全体を見れていなかった。体力にも個々の違いがあることも、あえて効率を落とすことも班長と個人としての仕事以外にも、もっと気を配り、周りを見て俯瞰して全体を、班員を気にかけるべきだったし、イベントごとにそうした様々な反省は日々尽きなかった。

それでも村での生活を笑って過ごせたのは初めて会った日から変わらないアスラマの子ども達の笑顔のおかげに他ならなかった。遠くから「タカ

ヤー！！」と手を振ってくれる、走りより抱きつき、また名前を呼んでくれることがとても嬉しかった。早朝の眠たさもワークの疲れも一瞬で吹き飛ばす屈託のないあの笑顔に、毎日元気をもらっていた。男の子にはいつだって身体を使って全力で遊び女の子にはバカをやって笑わせる。そして怪我をしている子には簡単な治療をしてあげる。不器用な私に子ども達のために出来ることは決して多くなかった（というか、全力で遊ぶくらいだった）、だからこそ子ども達との交流には迷わずに済んだのかもしれない。遊んであげるとは程遠く、子ども達に遊んでもらっているといえる程時間があれば子ども達と遊んだ。その都度いろんな笑顔を見せてくれた。本当に可愛かった。

そんな子ども達の出身村を訪れる機会があった。そこには衛生なんて二の次、三の次で干上がってしまった川と、必要最低限の生活スペースとそこに隣接する家畜小屋、それに生活用水にしては汚れすぎている貯水場があった。何より印象に残ったのは行きのバスの中で一緒に村へ行っていたアスラマの男の子が泣いていたことだった。離れて暮らす家族を心配していたのだろう、バスを降りると家族の元へと走っていった。当然、アスラマの子ども達には色んな背景があるのだ。あの笑顔に癒してもらっただけでなく、それを少しでも垣間見ることが出来たことも良い経験になったと思っている。

<ワークキャンプを通じて>

異文化にも言葉にも、日本に居ては先ず悩むことのないものに悩んだことも、かけがえなく楽しかったことも、18日間これまでになかったほど濃い毎日だったといえるし、これまでになかったほど貴重な体験だった。帰国した今、出発前と劇的に変わることなんて思い当たらないけど、この18日間の体験を振り返る度に頑張る気力が湧いてくる。私はこれからの人生で数多くの困難に直面したり新しい出来事を体験するだろう。そんな時に、このワークキャンプでのたくさんの経験や輝かしい思い出は、きっと私の背中を押して成長させてくれるだろう。これからゆっくり時間をかけてこ

の経験は、私の中に生きてくるのだと思う。そしてこれからもまだまだ大切だ。私の大学生活はまだまだ続くからだ。大学生活は自由だからこそ、何もしなければ何もない。自分から動き出してこそ充実する大学生活だと思っている。この経験を無駄にするようなことがあってはならない。このワークキャンプでの経験を皮切りにもっともっと多くのことを体験したい。

<感謝の意を>

今回もたくさんの人達の協力があって私達IWC26期が活動することができたのだろう。事前研修の段階から感謝を述べると尽きない程多くのことを多くの人達が私たちの知らないところで支えてくれていた。引率教職員の方々や集会室の皆様、アスラマの職員の方々に子ども達、ホームステイ先の私の家族、支えてくださった全ての方々のおかげで、私には必ずまた会いたい人達がたくさんできました。本当にありがとうございました！！

それから、IWC26期の皆様、大好きです。色々な思いを共に抱え、悩み、笑いあってくれたこと本当に感謝しています。本当にありがとうございます。どうか、どうかこれからも末永くよろしくお願いします。

Pengalaman adalah guru yang terbaik

Takaya Ikeda (Takaya)

semuanya segar.

Pemandangan di Bali, iklim, dan budaya,

Pada perjalanan 18 hari, Juga telah bertemu dengan mahasiswa Indonesia.

mahasiswa Indonesia mampu menghabiskan waktu yang baik bersama-sama atau menari bersama-sama sambil mengajarkan budaya, bahasa negara satu sama lain untuk dapat berbicara.

Terima kasih karena sudah memahami kami yang sangat tidak berbicara bahasa Inggris. Saya sangat senang dengan sikap Anda. Saya pikir saya merasa banyak kecemasan untuk berpikir. Saya minta maaf. Saya sangat bersyukur, bahwa Anda berdua banyak pengalaman, selalu membantu saya!! Sebuah keluarga tuan rumah, memberitahu Anda bagaimana cara untuk menyingkirkan anjing, berbicara tentang bintang, menonton film bersama-sama di Jepang, berbicara dirumah satu sama lain. Saya senang bahwa bercakap-cakap diluar sambil sarapan kopi hangat dan lezat setiap pagi. Aku rindu rasa itu. Ketika “Seperti anak saya” mengatakan kepada saya bahwa saya benar-benar senang!!! Dalam Asrama telah mendapat kekuatan yang sehat, selalu tersenyum setiap hari dengan anak-anak. Melalui berbagai pertukaran, senyum terbaik yang menyentuh mungkin kenangan dari perjalanan ini!! dan Aku harus memasak untuk mengisi perut setiap hari dan cuaca kami yang ramah. kita semua telah memberi saya kekuatan untuk memenuhi kamp kerja dan semuanya tidak diragukan lagi. Saya tidak pernah melupakan kenangan ini. Saya sudah selesai!! disana, memiliki teman akrab, keluarga menyapa saya dengan ramah, Bermain dengan banyak anak-anak dengan segenap kekuatan, Saya bisa tertawa satu sama lain. Untuk pertama kalinya saya berkunjung kenegeri yang jauh dan banyak membantu disana. bertemu dengan banyak kata terimakasih, juga merasakan kelembutan, banyak mendapat pengalaman juga. itu semua menyenangkan dan saya merasa senang. terimakasih banyak!!!!

saya juga selalu ingin kembali ke Bali. saya ingin anda memanggil nama saya lagi waktu kita bertemu kembali. dan, kita akan berbicara lebih banyak dan lebih beragam. saya sangat suka Indonesia!!!!

何ができたのか

社会学部社会福祉学科 吉田 桃子 (もも)



<準備段階>

事前研修ではインドネシア語とバリの文化やワークキャンプの基本的なルールなどを学ぶ。正直、少し行くのが嫌になる時期もあった。ただだんだんIWCのメンバーと仲良くなっていくにつれて、インドネシアについて学ぶことも楽しくなっていった。ただ、この事前研修は楽しいだけではなくバリに行って活動する上で大切なことだらけだったのに「楽しい」だけで行っていた時期もあったのでこれからボランティアに行く身として、良くなかったと現地に行ってから少し反省した。事前研修をきっちり頭に入れて行けば、もっとバリの人達やインドネシアの学生とたくさん会話できたと思うと後悔した。次回からのIWCのメンバーには事前研修を聞くだけではなく、頭に残しておくことを勧めたい。台本や順序決め、交流会の練習など予想以上に膨大な数の準備が必要だった。ただ、頭では分かっているメンバーと一緒にいると楽しさが勝ってしまい、準備もろくにせずしゃべってばかりの日もあった。そして最後になってばたばたする、という面もあったので反省しなければいけない点だと思う。ただ、こうやって思い出していくとどうしても自分の悪かつ

た点がどんどん出てきてしまうが、この準備段階の時間はメンバー間の壁をなくすのに本当に良かったと思う。やるべきことをそれぞれの分担に分かれてすることや、その作業をこなしていく上で各々のポジションが決まっていく、ということは集団行動で本当に大切なことだし、バリに行ってから行動するのに役立ったと思う。インドネシアの学生と共に分かりやすく準備できるように、またアスラマの子ども達が楽しんでくれるように、という気持ちで努力したことは、実際にバリに行ってから反映されたので良かった。

<バリ>

まるで高校生が旅行に行くみたいに、最初はワクワクという気持ちでいっぱいだった。ただ「インドネシアの方々にも少しでも貢献できるように」「自分が成長するように」という決意だけを抱いて飛行機に乗った。バリに着いてもにおいの違いや車、建物、現地の人など全てのものにワクワクしていた。バリの人達は本当に優しい。ごはんもおいしい。景色もきれい。予想していたよりもバリの環境が素晴らしくて驚くことばかりだった。

<アスラマ>

初めてアスラマに入った時のことは本当に脳裏に焼きついている。初対面の私達に対するたくさんの子どもの笑顔、想像もしていなかった素晴らしい演奏、笑顔で渡してくれた黄色い花。正直ここまで歓迎されるとは思っていなかった。なぜこの子ども達は初めて会う私達をこんなに歓迎してくれるんだろう？ なぜこの子ども達はこんなに私達に笑顔に向けてくれるんだろう？ と最初は驚きだった。不思議だったけれど、子ども達の笑顔を見ていると、演奏を聴いていると、自然と笑顔になっていった。初日から子ども達のパワーを感じた。そして日本での親睦会の時に先生方がおっしゃっていた、「子ども達の目が輝いている」という意味を理解した。初対面の私達に向けられた笑顔の中にある二つの目は本当にキラキラと輝いていた。正直、『児童福祉施設』という場所から想像して『輝く』という言葉には繋がらなかつ

た。むしろ、理由があって親と離れて暮らしている子ども達の目が輝くわけがない、と思っていた。だけど、子ども達の目を見てその考えはなくなった。もちろん、初日にアスラマの子ども達の全員の目を見ることができたわけではないので子ども達全員の目が輝いていた！ とは断言できない。けれど、少なくとも私が花をもらうところを見ていた数人の子ども達の目は、輝いていた。その事実には驚いたし、感動した。しかし、こんな小さな子ども達が家族と離れて、アスラマに入って、周りにはまだ友達にもなっていない子ども達だらけ。そんな状況で最初から目を輝かせて笑うことなんてなかったらどうとも思った。辛い思い、寂しい思い、悲しい思い、どうしようもない思い、言葉では表せない思いを抱いて、たくさん泣いて、その上で今のこの子ども達の笑顔があるのかと思うと、なんとも言えない気持ちになった。こんな小さな子ども達が私なんかの想像よりも、もっと辛い経験をしてきたと思うと胸が少し痛くなった。私達がいる間にこの子ども達たちをどれだけ笑顔にできるか、小さな幸せを感じさせることができるか、不安になったけれどとにかくできることはしようと改めて思った。初めてアスラマの遊具がある場所に行った時、彼らから私達の方に寄ってきてくれた。たどたどしいインドネシア語しか話せない私達だったが、名前を聞いたり年齢を聞いたりしたらすぐに打ち解けることができた。その日からはバリの文化で育った子ども達特有の人懐っこさで毎日会えば抱き着いてきてくれて、ワークで疲れても子ども達に会うと本当に癒された。子ども達はたくさん名前を呼んでくれる。「Ya!」と返事するだけで嬉しそうな顔をする。何度も何度も「Momo! Momo!」と私の名前を呼んでくれて、私からも名前を呼ぶと本当に嬉しそうな顔をする。名前を覚えてもらうことが本当に嬉しいんだと思った。今では、もっとたくさんの子どもの名前を憶えてたくさん名前を呼べば良かったと少し思う。言葉が100%通じなくても一緒に遊んで、名前を呼びあえば困ることはほとんどなかった。しかし、子ども達の気持ちをもっと分かったかったのでもっとインドネシア語を身につけて行

けば良かったと思った。だが、私達が笑えば意味はよく分からないけど子ども達は笑顔になって、子ども達が笑顔になれば私達もよく分からないけど自然と笑顔になっていた。言葉がよくわからないからこそお互いに相手の表情をよく見て感情を読み取ろうとしていた。笑顔の連鎖はすごく嬉しくなった。最後の離村式の時はずっとひっついてきて、少し悲しげに笑う顔は今でも忘れられない。「帰らないと」と、私が言うと黙って首を横に振って私を引き止めた。本当に離れたくなかった。

アスラマにいる中で、プリンペンサリ以外のアスラマで、たくさん子ども達の表情を見てきた。もちろん笑顔はたくさんあったけど、交流会で久々に会えた家族に甘える顔、出身のバニュポ村と一緒に行って到着すると同時に「はやく降りよう！」と言った笑顔、日本食パーティーの時に私達のホストファミリーを見た時の自分達の家族を思う悲しい顔。どれも『家族』から繋がる表情だった。私達は家族じゃないから、何もできないもどかしさをたくさん感じた。それでも、まだまだ子ども達にできることはたくさんあった気がする。これから子ども達を笑顔にするものの中には絶対『家族』が存在するんだろう、と思った。

<ホームステイ>

私は仲が良かったメイと同じホームステイ先だったので少し安心した。しかし、それでも不安だらけだった。初めてパパとイブに会った瞬間のことは本当に忘れない。ろくに挨拶もできず「どうしよう…」とおどおどしていた私達を優しい笑顔で迎えてくれたパパとイブ。毎朝出してくれた少し甘く温かい紅茶とピサングレンやお菓子。他のレストランでピサングレンが出てきたが、やはりイブのピサングレンが一番だった。一緒にピサングレンを作ったり、早朝に散歩した。パパ達の息子さんの家族や親戚が来て喋ってくれた。どれも鮮明に思い出せる大切な思い出になった。「モモとメイには日本に家族がいるだろうけど、私達はインドネシアのあなた達の家族だよ」と、パパが言ってくれた言葉は一生忘れない。

<インドネシア学生>

ベティ、オシン、ノフェリン、イッサ、アデ、ユスフ。大量の日本語授業の台本を訳してくれて、授業の時もサポートしてくれて、日本語ばかりのミーティングをがんばって理解してくれて、体調が悪いメンバーがいると「オゲンキデスカ」と声をかけてくれて、たくさん笑わせてくれた6人は本当に大切な、大切な友達になった。最後の空港であんなに辛かった別れは初めて経験した。だけど一生会えないわけじゃない。会いに行こうと思えば会えるし、連絡だってとれる。18日間ずっと一緒に今そばに居ないのは寂しいけれど、それよりも彼らから学んだことや彼らと経験できた貴重な18日間を大切にしたい。

<さいごに>

今回、このIWCに参加してたくさんの方のことを学んだ。たくさんの方にも出会えた。たくさんの方のことを経験させてもらった。自分の成長に繋がったと思う。だけど、子ども達や村の人達に何もできない自分や行動できない自分にもどかしさや不甲斐なさを感じる時も多くあった。もっと率先して動けば良かった、もっと自分ができることを探せば良かった、もっと話を聞けば良かった、自分の時間を削ってでももっと村の人や子ども達と一緒に過ごせば良かった。言い出せばきりが無いぐらい「もっとやっておけば良かった」と思うことがある。自分は成長させてもらったけど、私は彼らに何を与えることができたのか、何ができたのか。正直分からない。だけど時間は戻すことはできない。もう日本に帰ってきた以上、私がこれからできるのはバリで経験したことをどれだけこれからの自分に反映できるかだと思う。この貴重な経験を絶対に無駄にはしない。最後に、IWC26のメンバー、引率の先生方、アスラマの子ども達、ホストファミリー、バリの方々、たくさんの方々にたくさんの方のありがとうを伝えたい。Terima kasih banyak.

pertama-tama saya mengucapkan

Momoko Yoshida (Momo)

Terimakasih banyak kepada semuanya. Bali merupakan pulau yang indah, pemandangannya sangat indah. makanannya enak, orang-orangnya juga baik. rumah kedua saya setelah jepang adalah Bali, karena di bali saya mempunyai keluarga baru dan saya ingin balik ke bali lagi. saya ingin bertemu mereka lagi, orang-orang yang saya sayangi. saya tidak akan pernah lupa selama camp kerja 18 hari itu. saya tidak bisa berbahasa indonesia dengan baik, tetapi bapak dan ibu di homestay mengerti dengan bahasa indonesia saya yang sedikit aneh. setiap pagi ibu membuatkan sarapan pisang goreng dan teh hangat, enak sekali, saya sangat suka sekali. bapak dan ibu selalu memanggil saya 'ketut momo' saya selalu ingat panggilan itu. mereka sangat baik dan ramah. Yusuf, Novelyn, Betty, Ade, Ishak, Osin. Mereka sahabat saya. Mereka lucu. saya selalu tertawa bersama mereka, mereka sangat baik. saat saya sedang tidak enak badan, mereka khawatir dengan saya. mereka selalu bertanya 'tidak apa-apa?' saya ingat itu. dan senyuman anak-anak di asrama saya selalu ingat saat saya sembahyang senyuman mereka ada Terus-terusan. saya merasa orang yang sayangi bertambah dan mereka ada di bali. saya mendapat pengalaman yang berharga dari camp krja ini. saya belajar dari pengalaman yang saya dapat. terima kasih banyak kepada keluarga baru saya di bali.

報告書

社会学部社会学科 喜田 将王 (しょうおう)



<インドネシアへの出発>

早朝、8:30頃にいつもの顔ぶれが久しぶりに揃いました。全員少し寝不足の様でした。機内に入る前からIWCメンバーのテンションは既に高く、どこか落ち着きのない感じでした。機内ではみんな思い思いのことをしていました。飛行機での移動時間は約7時間ですが、あっという間に過ぎました。デンパサール空港に着くと空港は異様な空気に包まれていました。ディアナプラホテルまではバスで移動し、1時間程バスに揺られました。渋滞の中ゆっくり進むバスから見たバリ島の町の景色は日本とは別世界でした。

<インドネシアの人と文化>

思い返してみても、最も印象に残っているのがインドネシアの人の“人間性”です。私が率直に感じた印象は、インドネシアの人はものすごく優しく親切で、大人も子どもも関係なくフレンドリーだという印象でした。本来の人間が在るべき姿を目にした感じです。このことについてはインドネシアに到着後、インドネシアの大学生と合流し交流を深めていくうちにそれをより強く感じました。交流を深めようとしているのだから親切になって当たり前だろうという一面もあるかもしれませんが、人見知りの性格の私にとって2週間程の短い期間であそこまでフレンドリーに接するのは到底考えられないことです。

また、インドネシアの人たちは優しいだけではなく、心が純粋な様にも思えました。なぜ純粋なのだろうかと考えた時にまず挙げられるのが宗教のことだと思います。インドネシアの学生は全

員キリスト教で、主イエス・キリストが教える隣人愛をしっかりと守っているのだなと思いました。そしてまた、バリ島が観光地ということもあってか、接するインドネシアの人は常に笑顔でした。それゆえ、日本から来た我々もインドネシアの人と同じように自然と笑顔になっていきました。なので、インドネシアに行く機会がある方はすぐに現地の人と打ち解けて、仲良くなれると思います。

現地に着くまでの間いろいろとインドネシアの雰囲気想像していたのですが、空港に着いて迎eriを見まわすと、割と日本の沖縄の様な感じで、すぐに親しみが湧きました。ただ、沖縄には居ない目をギラつかせた危ない感じの兄ちゃんらが空港の外ではたむろしており、少し怪しい感じはしました。また、雰囲気だけでなく、時間にルーズな所やお金に適当な所も沖縄とよく似ていると思います。結局、国は違えども南国はどこも一緒の様な気がしました。

日本と食文化は全く違うだろうと予想していたのですが、基本的に日本と似ていると感じました。アスラマでの食事の際は必ず白ご飯（タイ米）とおかずといった感じで、おいしい料理もたくさんあり、思っていた程悪くはなかったです。しかし、食べすぎるとお腹を痛めます。特に、アスラマで最後に食べた会食でのバビグリンと言う豚の丸焼きは現地でしか味わえない味でした。とてもおいしかったので、お腹を痛めないように食事制限していたことも忘れて、豚ばかり食べていた所、その日の夜中に私はお腹を痛めました。

生活をしていく上で、一番困ったことはトイレでした。初めは文化の違いだから仕方がないと思っていたのですが、家によっては水洗設備も整っており、トイレトーパーもあったので、文化の違いではなく貧富の差だと感じました。プリンビンサリ村という小さな世界の中でも貧富の差があることにショックを受けました。

<インドネシアでの生活>

アスラマに着いて歓迎会が終わるとすぐにホームステイ先の発表がされました。誰とペアになる

のか、家はどこなのだろうか、不安と緊張でいっぱいでした。そして、竜汰とのペアが発表され、不安はより一層増しました。決して竜汰と仲が悪いわけではないですが、それまでお互いあまりしゃべったことがなかったので、これから2人で生活していけるかが不安でした。

その様なことを考えている内にアスラマの子どもに連れられて、ホームステイ先に着きました。私達のホームステイ先は50代ぐらいのパパ（父）とイブ（母）の家庭でした。息子さんはすでに家を出ており、私達はその息子さんが使っていた離れの家に泊まらせてもらうことになりました。離れの家なので、イブとパパが住んでいる家とは独立していました。玄関も私と竜汰しか使わない玄関があり、ホームステイと言うよりは、2人暮らしに近かったです。家の中へ入ると部屋は2つあり、日替わりで交互に寝ることができました。また、玄関を入れてすぐ両脇にソファとテーブルが置いてあったので、そのソファに座り、毎晩竜汰と話しをしていました。そして驚いたことに、他のIWCメンバーの部屋も私らと同じぐらいの部屋の広さがあると考えていたのですが、そうではありませんでした。他のメンバーのホームステイ先の部屋は、部屋の中にベッドが1つか2つおいてあり、床にキャリーバックを広げるとスペースが一杯いっぱいでもとても狭く、何だか申し訳ない気持ちになりました。幸運にも、私達のホームステイ先はIWCメンバーの中で一番広い部屋でした。

しかし、一見快適な様に思えるかもしれませんが、私達のホームステイ先がアスラマから一番遠かったのです。片道15分はかかりました。大きな坂を2つ越え、夜になると街灯が無くなる場所まで行き、放し飼いの犬3、4匹に吠えられながらの道中は辛かったです。このまま歩いて行くと村から出て行くのではないかというぐらいの勢いでした。プリンビンサリ村の人はみんなバイクで移動するので、歩いているのはバイクの無い私達だけでした。バイクが横を通って行くたびにむなし気持ちになりました。

<ワーク>

ワークはアスラマへ入る坂道の舗装とがれきだらけの空き地を再び畑として使えるように元へ戻す作業をしました。まず、砂利道をコンクリートの道へ変えるのですが、坂になっているので、上り下りが大変でした。ちょっと作業ただけで汗だくになりました。作業は現地の土木作業員さん達と一緒に行いました。私達だけではコンクリートで綺麗に舗装された道は完成しなかったと思います。汗水垂らして必死で頑張ってくれた土木作業員さん達に感謝します。たぶん土木作業員さん達からすると、私達IWCの生徒が手伝ってくれたという感覚になっていると思います。

畑の作業は、今から20年以上前に病院が在った空き地を畑に変えるものでした。空き地は病院を取り壊した際にでたブロックの破片でいっぱいでした。後先のことを考えずに取り壊すところにもインドネシアらしいなと感じました。先程とは違い、畑の作業にはおじさん達は一切関わってないので、自信を持って私達がしたと言い張れます。最終的に、がれきだらけの土地を耕し、緩やかな段々畑にした後、とうもろこしの種を植えました。次の日、畑を見に行くと、放し飼いにしている鶏が種をきれいに食べていました。ですが、鳥にも負けずにくすくすと育ててほしいです。

<ワークキャンプの体験を通して>

長いようで短かった18日間のワークキャンプを終え、終わった後で感じたことはいろいろとありますが、まず始めに感謝しなければならないと感じました。アスラマに居る78名の子どもの内、半分の子供達には親がいません。アスラマの子供達と比べるのはおかしいかもしれませんが、私には親が居ます。親が居らず、異質な環境で親の愛情を知らずに生きている子ども達も居るわけです。今まで親が居ることが当たり前で、親が居て良かったなどと考えたこともありませんでしたが、改めて今親のありがたみを考えるようになりました。

そしてまた、このワークキャンプで得た体験を、これから社会に出るに当たってどのようにし

て自分のものにするのが重要だと考えます。体験と経験は違います。体験はその時に得たこと感じたことです。経験は自分の知恵にすることです。今の私にはまだ体験しかありません。これからは、このワークキャンプのことだけではなくて、大学生活4年間の中で、得たこと感じたことを自分の知恵にし、卒業する頃には様々な経験がある状態で在りたいです。

saya pikir

Shoo kita (Shoo)

Terima kasih begitu baik kepada saya bahwa siswa di Indonesia, yang datang kepada kami dari Jepang. Terima kasih saya pikir, pengalaman yang baik dan saya bisa. Indonesia siswa bagaimana mereka pikir aku sangat cemas. Saya pikir berikut ini, dan aku ingin kau datang ke Jepang untuk mahasiswa Indonesia. Mungkin sulit, Anda tidak boleh melewatkan.

Saya pikir saya bisa memiliki teman dari pertukaran seumur hidup sedikit lebih dari tiga minggu. Tidak akan pernah lupa bahwa siswa Indonesia.

Dan juga, saya ingin mengunjungi Bali suatu hari nanti. Terima kasih Anda miliki saat itu. Harap berhati-hati.

Anda mungkin sementara di Indonesia, telah dianggap konsisten. Ini adalah bahwa hal itu miskin. Sejak datang ke Indonesia dari negarane-negara maju Jepang, saya pikir saya tidak perlu kasihan. Namun, saya tidak tahu perasaan Anda pikir ini sangat lucu apakah benar. Ketika datang ke bagaimana dan apa yang Anda pikir saya merasa kasihan, saya pikir saya membawa keluar emosi yang saya merasa menyesal bahwa semua apa yang Anda lihat. Apakah hanya saya. Saya membenci bahwa ada perbedaan seperti itu meskipun itu adalah orang yang

sama. Saya ingin melakukan sesuatu.

《参加学生のレポート》

Adeodatus Hyronimus



First, I want to thank God for His blessings for this Work Camp activities (IWC 26th) can be done very well and smoothly from the first day until the last day according to what has been planned.

Through this opportunity I also say thank you to of all the staff and children who have helped us during we stay and work in the Blimbingsari village so that we can finish social activity very well.

There's a lot of experience I have gained during the camp's work, ranging from the opportunity meet and build friendships with friends from Japan, participate to see how to make the road and help to make the road along with several neighborhood Widya Asih II orphanage at Blimbingsari, assist in the preparation of land used to grow corn, playing with the children is also a pleasant experience, especially when children are able to show their talent in drawing. So many activities that we have to go through while in the Blimbingsari village, make the day go by so quickly, and without feeling we all had to split up each other to return to our ordinary life, but the memories over together from the first day until the last day will not

forgotten as beautiful and meaningful memories.

I hope this work camp can be maintained and continued, so that the orphanage Widhya Asih II can continue to develop into an orphanage that is able to fulfill the needs and education of abandoned children and children from disadvantaged families. I also hope that someday I can take part of this social activity.

That's all I can say, if there are wrong words please forgive me.

Thank you.

Yusuf Edward



Shalom,

First, grateful to Lord Jesus Christ of His mercy and graces for us and also I would say my big appreciates for all Japanese team (teacher, chaplain, staff's, Japan students) for the good cooperation and kindness, their all so great and adorable. Thanks for them that we can complete our work camp very well.

Work camp has been going on for 26th years, certainly a lot of things that have been passed and of course it could be a matter of learning, especially for Work camp participants themselves. Evaluation of the advantages and disadvantages of this Work camp, make it more qualified

each year.

I can't deny, through the work camp, many people have been helped a lot there, especially for those who each year makes Belimbingsari being the venue for this Work Camp program. Because the work camp was held to establish our cooperation between Japan and Indonesia in the field of education and to help improving lives of citizens in Indonesia (Bali), especially citizens at Belimbingsari and Widhya Asih orphanage. Sure I'm very grateful for that.

I, personally very excited to attend this work camp, because of this work camp, I've got tons of new experiences and new great things. For me this work camp is very good for the development of students (Japan and Indonesia) especially in terms of physical, mental and psychological.

Because the work camp isn't directly provide teaching about life for students, it covers how the importance of cooperation of caring among others, helping, sharing among themselves, respect each other, establish communication and relationships with others in a different languages, characteristic, culture, behavior, lifestyle and habit.

Watashi wa kono wākukyanpupuroguramu wa tsugi no sedai no tame ni keizoku sa reru koto o negatte.
Also I wish the program could be more qualified. And last but not least is a cooperative relationship between Japan and Indonesia will be better than before, especially in terms of education.

Arigatōgozaimashita.

(ありがとうございました)

日本に神の祝福を



Firstly, let we all give thanks to The God because his power be with us every time so we have finished it very well. I give thanks to every one who has participated in this work camp. I give thanks to the staff of Widhya Asih who always accept me and prepare the food. I give thanks to st. Andrews university, the teachers and the students who always work hard for helping Widhya Asih.

Widhya Asih Work Camp is very amazing because continue until now. It has been 26 years, we have felt the advantages so much. Our orphanage has gotten many things from this work camp. I feel very happy for I was in this work camp because this work camp has been organized very well. I can learn many things from this work camp. I proud to all of you, you are full of spirit to help the poor children. I want to be like you. You and us have teached to Senior High School, Junior High School, further more elementary school it means so much to the students. I think they will be on fire to learn nihon go. Many games is creative make them be happy to study japanese language. We also have welcome party, farewell party, it's very enjoyable for us and the children. We also have worked for the entrance construction and corn field so we can finish it on time. Thank you very much.

We also have made nihon no tabemono, it is very delicious. Many guests like that

â€œKareâ€. We also have made some evaluation for helping Widhya Asih to be better. I hope we can applicate the evaluation together. I hope our work camp can be usefull for the orphanage. Thanks for the opportunity so I can join in this work camp. Arigato Gozaimasu

By : Ishak Prenamia/ Indonesia no Gakusei

Novelyn Rossy Andrear



Shallom! First, I want to say thank to God for all I had in the world, about all of chance that God gave to me, and for His love to me. I also want to say thanks to all of Japanese members, Indonesian members, IWC's committee who made this camp, and Widhya Asih Foundation. My name is Novelyn. I am from Dhyana Pura University. I was joined in IWC 26th because my teacher told me about this camp. My friend has told me about this camp before. He said that this camp very enjoyed and I could make a friendship with Japanese members. I just believed not at all. My friend also told me to joined IWC 26th.

Honestly, I felt lazy about the Japanese Course. But I still made it enjoyed with other friends. And the special day had come, when we waited for Japanese Members in Dhyana Pura Hotel. After they had come, we were happy and very nervous because our Japanese language was poor. But I don't care. Because their

Indonesian were poor too. Haha

Over all, I was glad about this camp and all of IWC's members and committes, and Widhya Asih Orphanage II's families. I had learned about team works, new family, love, responsibility, and many more. I want to go to Blimbingsari again if I have spare time. I want to visit my new family, my new sisters and brothers there. And I hope to go to Osaka-Japan for study next year. Actually Japanese members are very nice people and friendly, but the problem is we couldn't talked fluently because of different language. We have tried to spoke Japanese language. I think this is my best experience that I had before. Met people who come from the other country, studied together, eaten together, worked, and everything we did together. Of course I'm happy and proud because my other friends can't feel like me. After IWC have finished, we were back to our true life. I just felt awkward. Usually I wake up and then go to Orphanage for work. But now, after I'm wake up, I must go to University. I feel this is not my life. Haha

Thanks for the letter, for the gifts that Japanese students gave to us, Indonesian students. Don't forget I want to say thanks to my Host Family, who help me and my friend when we stayed in their home. Thanks for being my new parents and welcome us in Blimbingsari. I can't give you more than you gave to me. But I believed that God will always bless and save you.

Many words that I want to say but I can't say because I was confused how to say that. In Blimbingsari I have many lesson and I felt lucky because i had joined this Work Camp. I hope we can met again next time. The last greeting, thanks to Japanese students (team A, team B, team C, team D), Mr. Miyake, Mr. Matsudaira, Yusuke-san, Mao-san, Ibu Miwa, Bapak Nengah, Kak Forman, Bapak Wayan,

My Host, the Children who I loved. Thanks for all that you gave to me. God bless us!

Betty Alfasia Sukariath



Shalom!! My name is Betty Alfasia Sukariatha, you can call me Betty. I'm one of the representatives from Dhyana Pura University that was invited from GKPB for IWC 26th. First of all, I would like to say thank you very much to St. Andrew University and all my friends from Indonesia to join this work camp and also Widhya Asih Foundation for inviting and giving me chance to join the 26th In International Work Camp (IWC). I'm very happy and this my experience really such an amazing can join IWC and so many things that I could get and learned during the 16 days we're together in IWC.

Thank you for the opportunity, so I can know the meaning of togetherness in my life and memories that I won't ever forget in my life. That was a pleasure for me could join this program because this program only held once a year so that it wasn't any students could join it and of course that was my first time. Those things are so wonderful and unforgettable moment to me. IWC 26th is the most wonderful camp in my life. There is a kind of cultural exchange in this camp, we can create a togetherness of one another and can know each other's culture. Japan and Indonesian so

very different language or culture but I also studied a variety of Japanese culture and language.

I was very happy, because in work camp I can have many friend especially Japanese students. I know, I couldn't speak Japanese very well, but along with the day all things became so very fun because the Japanese students and the lectures were so very kind, warm and so friendly. I was very happy when we still hard worked together, I know although the days was very hot but from the smile that radiated from one another, creating a different feeling inside that is a rising spirit. And no matter how hard that we worked, if we take it with a happy heart and spirit in self all that would be very easy and enjoyed.

In an orphanage, I can saw that these children's also need love more than now, I can saw that at the time when Indonesian students with Japanese students gave attention and care to the children, I can saw the joy radiating from their faces. Thankfulness for what Jesus has given to us. The moment has already changed my perspectives for my life. I have to be more, more and more grateful for everything that I have got today 😊

And I don't forget to say Thank you very much my family in homestays, Bapak Nyoman dan Ibu Putu and family. Thank you for all you've given. Ibu putu always provides food, Me and my friend Yukichi very like and happy when we stay in Blimbingsari. We were treated like their family and we'd like to stay at home and the family of my own.

Many interesting experiences that I had with Japanese students. I was very amazed with their enthusiasm in this camp, how they arrange and prepared the event so that it could run smoothly. I am also very grateful because now I have friends from Japan, they're like my

best friends especially Team B ^^ thanks for supports me. They are very fantastic. It's excited and we are still contact each other via social network.

I hope the IWC won't be stop and always continue, I believe that IWC in the future will create something more than before. Really so many unforgettable experiences, moment and the things that we can share with others. Once more I thank you as much as possible to the orphanage friends, Blimbingsari people, my friends from Japan Professor Miyake, Pastor Isao, Sensei Guchi, Sensei Mao, Takaya, Takatoshi, Akari, Achan, Ryuta, Shingo, Hajime, Mei, Momo, Nacchi, Susumu, Kosuke, Saki, Yuki, Yukichi, Jun, Maho, Shoo and also my friends from Indonesia Bapak Nengah, Ibu Miwa, Kak Forman, Yusuf, Novelyn, Ade, Ishak and Osin. I will never forget you all and this moment. I hope we can meet again in Japan or In Indonesia. God bless you all. Miss and love you all. Arigato Gozaimasu.

Rosvita Flaviana Osin



In the first chance, I want to give thank to God for His grace and love, so that I could feel this valuable experience. Second, thank to my campus and authorities who have entrusted me to be their representative in the event. This is a great honor for me to be able to represent the campus in the activities of

external agencies, especially with foreign students. to be honest, I refuse to accept this assignment. The causes is clear. I can't speak Japanesse language. Butthe fact that I can joke with them has shown that language is not a big problem for us to converse.

Three weeks with Japanesse student is the one of the greatfull moment in my life. I got new friends, new experiances, and also can learn many things from this event. Many stories and a wonderful story has been strung in a fun three weeks. Until i feel, you all like my new family.

I have some own impress about this event, choosing an orphanage as a place of social work is the appropriate choice. I feel my social life was challenged by following this activity. This is a very good choice.

Schedule of activities from morning until night so well. I learned a lot about the habits of the Japanese people that always on time in every activities.The people in our home stay are very kind. I feel them as my another family. In the other hand, I also have some Request. I think, it would be better if the number of indigenous students and Japanesse student balanced. This reason is to support the better socialization.

In the last chance, I reccomend this event to be continued next time. This event could train us to know the other culture and to learn good things from foreign people.

第26回 インドネシア・ワークキャンプ 学生預り金精算書

単位:円

収入の部		支出の部			
参加徴収金		3,060,000	旅費 (ガルーダ・オリエントホリデーズ・ジャパン支払分)	@114,210×18	2,055,780
(内 訳)			(内訳) 航空運賃84,960	内訳' @84,960×18	
学生負担	@140,000×18	2,520,000	開空施設使用料2,650円・航空保険 600円・燃料サーチャージ26,000円	内訳' @29,250×18	
			インドネシア入国審査(機内)料金を円貨支払	@2,010×18	36,180
			インドネシア出国時空港使用料	@1,327×18	23,886
(内 訳)			現地での宿泊、食費、交通費その他 (YAYASAN WIDHYA ASHIIH支払 学生負担分)		
参加補助金	@30,000×18	540,000	プリンピンサリ村支出分	約8,036×18	144,649
対学生補助54万円のうち20万円は社会貢献基金(IWC)、34万円は課外活動等補助費			食事代8/22～9/1 交通費8/24、27、9/1、訪問、食料等買出し その他(8/22バケツ5個、テントレンタル料、8/17歓迎用垂れ幕2枚、8/21ワーク用軍手1箱、8/21～29ティッシュ、紙皿)		
			デンパサール支出分	約14,142.6×18	254,566
			昼食代8/21、22、24、9/2、9/3、ミネラルウォーター等飲料9/1、3、4 バス・トラックレンタル代8/20～9/5 荷物運搬6回 バロンダンス鑑賞、寺院拝観料、K高原入場料、バティックシャツ代、IWC宣伝用カレンダー代		
			ディアナプラ・ホテル支出分	約25,603.3×18	460,860
			(5泊宿泊費、夕食5、昼食2、AGAPE FESTIVAL)		
			(消耗品)ユニフォーム(ホーム入り)	@2,756×18	49,608
			(消耗品)速乾Tシャツ(オリジナルプリント入り)	@1,400×18	25,200
			(損害保険料)特別プログラム(飯盒炊爨)時の保険(18/22学生負担)	@54×18	972
			剰余金(返却予定)		8,299
合 計		3,060,000	合 計		3,060,000

注:剰余金8,299円については、参加者一人当たり461円を返金する。

第27回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第27回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する
予定です。

【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以来実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しながら、学生たちが主体的に運営し、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

それは、事前の学習・訓練・準備によって始まります。現地の子ども達、現地学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動、そして事後の報告書作成・報告会の開催を通してなされる「協働」についての総合的な体験学習です。同時に、日本とインドネシアの関係についての学習、バリの歴史・文化に直接触れる実生活の中でのインドネシア語学習の機会となっています。

【期間】2013年8月19日～9月5日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、
第2ウディア・アシ(児童養護施設)

【ワーク内容】プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事

【主催】桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト教会

【 共 催 】 ディアナプラ大学

【 注意事項 】 月・木の5限インドネシア語クラス10回・インドネシア文化クラス10回必修となります。

【 単 位 認 定 】 4単位認定されます。

(共通自由科目「海外研修—国際ワークキャンプ」)

【参加自己負担金】【約140,000円～150,000円の予定】

(為替レートの関係で若干変化しますが、大学並びに教育後援会の援助により、標記の金額が自己負担分となります。)

※パスポート取得、予防接種等に関する費用、任意の海外旅行保険代は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明
会にお越し下さい。

(4月中旬頃を予定しています。)

ご質問等は……キリスト教センター内

チャペル事務室まで

編集後記

ワークキャンプが終わり、達成感や反省、成果、変化などをメンバー18人がそれぞれのものを手に入れ持って帰ってきた。そして、報告会に向けて、またインドネシアワークキャンプをより多くの人に興味を持って頂けるようにと願い、報告書の作成をした。各テーマに対して、それぞれの意見、反省、成果を取り入れながらメンバー全員で作り上げていった。

私達の感じたこと、肌で触れた子ども達の温かさ、数えきれないくらいの体験、全てをこの報告書を通じて多くの人に知ってもらいたいです。

2012年の春からワークキャンプが始まり、今まで私達に手を貸して頂き、共に協力してくれた方々、全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。今後ともこの国際ワークキャンプが限りなく続くことを願っています。

国際ワークキャンプ報告書編集委員
太西 晋、吉田真悟、香川貴俊、中村紗希

第26回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 報告書

発行日：2012年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131 (代)

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360 (代)



St. Andrew's University

IZUMI, OSAKA, 594-1198, JAPAN